

345

345

b



始



35.2.18

345-6



アレキサンデル・クーパーリン著  
昇曙夢譯

活の河闘

東京博文館蔵版



大正  
5. 3. 20  
購求



アレキサンダー・クーパー

### ▲著者の略傳

アレキサンダー・クーパーは一千八百七十年に生れた。遠い先祖は長い間露國の主權を握つてゐた韃靼の汗の一人であつたと云ふ説もある。父は官吏であつたが、クーパーが生れた年に亡くなつた。遺産としては何にもなかつたので、クーパーの母は後に殘された三人の子供を一手に抱へて寡婦救護所といつたやうなところへ入つた。クーパーの楽しい少年時代は則ちこの憂鬱な寡婦救護所の大きな建物の暗い壁の中で過されたのである。其うちにクーパーはモスクワの陸軍幼年學校に入學することになつた。クーパーの母も其翌年に看護婦の試験に及第して、それから二十年間と云ふもの有名なマリンスキイ病院で貧乏人の爲に全く獻身的に働いた。晩年には職を辭して再び元の寡婦救護所に歸つて、餘生を安らかに送つて居たが、到頭一昨年七十歳で世を逝つた。

話に據ると、クーパーの母は意旨の強い、權威のある、そして何處までも明漸な理性と確固たる主義の上に立つた、善良な、慈悲深い賢婦であつたと云ふ。そして一ばんサーシャ(クーパーの愛稱)を愛してゐたので、クーパーが母から受けた感化は非常に深いものであつた。クーパーの性格も其大部分は母から承けたものだと言はれてゐる。クーパー

プリンも亦母を大切にし、自分の定めなき生涯の悲みも喜びもみな母に打明けて、其度毎に聰明な母の忠言を聴くのであつた。母は何時も息子の文學上の發展に注目して、作物の出る度に、必ず手許に取寄せて、自分でも読み、寡婦救護所の人達にも讀ませて、正直な讀者の偽らない批評を聞いて子供のやうに喜んでゐた。クープリンが時々其作物のうち母のことを記憶してゐるのはかうした深い情愛から來てゐる。

クープリンは懸て幼年學校を終つてアレキサンドロフ士官學校に移つた。此處を卒業すると、一千八百九十年から九十七年まで七箇年の間軍隊勤務に服して中尉まで昇つた。それから職を退いて全然文學的生活に入つたのだが、既に士官學校に居た頃彼は短篇を書いてそれを或る諷刺雜誌に載せたと云ふので、當局者の忌諱に觸れ、營倉にふち込まれたことがある。軍隊在勤中の作は凡て其頃の『ルースコエ、バガツスツウオ』に載つてゐる。けれども彼が作家として始めて文壇に名を知られた處女作は『モロフ』と云ふ職工の生活を描いた作である。續いて『沼』、『生活の河』等の名篇に廣く天才を認識されて、それから一作を出す毎に文壇の呼物となつて、遂に一千九百五年、ゴリキイの經營に係る月刊創作集『ズナーニエ』第六輯に一代の傑作『決闘』を公にするに及んで、名聲忽ち天下を轟かし、露國文壇は勿論、世界文壇の上に確固不拔の地歩を占むるに至つた。爾來クープリンが發

表した作物は随分多數に上つてゐるが、中にも『幼年學校生徒』、『猶太女』、『ルイブニコフ大尉』、『スラムフ』、『イヅムルド』、『犬の幸福』、『祝杯』、『船暈』、『ヤーマ』等は最も人口に膾炙してゐる。是等の作物は今日『クープリン集』として諸方の書肆から競争的に發行されてゐるやうだが、何れも早や七八卷に達して多數の版を重ねてゐる。

#### ▲著者の地位

クープリンはアンドレーエフと殆んど同時に文壇に現はれた作家で、この二人は其作風の著しく異つてゐるに拘らず現代露國文壇の雙璧と呼ばれて、共に十數年來新興文學の確立に努め、何時も新しい文藝運動の牛耳を取つてゐる。我邦にはクープリンの傑作又は代表作と言はれる程の作物がまだ一つも翻譯されてゐないので、アンドレーエフほどには聞えてゐないやうだが、露西亞本國に於ての評價は今では寧ろクープリンの方がツ、とアンドレーエフの上に出て、現代露國文壇のオーソリチイを以て許されてゐる。アンドレーエフが動すれば孤立的なるに反して、クープリンの周圍には常に若い作家の群が集合して文壇の中心勢力を形造つてゐる。故トルストイ伯が生前クープリンの作物に、アンドレーエフ其他の現代作家の作物よりも遙かに多大の價値を置いて始終愛讀して居られたと云ふ一事

を見ても露國の社會乃至文壇に於けるクープリンの評價を裏附するには充分であらうと思ふ。實際トルストイ歿後の露國文壇はクープリンに依て重きを爲してゐると云つて宜し。今の露西亞文學は概して郷土藝術の範圍を脱して廣く世界的に交渉してゐるだけに、だん／＼露西亞らしい匂いと色彩とが薄れかゝつてゐる。此間に立つて獨り露西亞文學の約束たり特色たる寫實主義を踏襲し發展して祖國の實生活に忠實な觀察を向けてゐるのがクープリンである。他の作家等が神秘主義や象徴主義に墮して、空想若くは觀照の世界に概念的な抽象的な題材を取扱つて居る中で、クープリンは獨り現實生活の委曲に注意を怠らない。他の作家等が捨て、顧みない平凡俗惡な日常生活にも彼は多大の尊敬を拂つてゐる。若しアンドレーエフを運命の詩人と見、ソログーブを死の讚美者と見、アルツイバーセフを獸慾の謳歌者と見るならば、クープリンは正しく觀察の詩人若くは實生活の詩人と云ふことが出来る。クープリンの世界は何處までも實驗の世界である。實驗の爲には飛行機に乗つて天上界の觀測を試みたこともあり、潜水夫となつて海底の觀察を試みたこともある。露國現代の生活は其有ゆる内容と共に凡て彼が經驗の範圍内に屬する。大露西亞、小露西亞の生活より猶太人の生活、軍隊の生活、俳優の生活、労働者の生活、職工の生活、其他藝人社會や大學生や田舎教師や女學生や淫賣婦の生活に至るまで彼が眼を注がない方面は

殆んど無いと云つて宜い。觀察と取材の範圍の多面的なる點に於て彼の右に出づる者は現代作家中一人も居ない。殊に彼は經歷だけに軍隊生活の描寫には驚く可き知識と非凡の技倆とを持つてゐる。或意味に於て軍隊生活は一定範圍の内に社會の各階級を網羅してゐるから、現代社會生活の病弊や缺點を研究するのに最も都合の好い方面であるかも知れない。

彼は其作風に於て普通チエーホフの後繼者だと言はれて居る。けれどもチエーホフの寫實主義を其極致まで發展させた點に於て、またチエーホフの創始した新しい散文の形式を完成した點に於て彼は正しくチエーホフ以上である。態度から言つてもチエーホフには幾分か誇張的な、ボンチ繪式なところが認められるが、クープリンは何所までも眞面目である。第一クープリンは曾て嘲笑したことがない。が、チエーホフはこの嘲笑を藝術の武器として廣く應用してゐる。本來から言ふとチエーホフの主人公其自身は笑つてゐるのではない。寧ろ彼等は眞面目に行動し、眞面目に俗生活を營んでゐるのだが、それをチエーホフは諷刺や嘲笑で鞭撻しながら滑稽的に取扱つてゐる。之に反してクープリンの主人公は何等屈托の様子もなく、極めて樂天的に笑つてゐる。でなければ絶えず意地悪い嘲笑を口に湛えてゐる。それでゐて作者自身は何時も眞剣である、嚴肅である。また題材の取扱

ひ方に於ても、チエーホフは、ヨリ多く神経質的である。彼は常に俗悪なる事象に對して鋭い諷刺を浴せかけてゐる。クープリンの取扱ひ方は、ヨリ多く平靜である。どんなに小さな、下らん、無意義な事象でも彼は極めて冷静に、穩健に、平面的にそして抒事詩風に描いてゐる。所謂徹底自然主義の行方である。然し一面に於て、クープリンは意力の謳歌者として、強者の味方として、特に新しき思想の表白者として、ヨリ多くゴリキイと似通つてゐる。彼は凡ての作に於て何處までも生を享樂しようとする強い華やかな思想に胸を躍らしてゐる。灰色に燻んだ現實の痛ましい描寫と輝かしい未來に對する甘い豫知覺と、是れがクープリンのあらゆる創作の根底を爲してゐる二つの要素である。

#### ▲『決闘』の價値

『決闘』がクープリンの作物中に於て第一位を占むる傑作であると同時に現代文學の生み出した最大産物の一つであることは既に多數批評家の一致してゐる點である。クープリンは此の『決闘』を書く爲に畢生の心血を搾つたといつてもいゝからゐるで、彼の特色と云ふ特色は殆んど此の一篇のうちに結晶されてゐる。だから藝術家としてのクープリン、思索家としてのクープリンを研究するには此の小説一篇で充分である。或る批評家は『決闘』を評

して斯う言つた。『決闘』は覺醒せる個性の頌歌である。人生の大と美とを歌つた讚美歌である。それと同時に思想の暗闘時代に生れて、輾轉不遇の生涯を送つた過去の人々の沈痛なる悲劇であると。『決闘』がいろ／＼の意味に於て、我々に興味深い作であることは是れでも解る。『決闘』は一個の完成せる藝術品として作者の技倆手腕を遺憾なく發揮してゐるばかりでなく、更に露國最近の社會思潮を活寫してゐる點に於て一部の思想史として綿密な研究に値する。

露西亞最近思潮の特色は七十年代に於ける社會思潮の興奮に續いて起つた八十年代（チエホフ時代）の幻滅時代を葬り去つて、思想上、氣分上乃至藝術上の虛無主義的個人主義に轉じたところにある。斯かる思想上の大變動が個性を無視し壓迫し其屈服を要求した前代社會の反動であつたことは言ふまでもない。そしてその前代社會の幻滅時代から生氣鬱勃たる新時代に入らうとして新舊思想の盛んに暗闘した過渡期の思想感情を最も大膽に、最も忠實に、そして最も藝術的に表現したのが此の『決闘』である。試みに『決闘』の中心的人物の思想と、かの個性を全然社會の犠牲としてゐたチエホフ時代とを較べて見たら、露國に於て社會思潮の變動が如何に激甚であつたか、察せられやう。『決闘』が我々の心胸に共鳴する所の多いのも其の内容が深く近代思潮の核心に觸れてゐるからである。『決闘』の

主人公が謹慎中自己の個人性を自覚したその瞬間から社會を疑ひ、共同生活を疑ひ、兵役を否定し、博愛を否定し、有ゆる神々を破壊し去つて、其廢墟に新らしい神——「自我」——を造り上げて、有ゆるものを「自我」の前に跪拜せしめんとし、若くは有ゆるもの、うちに「自我」を擴大して行かうとする其の努力と煩悶とは近代人の自意識に伴ふ心的過程が底の底まで汲み盡されてゐるやうな心持がする。けれどもクーブリンの個人主義は我々が今迄アンドレーエフや他のモダン派に於て見るやうに或個性を他の個性から區別し、隔離しやうとするのではなく、寧ろ進んで各個性の爲に、彼等が個人的に生活し、經驗し、歡樂し得る権利を保障せんとする、謂はゞ生産的個人主義である。其所に是迄の個人主義と異つた新しい一面がある。この特質は懸てクーブリンをして其の注意の焦點を人間の外面生活から内面生活に向はしめた所以であらう。彼の作物に於て人間の隸屬と自由とは、外的方面からでなく、専ら内的方面から取扱はれてゐる。物質的でなく、政治的でなく、精神的に、藝術的に取扱はれてゐる。この點から言つて、作者の人生觀を研究するには主人公のロマシヨーフよりも寧ろ其の蔭に立つて、主人公の思想行動を支配してゐる副主人公ナザンスキイの方が、ヨリ多くの興味があるかも知れぬ。けれども彼等は矢張新舊思想の暗闘時代に生れた過渡期の人として多少前代の影響を脱することが出来なかつた。彼等の唱

へてゐる新個人主義を實現して彼等の理想通りの新生活を建設するにはそれ相應の素養と精力とが必要であるのに、彼等は徒らに理想のみ大にして實力が之に副はなかつたのである。彼等が生を意識し、生を謳歌してゐながら自身却て生の爲に苦しみ、生を全うし得なかつたのは寧ろ當然のことであらう。

『決闘』に現はれた思想と時代思潮との關係は以上述べた通りである。が、『決闘』の價値が主として藝術品としてのテクニクに存することは言ふまでもない。『決闘』は藝術品として技巧の新、描寫の巧、文章の美は更なり、鋭敏なる觀察、深刻なる解剖、潑瀾たる官能、豊麗なる情調等凡そ現代文學の特質と云ふ特質、要素と云ふ要素は悉く之を具備し、それに作者獨特の辛酷な諷刺と魅力ある表現と徹底せる主觀とを以てして露國文學史上殆んど古今獨歩の地位を占めてゐる。各々題目の違つた、一寸見ても何の脈絡も無さうな幾許かの短篇を集めて一個の纏つた長篇を造り上げた技巧の新しさ、主人公を中心として其の周圍に活躍してゐる聯隊將校四十餘人の性格を一々浮彫のやうに描き分けた手腕の凄さ、また其等の人物を取巻いてゐる細かな事象を一々洩さずに根氣能く傳へ得たる再現力の健かさ、用意の周到さ、氣分の豊かさ——是等は作者の老練なる筆致と共に我等の大に味ふべき點であるが、更に主人公の主觀に深く突込んで、其の有ゆる思想感情を限なく浮き立た



せた、落着きのある、徹底した描寫振に至つては將に近代小説の典型的描法として我等の大に學ぶべき點であらうと思ふ。作者は新寫實派として徹頭徹尾客觀的の態度を取つてゐながら、我々には自敘傳ではないかと思はれるほど、主人公の内面生活と作者のそれとがピッタリ溶け合つてゐる。そこへ來ると、客觀主觀の別などはてんで作者の念頭に無いやうだ。またそれでなければいかに徹底した描寫は出來ないと思ふ。クローブリンが性格描寫に於て常に成功してゐるのは斯うした態度から來てゐる。主人公が時々自己を第三者の位地に置いて、三人稱で自己の思想感情を端的に表白してゐるところも面白い思ひ付である。私は是迄露西亞の小説には随分眼を通して居るつもりであるが、『決闘』ぐらゐ露西亞人と云ふもの、能く現はれてゐる作に接したことがない。之を譯してゐる間、私は何時も露西亞人を眞つ裸かにして其素肌や肉の顫動を眼のあたり見てゐるやうな心持がした。新寫實主義は今日露國文壇に於て最も偉大なる勢力を占めてゐる思潮の一つであるが、此の新しい運動の直接の先驅となり、源泉となつた作物がクローブリンの『決闘』であつたことを考へると、此作の影響が如何に偉大であつたを思はずには居られなう。

最後に『決闘』の社會的反響に至つては一時輿論の中心となつたからで、随分社會を騒がしたものである。それは恰度日露戦争の終るか終らない頃である。それではなくてさへ一

體に人心の沸騰してゐる所へ此の小説が出て、露國軍隊の裏面、將校社會の内幕を忌憚なく暴露し、露國敗戦の主因を悉く指摘して天下に知らしめたと云ふので、忽ち世間の評判に上り、既に此點だけでも全國を轟かすやうな大騒ぎであつた。それから七八年経つた今日でも露國の陸軍部内では此作が時々問題に上り、未だに議論の火花が絶えないやうである。實際『決闘』を讀むと成程是れでは露國が負ける筈だと首肯される節の多い。單に此點から言つても『決闘』は我々戦勝者に取つて二重の興味がある。それやこれやで『決闘』の賣行きは大したもので、凡そ近代小説の中で此書ぐらゐ有ゆる階級を通じて多く讀まれた作物は無いと言はれてゐる。

#### ▲附篇『生活の河』

本書の結末に附した『生活の河』は矢張クローブリンの作で、一時北歐の評壇を動かした名篇である。ちよつと他の作家には真似の出來ない新しい技巧と充實した内容とを持つたシムボリックな作だ。恐らくクローブリンの數多い短篇中の白眉であらう。篇中自殺した大學生の遺書は臆病な過渡期の人が新時代の前に告白した訣別の辭として有名なものである。此の遺書の中に現はれた思想は『決闘』の主人公の思想をもつと發展させた最後の結論と見

て宜い。「決闘」の主人公は單に個性開放の新らしい時代が近きにあることを信じてゐた。けであるが、「生活の河」の大學生は既に自から新生活の渦中に入つてゐる。けれども彼は同じく過渡期の人として、新時代の要求に副ふことが出来ないと言ふ自覺を持つてゐた。普通新人に免れない此臆病な自覺は遂に彼を自殺に導いた原因であつた。新生活に目醒めつゝある今の青年にして此作に共鳴を感じない者は恐らく一人もなからうと思ふ。

大正元年十一月三日

譯者識

## 凡例

- 一、「決闘」は一千九百六年露都「ズナーニエ」社の發行に係る『クロープリン集』第二巻から譯したのだが、他に同地の文藝雜誌「ニーツ」社から今年中の雜誌の附録として發行してゐる『クロープリン全集』をも傍に置いて時々参考した。
- 一、「決闘」の翻譯は今年の六月から八月まで、暑中三ヶ月間に亘る殆んど不斷の努力であつたので、私に取つては眞實汗水を搾つた苦心の勞作であつたことを告白して置きたい。
- 一、原書には單に章目を切つてあるだけで、別に題目を掲げてゐるのではないが、譯本には一章毎に題目を附することにした。これは一般讀者の便利を計つたつもりであるけれど、或は要らない勞であつたかも知れぬ。
- 一、書中の人名は大抵名と父稱と、時には苗字までも一緒になつてゐるのだが、それを一々掲げるとなると、特に「決闘」の如き人物の多い小説に於ては、大變煩しくなつて記憶を妨げるやうな恐れがあつたから、譯本には單に苗字だけを掲げることにした。勿論必要の場合には相當の注意はして置いた。
- 一、書中散見する軍隊、舞踊、球突、カルタ等に關する術語は出来るだけ其道の人に問ひ

質し、自分でも研究して、可成誤謬の無いやうに努めたつもりであるが、それでも専門家の眼から見たら、これはと思はれる點が無いとも限らぬ。若しさう云ふ點に氣附かる方もあつたら特に御教示を願ひたい。

一、書中一般讀者の理解に何うかと思はれるやうな事柄には特に簡単な註を入れて置いた。讀者に依ては或はそれを迷惑に感じられる方があるかも知れない。さる場合には御勸辨を願ひたい。

一、書中フランス語が割合に多かつたので、簡短なものは原文と譯文とを一緒に出して置いたが、稍々長いものは煩雜を避けて、譯文だけ掲げることにした。

一、フランス語の譯は悉くセルゲイ・エリセーエフ君に教を乞うた。それから振假名は譯者に餘暇がなかつたので全部廣島觀一郎君を煩した。特に記して兩君の厚意を謝する次第である。

一、卷末に附した短篇『生活の河』の譯は前に言つた『ニーワ』の附録の『クープラン全集』第二卷に據つたのである。

以上

# 決闘

## 目次

一	練兵場	.....	一
二	途上	.....	三一
三	從卒	.....	四六
四	戀人	.....	六二
五	春の夜	.....	九〇
六	謹愼中	.....	一二六
七	譴責	.....	一五〇
八	集會所	.....	一七三
九	夜會	.....	二〇〇
十	救練	.....	二三八
十一	學科	.....	二四六
十二	獸舍	.....	二六二

決

闘

生活の河

附 篇

以上

十三	誕生	日	二八五
十四	野遊	び	二九七
十五	閱兵	式	三三三
十六	煩悶		三七一
十七	逍遙		三九九
十八	遊興		四一〇
十九	格闘		四三五
二十	將校會議		四五〇
二十一	水の	上	四六五
二十二	その	前夜	四九五
二十三	報	告	五一〇

露光量違いの為重複撮影

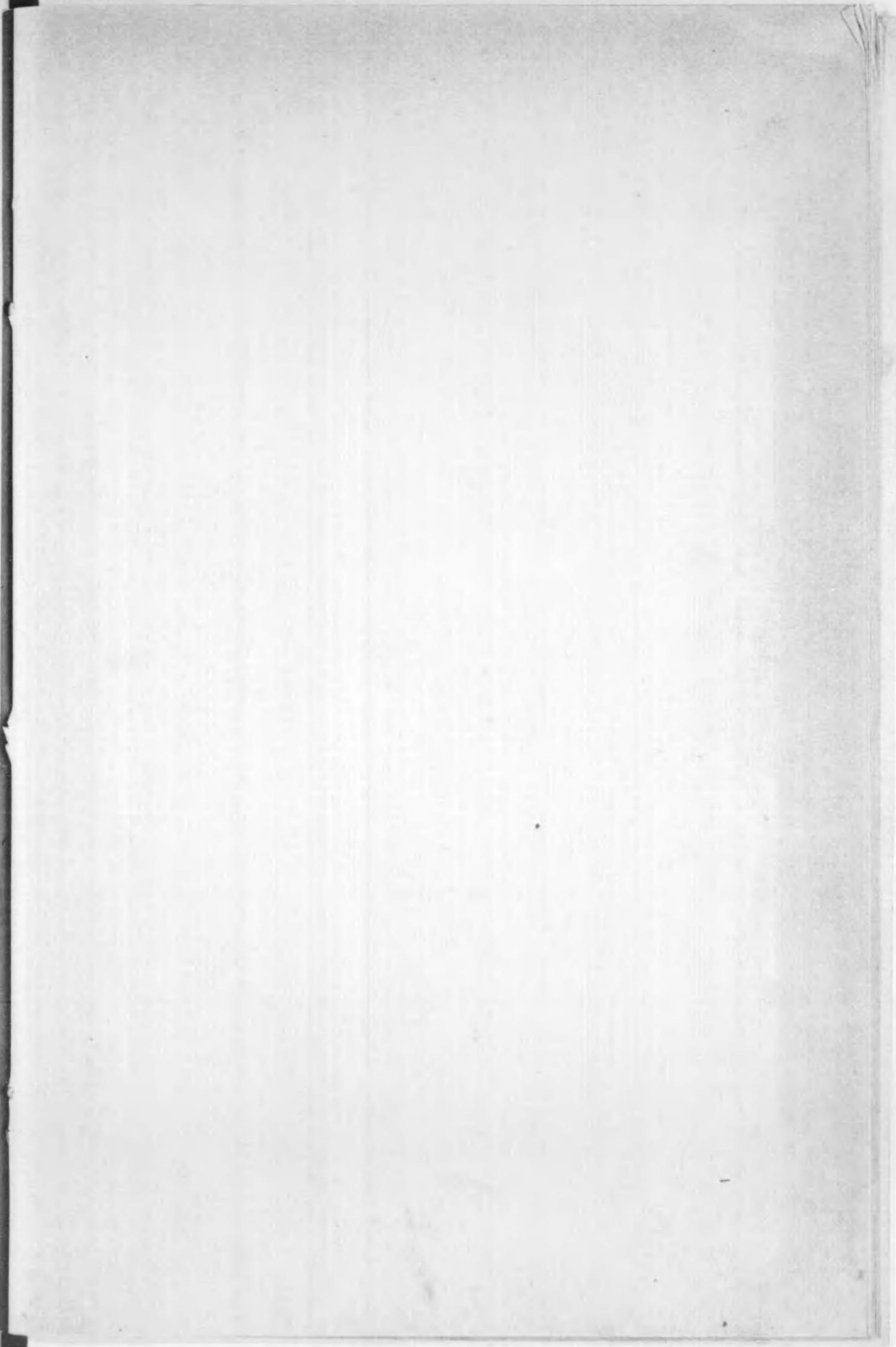


水の 上

露光量違いの為重複撮影



水の 上



# 決闘

## 一 練兵場

第六中隊の夕刻の教練ははや終りに近づいた。下級將校達は愈々待ちきれなくなつて、幾度も幾度も時計を出しては見てゐた。教練は衛戍勤務の實習で、練兵場には兵卒がまばらに立つてゐる。舗道を縁取つてゐる白楊の下、機械體操の傍、中隊教室の入口、托架の傍といつたふうになつてゐる。是れがみんな哨所に擬したもので、例へば火藥庫や、軍旗や、衛兵所や、金庫やの哨所といつたやうな譯である。是等の哨所の間を歩哨掛が往復して、歩哨を立てたり衛兵を交代したりする。下士はひとわたり哨所を點檢した後、部下の

決闘

力を試さうとして、歩哨を騙して銃を取上げようとしたり、哨所を離れさせようとしたり、  
あるひはまた何か物品——大概は被つてゐる帽——を持たせようとしたりする。かうした  
悪戯をよく呑みこんでゐる古参兵は、こゝだと言はぬばかりに、態と荒っぽい聲を張上げて、  
（其所を退け！陛下の御命令の無い限り、誰が何と言つたつて銃を離す事はならぬ！）と答  
へる。けれども新兵は戯談事と服務規定との判別が付かないので、大まごつきにまごつい  
て、つひとんでもないことになつてしまふ。

「これ、フレーブニコフ！この馬鹿野郎！」と、背の低い、體のまゝの、敏捷い上等兵のシヤボワレンコが呶鳴つた。其聲には上官の氣苦勞が響いてゐる。「俺は貴様に教へてやつたぢやないか、え、教へたぢやないか、馬鹿野郎！貴様は今誰の命令を實行したんだ？え、罰人の命令かい？では、貴様も……おい、返事をしろ！何のために貴様は歩哨に立つてゐる？」

第三小隊ではまたえらい騒ぎが始まつた。新兵のムハメデノフと云ふ、やつとロシア語が解るか解らないくらいの韃靼人が、とうとう本當の上官や、にせの上官の悪戯で氣が錯亂

して、急に夢中になつて暴れた。そして銃をキツと構へて、何と教へられても、何と命ぜられても、唯一言斷乎として、  
「突ッ殺すぞ！」と答へる。

「こら、待て！……馬鹿！……」と、下士バブイリョーフが説きつけるやうに言つて、「俺を誰だと思ふ？俺は貴様の衛兵長だぞ、解つたか……」

「突ッ殺すぞ！」と、韃靼兵は呶鳴つて、恐ろしい、意地悪い顔をして、血眼になつて、傍へでも寄つて行かうものなら、誰にでも構はず銃剣を突きつける。此冒険を面白がつてゐるものと、もういゝ加減飽き果てた教練がちよつとも休まれるので喜んでゐる兵卒の一群とが其周圍に集つて來た。

中隊長スリーワ大尉は此事件の取調べに出掛けた。大尉が背中を圓くして、足を曳きずりながら、練兵場の向うの端へハッリ、と歩いて行くうちに、下級將校達は馬鹿話をしたり、煙草を喫つたりするため一つ所に固まつた。將校は三人で、其中のウェーキン中尉と云ふのは禿頭の、鼻髭を立てた、三十三ぐらゐのおもしろい男だ。話好きで、歌が上手



で、酒呑だつた。それからロマシヨーフ少尉。是れは聯隊に來てから足掛二年になる。もう一人は見習士官のルポーフで、狡猾さうな、愛嬌のある、愚かしい眼付をして、厚い無邪氣な唇にいつもふみを絶たない。まるで昔の將校の逸話でも拵へ上げられたやうな、格服のスラリとした、活潑な青年である。

「あゝ、忌々しい！」と、ウェーッキン中尉は自分のニッケルの時計を眺めて、腹立たしうに、カチリと蓋を閉ぢながら、「一體、中隊長はいつまであんな悪魔を中隊に止めて置くんだらう？ 畜生！」

「中尉殿！ あなたから中隊長へさう仰有つたらいいでせう。」と、人の悪い顔付をしてルポーフが勸める。

「駄目だ。君等自分で行つて、さう話して見給へ。一體さ、そんなことは言ふだけ野暮だよ。何時でも檢閲間際となると、先生急に騒ぎ出して、蒼蠅く詰め掛けてさ、兵卒共を引張廻したり、苛めたり、呪鳴り付けたりしてゐる。が、其癖、愈々檢閲となると、先生屹度あの切株のやうに突ッ立つてしまふんだ。随分名高い話だが、君等も知つてゐたらう。」

或時二人の中隊長同志で、何方の中隊の兵が餘計にパンを喰ふかつて喧嘩をおツはじめたことがある。喧嘩の揚句が二人とも部下の中から素晴らしい大食家を引張つて來て、大變な賭をやつたのさ。ところが一方の兵は七斤喰つて、打ッ倒れたまゝもう喰へないと云ふのだ。さアその方の中隊長は堪らない。忽ち曹長に喰つてかゝる。この、この馬鹿野郎、貴様は何だつて俺に嘘をついた、と恐ろしい權幕。曹長は唯もう目をバチクリさせてるばかり、（いや、中隊長殿、こんなだとは全く思つてゐませんでした。今朝豫行をやつた時は一遍に八斤喰ひました……）と云ふ言譯さ。我々の隊だつて同じことだ……豫行の時には何事もないのだが、愈々檢閲の時となると恥を掻く。」

「昨日！……」と、ルポーフは急に吹出して、「昨日各中隊の教練が濟んでから私は家へ歸りました。さうです、ね、かれこれ八時頃でしたか、もうすつかり暗くなつてゐました。見ると、第十一中隊で信號の實習をやつてる最中で、兵が聲を揃へて、（上、胸に、降せッ！）と、呪鳴つてゐるのです。で、私はアンドルセイウイチ中尉に、なぜあなたの隊では今時分まであんな音楽をやつてるんですと訊いてみました。すると、中尉の答へが面白い。僕

等は犬のやうに月を見て吠えてるんだと云ふのです。」

「あゝなにも斯も飽き飽きだ。馬鹿々々しいや！」ウエーツキン中尉はかう言つて欠伸をした。「待てよ、誰だらう、彼處を馬に乗つて來るのは？ ベークぢやないか。」

「ちがひありません、ベーク・アガマーロフ中尉です。」と、眼敏いルポーフが決めた。「實に騎乗が巧いものでせう。」

「ばかに立派だ」と、ロマシヨーフ少尉は同意して、「先生、どの騎兵將校よりも騎乗が巧いやうだね。おゝ、馬が跳ねた。ベークの奴、ふざけてやがる。」

副官の服を着けて、白い手袋を嵌めた將校が舗道を徐かに乗つて來る。身長の高い、大きな栗毛の馬で、英國種の、尻尾の短い逸物であつた。馬は大分蒸れて來て、手綱で緊縮られたスツキリした鬘を打ち振り打ち振り細な刻み足で、トットと駆けて來た。

「中尉殿、ベーク中尉はまつたくのチエルクス人だといふことですが、ほんとですか」と、ロマシヨーフがウエーツキン中尉に問うた。

「僕はほんとだと思ふね。もつとも時によるとアルメニヤ人はチエルクス人だの、レズギ

ン人だのと素性を騙つて、人を欺すのが手だが、然しベークは恐らく嘘を吐いてるんぢやあるまい。あれ見給へ、どうだ、あの騎乗のすばらしいことは。」

「ちよつとお待ちなさい。私が中尉を呼んでみます。」と、ルポーフが言つた。

ルポーフは雙手を談話筒の様に口に當て、中隊長に聞えないやうに、壓潰したやうな聲で叫んだ。

「あの……アガマーロフ中尉殿！」

馬上の將校はキツと手綱を引緊めて、ちよいと立ち止つて、右の方へ首を振つたが、馬をこちらへ向け直すと、こゝろもち脚を緊めて、ハツと思ふまに美事堀を飛び越えて、歩度を詰めた速足で將校達の所へ駆けて來た。

背丈は十人並よりやゝ低い方で、瘦せぎすな、筋ばつた、頗る巖丈な男だ。斜めに後ろへそり返つた額、細そりとした鈎鼻、キツと引緊つた唇——顔全體が如何にも男らしく、立派に、今でも東方人種の特色の薄黒い、光澤のない蒼白色を失はずにゐた。

「ヤア、ベーク君、今日は！」と、ウエーツキン中尉は口を開つて、「誰を對手に氣取つて

「おたんだ？何處かの令嬢でもおたのか？」

ベーク中尉は鞍の上からからだを低く、無難作に屈めて、將校達の手を握つて、軽く笑つた。ギッシリ詰つた其の白い齒並が顔の下半部と、僅かばかりの黒い清楚した鼻端とに反射してゐるやうに見える。

「うむ、いまい、顔をした猶太人の娘が二人通つたつけ。だけど僕には何でもないさ。僕などは女にかけちやゼロだからね。」

「だらうよ、君の兵法のまづいことは僕も知つてる！」と、ウエーツキン中尉は頭を振つた。

「ちよつと皆さん」と、ルボーフは口を切つて、この男の癖でまだ何にも言はない先から笑ひ出した。「あなた方はドフトロフ將軍が歩兵副官方の事を話されたのを御存知ですか。あれは、ベーク中尉殿！實はあなたにも關係してゐることで、世界で一番活潑な騎手は歩兵副官方だと閣下のお話でした……」

「嘘を吐け！」と、ベーク・アガマーロフ中尉は馬を脚で促して、見習士官の方へ乗懸ける

振りをした。

「誓つて嘘など申しません。閣下のお話では、なんでも副官方の所にゐるのは馬ぢやない。樂器か、戸棚のやうなゴツ／＼したもので、それが内臓炎を起してゐるんださうです。おまけに跛で、片目で、毒持ちと來てるんださうです。ところが一度命令を下すが最後、何處へでも構はず全速力で駆け出す。垣根でござれ、窪地でござれ、一向お構ひなし、藪など一跨ぎで飛越すんださうです。さアさうなると手綱ははづれる、馬具は落ちる、帽子は宙に飛ぶといふ勢ひ、いやはや誠に天晴勇しい騎手ださうです。」

「ベーク君、何か面白いことを聞かないかね」と、ウエーツキン中尉が訊ねた。

「面白さ？さうさね、別段面白いこともないが、たつた今聯隊長殿が將校集會所で、リョーフ中佐を見付けてさ、お寺の廣場までも聞えるやうな大聲で中佐を呼び付けたのだ。ところが中佐は蛇のやうにへ／＼に酔ッぱらつて、阿父ちやん、阿母ちやんも言へないといふ騒ぎさ。たゞ一所に突立つて、手を背中で組んだまゝ、體を揺ふつてゐると、シユリゴウウキチ大佐は怒るまいことか、リョーフ中佐に向つて、(聯隊長と話をするに後ろへ手

を廻す奴があるかい！」と呷鳴つたのさ。そこへひとりの給仕女も来て居たので猶更間が悪かつたよ。」

「酷くきめつけられたな」と、ウエーツキン中尉はひやかすのか、おだてるのかあての付かない微笑を含みながら、「先生、昨日は第四中隊でこんなことを呷鳴つたといふ話だぜ。」

（何故貴官は私の鼻先へ操典など突付けるんです？、私は貴官に取つては操典です。この上なんにも仰有ることはなりません。こゝでは私が帝王です、そして神です）と、かうやつたさうだ。」

ルポーフは不意にまた頭に浮んだことを面白さうにひとり笑つて、

「皆さん、ある聯隊副官の事でまだこんな話がありませんよ……」

「ルポーフ、いゝ加減にしろ！」と、ウエーツキン中尉は嚴然と注意して、「今日は餘程どろかしてゐるな、さびさは。」

「まだ面白い事がある。」ベーク・アガマーロフ中尉は話を繼いで、またルポーフの前に馬を向けて、巫山戯ながら彼の方へ乗り懸けた。馬は頭を振り、鼻を鳴らして、あたりへ泡を

飛した。「まだ面白い事がある。聯隊長はこの中隊へ行つても屹度將校に呷鳴けて土人形を斬せる癖がある。それがため第九中隊では慄え上るやうな出来事が起つたよ。それは劍が研いでないといふので、エビフワノフ少尉を營倉に打ち込んだのさ……なんで君はさうビク／＼してゐるんだ」と、ベーク・アガマーロフ中尉は見習士官に向つて叫んだ。「馬にも少しは慣れてなくちやいけないよ。君だつて何時副官にならないとも限らない。その時は皿に載つかつた雀の丸焼見たやうに馬の背中にビヨコンと乗かるだらう。」

「何だ、この亞細亞人奴！……ヨボ／＼の死損ひの獸なんか早くくたばつちまへ！」と、ルポーフは馬の醜面を振拂つて、「ベーク中尉殿、あなたはお聞きでしたか、ある聯隊副官が曲馬師の馬を買つた話を。先生その馬に乗つてさ、檢閲に出掛けたところが、急に馬がある司令官の前でスペイン式の歩調でやり始めたのです。かういつた風に足を上へ擧げたり、横から横へ廻したりして。してゐるうちに、とら／＼先頭中隊の真中に飛込んぢまつて、さアその騒ぎつたらない、ひどい不様でしたよ。ところが、馬先生一向平氣で、例のスペイン式の歩調で頻りと藝當なざる。そこで司令官はかういふ風に手を話筒のやうに

口に當て、(おい中尉！その歩調で二十一日間衛戍監獄に行け、前へ進め！……)と、かう呷鳴り付けたのです。」

「なんだ下らない」と、ウエーツキン中尉は顔を擧めて、「おい、ペーク君、先刻の土人形を斬る話ね、ありやほんとに僕等に取りつて思ひ掛けない贈物だつたよ。ありや一體どうした譯なんだ？あんなことをする暇がどこにある？見給へ、僕等にも昨日あの模型人形を持つて来たよ。」

かういつて彼は練兵場の中央を指した。そこには濕つた粘土で造へた人形が立つてゐた。人形は手と足とが無いばかりで、あとはほんゝ人間の形に出来てゐる。

「諸君はどうした？斬つたのか？」とペーク・アガマーロフ中尉は問うた。

「ロマシヨーフ君、君試つてみたか？」

「まだ、試りません。」

「僕もまだ試らな。」「つ馬鹿々々しい事でも始めるかな」と、ウエーツキン中尉は呻つた。「いつになつたら僕も土人形を斬つたりするやうな暇が出来たらう。御覽の通り、朝の九

時から晩の六時迄かうやつて突立つてばかりゐる。碌に食事をする暇もなければ、ウオツカもゆつくり飲めやしない。まア〜子供でなかつたのがせめてもの仕合せさ……」

「可笑な人だね。一體將校とも、らうものが劍を自由に使ふくらゐることが出来なくちや仕方がないぢやなからか。」

「なんで又そんなことを訊くんだ？實戦の場合を言つてるのか。それなら猶更劍なんか駄目だ。現代の火器は君を百歩も前へ近けやしないぜ、君の劍が僕をどうするといふんだ？僕は騎兵ぢやないぜ。だが、いざとなれば僕はいつそのこと、銃を取つて、床尾で鈍い頭をピシ〜やツつける。この方がまだ確かだ。」

「宜し。だが平時はどうする？平時でもいざといふ場合が幾度あるか分らないぜ。内亂、暴動、または……」

「それがどうしたといふんだ？そんな場合にも劍が要るといふのか。僕は人間の頭を斬るなんて、そんな下らない仕事はやらないつもりだ！中隊打て！と言へばそれで事が済む……」

ベーク・アガマーロフは不平らしい顔をした。

「なんだ、君は相變らず下らないことばかり言つてゐるね、ウエーツキン君。そんな事を言はずにもつと眞面目になつて返事をし給へ。いゝかね、まア假りに君がどこか散歩にでも芝居にでも行くとするさ。或はゐる變な奴が料理屋で君を侮辱したとするさ……もつと極端な例を取ると、ゐる文官が君の顔をビシヤリやつたとする。その場合、君はどうするんだ？」

ウエーツキン中尉は肩を怒らして、輕蔑むやうに唇を喰ひ縛つた。

「ふん、第一僕を打つやうな奴は一人も居やしないよ。何故つて、人を打つには誰でも構はず打つといふ譯ではない、自分が打たれる恐れのあるやうな奴だけを狙つて打つんだからね。それから……あ、さうく僕がどうするかといふんだね。さう、僕は相手を目蒐けてピストルを放つさ。」

「だが、もしピストルを家に置き忘れた時には？」と、ルポーフが訊いた……

「なわんだ……そんな場合にはそれを取りに歸るまでのことさ……いつぞやこん

な下らないことがあつた。あるカフェー・シャンタンで一人の騎兵見習士官がみんなから侮辱されたので、其奴は直ぐさま辻馬車で家へ駆付け付けてピストルを持つて来て、いきなり二人の山鶏みた様な奴を射殺してしまつたのさ。それで終ひさ……」

ベーク・アガマーロフ中尉は思々しう頭に振つた。

「知つてるよ、とつくに聞いた話だ。しかし軍法會議は其奴を謀殺犯と判決したぢやないか。それで何が……ことがあるんだ？ いやく誰か僕を侮辱するか、毆るかしたら僕は……」

と、彼は終ひまで言ひ切らずに手綱を持つた小さな手をブル〜と慄える程握り緊めた。ルポーフは急に可笑しさに身體を揺ぶつて吹き出した。

「またか！」と、ウエーツキン中尉は鹿爪らしく言つた。

「皆さん……どうぞ免して下さ……ハツハツ……某聯隊にもこんなことがありました。見習士官のクラウゼといふ奴がある集會で亂暴をしたので、給仕が彼の肩章へ手を掛けてつひ引ッ斬してしまつたのです。するとクラウゼはいさなりピストルを取

つて其奴の頭へズドンと一發見舞ふと相手は即座に參つてしまひました！ところへ、も一人ある辯護士が彼に喰つて掛つたのを、彼は其奴をもズドンとやつてしまひました。勿論皆はばらばらに逃げてしまつたです。そこでクラウゼは悠々と自分の露營の前線を指して軍旗の傍まで歸つて來ると、歩哨が（そこへ來たのは誰だ？）と誰何したので、彼は（見習士官クラウゼが軍旗の下で死ぬんだ！）と、かう叫んで、そこへぶつ倒れたまゝ自分の手を撃ち抜いたんです。それで裁判になつたところが、彼奴無罪放免になりましたよ。」

「其奴ア豪氣だね！」とペーク・アガマーロフは言つた。

そこで若い將校達の日頃好きな話ではあるが、頗る突飛な、其場で直ぐ處決すると言ふ血祭り騒ぎの話や、またそんな場合が大抵は無罪で通るといふやうな話が始まつた。ある小さな町で一人の酔つぱらつた髯も何にもない騎兵見習士官が——彼はその前「バスハ祭の祝ひ餅を喰ひに集まつた猶太人の群を追ひ散した」ことがある——猶太人の群へ劍を懸して斬り込んだといふこと、キエフである歩兵少尉がある大學生に食堂の傍で臂で突かれたのが原因でその大學生を舞踏室で死ぬ程斬りつけたといふこと、それから又ある大きな

都會——モスクワカペテルブルグか——であるが一人の將校が某料理店で、ある文官から紳士たるものは見知らぬ婦人に付き纏つたりするものぢやないと注意されたのを遺恨に、その文官を犬か何かのやうに銃殺したといふこと——それらのことが話題に上つた。

ロマシヨーフはその時まで黙つてゐたが急に氣がわく／＼してきて顔を眞赤にして用もないに態と眼鏡をなほしながら、エ、ヘンと咳拂ひして、話に口を出した。

「ですが、私の考へはかうです。まあ給仕なんか初めから勘定に入れないとして……さうです……もしその文官がですね……さあなんといつたらい、ですか……さうむさう……もし其奴が立派な紳士か、貴族か、さういふ種類の人であつたとしましたら……どうして私はその武器を持たない者を劍でやつつけることが出来ませう？他に私は其奴から正當の倍償を要求することが出来ないでせうか？兎に角私達だつてやつぱり文明人ですからね。謂は……」

「ロマシヨーフ君、君も下らんことをいふなわ」と、ウエーツキン中尉が口を入れた。「君が正當の倍償を要求したつて相手は屹度かう言ふに違ひない、（えー……まだ御存知な

いかも知れませんが、私はその一體えー……決闘といふものを認めてゐませんので。のみならず私は血を流すことが大嫌ひでしてね……それに、えー……私達には示談といふものがありまして……と、かう出られたら、その時こそ君は一生の面目玉を踏潰してしまふだらう。」

ベーク・アガマーロフはニコニコと輝かしい微笑を湛へて、

「おや！なんだと？君は僕と同じ意見ぢやないか。ウェーツキン君、僕は君に試し斬りを練習することを勧めるよ。僕等のカウカサスでは皆が子供の時から練習してゐるよ。棒切れだの、羊の死體だの、水だのを的に……」

「では人間は？」と、ルボーフがすかさず口を入れる。

「人間もさ」と、ベーク・アガマーロフは軽く受けて、「また、その斬り様といつたら實に美事だね！一撃の下に人の肩から脇腹にかけてサツと袈裟掛けに切割してしまふのさ！是れが所謂試し斬なんだ。そこまで行かなけりや態々軍刀を漬す必要はないからねえ。」

「では、ベーク君、君はそんなにやれるのかい？」

ベーク・アガマーロフ中尉は残念さうに歎息した。

「いや僕にはやれない……若い山羊ぐらゐなら真ッ二つに切離せる……憤の死體さへやつてみたことがある……だが人間は、どうも駄目だね……とても切離せないよ。頭をズバツと刎ね飛ばすぐらゐは僕も心得てるが、袈裟がけと來ちや……駄目だね。僕の親爺はそれを易々とやつたのだが……」

「では皆さん、どうです、行つてやつて見ようぢやありませんか」と、ルボーフは眼を輝かせて、祈るやうな調子で、「さア、ベーク中尉殿、御一緒に参りませう……」

將校等は土人形の傍へ行つた。先づウェーツキン中尉が斬つた。彼は人の善ささうな愚かしい顔に野獸のやうな表情を浮かべながら全力を込めて、覺束なげに軍刀を高く振り翳して土人形を撃つた。其時彼の咽喉から肉屋が肉を切る時に出すやうな「エイ！」といふ特別な掛聲が自然に迸つた。

尖端が五六寸ばかり人形へ斬りこんだが、ウェーツキン中尉はやつとこのことでそれを引き抜いた。



「駄目だね」とベーク・アガマーロフ中尉は頭を振りながら、「さあ今度はロマシヨーフ君、君だ……」

ロマシヨーフは劍の鞘を拂つて、キマリ悪さうに手で眼鏡をなはした。彼は中脊の、瘦せぎすの方で、體格の割にはかなり力の強い方ではあるが、非常に臆病なところから、始終愚圖ついでゐる。彼は學校に居た時ですら軍刀の試合は出来なかつたからで、一年半も軍隊にゐるうちにもうすつかりその術を忘れてしまつた。彼は劍を頭上高く振り被ると同時に思はず知らず左の手を前の方へ突出した。

「手が危ない！」とベーク・アガマーロフ中尉は叫んだ。

が、もう遅かつた。劍の尖端が僅かに軽く土の上面を擦つたゞけであつた。もつと強い手應へがあるだらうと豫期してゐたロマシヨーフは身體の平衡を失つてよろ／＼と踏跟いた。及が前方へ差延べた手へ衝突かつてひとさし指の根元の皮がすこし擦裂けたので、サツと血が滲んだ。

「それ見給へ！」と、ベーク・アガマーロフは馬から飛び降りて腹立たしく叫んだ。「あんな

風では今に手まで斬落しちまふよ。あんな劍の使ひ方があるものか？ いや、なわに大したことはないさ。ほんのちよつとした傷だ。ハンカチで綑帯して置き給へ。君はまるで女學生みたやうだね。おい、ルポーフ！ちよつと馬を捉まへてゐろ！さア、皆なよく氣を付けて見てゐ給へ。劍道の極意は肩でもなければ肘でもない、此處の手首の屈折にあるのだ。」かう言つて彼は右の手首を二三度迅速に廻した。で、刀身が彼の頭上で圓く續いた輝かしい輪のやうにくる／＼廻つた。

「さあ、此處だ、見給へ。左の手をかうして後ろへ、背中の方へ、引くのだ。さうして斬り付ける時には的を打つたり、突いたりせずに、鋸で木を挽くやうな心持で斬り給へ。つまり劍を後ろの方へグツと引くのだ。解つたか。それからよく覺えておかなければならんことは、劍の面が的の面に對して斜に向いてゐなければならんといふことだ。これを忘れてはならん。さうすれば自然角度が鋭くなる。さア見てゐ給へ。」

かう言つて、ベーク・アガマーロフは土人形から二歩ばかり退いて、きつと鋭く硯ひをつけて、フイと劍を高く宙に煌めかせたかと思ふと、ヒラリと身を躍らし、電光のやうな早

業でズバリと斬り下した。ロマシヨーフが、ヒューと風を切る物凄いな唸りを聞いた時は最早人形の上半身はともなく、どざりと地上に顛び落ちた。して、その断面が磨いたやうに滑々してゐた。

『いよう、畜生！素的な腕前ですね！』と、ルポーフは有頂天になつて叫んだ。『ベーク中尉殿、何卒もう一度やつて下れ。』

『さあ、ベーク君、もう一度！』と、ウエーッキン中尉も頼んだ。

が、ベーク・アガマーロフはさも今惹き起した感動を打毀すのを恐れるかの如く、微笑しながら、劍を鞘に収めて、ホッと太息を吐いた。この瞬間、彼が廣く見開いた憎さげな眼差といひ、不格好な鈎鼻といひ、ニツと露き出した齒並といひ、まるである意地悪い猛々しい怪鳥のやうであつた。

『これしきのがなんだ？これでも試し斬だといはれるのか？』と、彼はさもけしかけるやうな侮蔑の調子で言つた。『カウカサスに居る僕の親爺は六十といふ歳になつてもよく馬の頭を斬り落したものだ。しかも眞ッ二つにさ！凄腕前だつた。諸君は絶えず練習で

もしなくちや、あれではものにならぬ。僕等のところでは練習にどんなことをするかといふと、搾木に挟んだ柳の枝を斬つたり、水を細く瀧にして落してそれを斬つたりする。つまり飛沫が立たなかつたら、その腕前は確かなものだと言はれるのさ。ルポーフはア今度ははさまだぞ。』

この時突然ウエーッキン中尉のところへ下士のバブイリローフが吃驚したやうな顔付で駆け付けてきた。

『中尉殿………聯隊長殿がお出でになりました！』

『氣を——着け！』と、練兵場の向うの端からスリーフ大尉が興奮したやうな、キツとした、長く引張るやうな調子で叫んだ。將校達は慌て、銘々の小隊へ歸つた。大きな不恰好な四輪車が舗道から練兵場へ徐々として入つてきたが、はたと停ると、其片側から聯隊長が車箱を一方へ傾けて大儀さうに出てきた。他の側からは脊のスツキリした、立派に着飾つた聯隊副官二等大尉フェドロフスキイがひらりと飛び降りた。

『六中隊には、變りはないか！』と、大佐の落着いた、調子の低い聲が聞えた。兵卒は練

兵場の彼方からも此方からも大きく、不揃ひな聲で、「聯隊長殿、御機嫌よう！」と叫び出した。將校等は帽子の庇に手を上げて舉手の禮をした。

「教練を續けてやつてくれ」と聯隊長は言つて、間近な小隊へつかつかと近づいた。

シユリゴウイチ大佐は非常に不機嫌であつた。彼は小隊を巡視して兵卒に衛戍服務規定の中から質問を掛けた。そしてかういふ場合、彼は古參の精勤將校に特有な若々しい巧妙な辭令と一緒に、時々野卑な痛罵を浴せかけた。聯隊長の老人らしく蒼白めて色の褪せた嚴い眼付で、ぢつと執拗く睨みつけられると、兵卒はまるで催眠術にでも掛つたやうに瞬きもせず呼吸を殺して怖しさに身體をしゃちこばらせながらまじくと彼を視詰めるのであつた。大佐は體格の大きな、でつぶりとした威嚴のある老人であつた。肉付の豊かな其顔は額骨の素的に廣い割に上額の方がだん／＼狭くなつて、下の方は濃い銀色の鬚が鋤形に生えてゐるので、顔全體がまるで大きなどつしりした菱形をなしてゐる。眉は灰白色で、濃く、そして凄い。彼は殆ど調子を高めずに話をするのであつたが、その聲は師團中でも頗る有名で、彼はその聲でもつて、今の地位を造り上げたといはれてゐるくらゐ珍

しい聲で、その一言々々が廣い練兵場の遠い隅々からかけて街道までもはつきり聞えた。

「さういふは何者だ？」と大佐は機械體操の傍に立つてゐた若い兵卒のシヤラフトデーノフの前に突然立止まつてぶしつけに訊いた。

「第六中隊の兵卒シヤラフトデーノフであります、聯隊長殿！」と、苦しさうに嘔れ聲で鞆韃兵が叫んだ。

「馬鹿！俺はささまがどの哨所へ立つてゐるかと訊くのだ！」

鞆韃兵は聯隊長の嗚り聲と怒つた顔付に度を失つて黙つたまゝ、唯眼をバチクリさせてゐた。

「いゝあどうした？」と、シユリゴウイチ大佐は聲を高めた。

「それは……歩哨……不可侵……」と鞆韃兵は想ひ出し想ひ出し呟いたが、

「聯隊長殿存じませへん」と、彼は不意に静かなキツとした口調で言ひ放つた。

聯隊長の肥太つた顔は見る／＼老人らしい煉瓦色の、濃い、赤味を帯びて、毛深い眉はピク／＼と動いた。彼はあたりを見廻してつけんどんに訊いた。

「この下級將校は誰だ？」

ロマシヨーフ少尉はつと前へ出て擧手の禮をした。

「聯隊長殿、私であります。」

「あゝ！ロマシヨーフ少尉か。君はよく部下を訓練してゐるだらうね。膝をつけろ！」と、シユリゴウイチ大佐は俄かに眼を刺してがみ／＼と呷鳴り立てた。「自分の聯隊長の居る前でそんな起立の仕様があるか？スリーワ大尉見給へ、君の部下將校は職務執行の際に上長官に對する態度を辨へてゐないぞ……ささまはまるで犬のような奴ぢや！」かう呷鳴つてシユリゴウイチ大佐はシャラフトデーノフを振り返つて、「ささまたちの聯隊長は誰だ？」

「存じまへん」と韃靼兵ははら／＼しながら急いできつぱりと答へた。

「や、驚いた！……俺はささまの聯隊の指揮官が誰だと訊くのだ。では俺は誰だ？分つたか、此俺は、俺は、俺は……」と、シユリゴウイチ大佐は幾度か掌で自分の胸を力一杯敲いた。

「存じまへん……」

「……」大佐は幾度も幾度も續けさまに長たらく、こんがらがつた口穢い痛罵を散散浴せかけた。「スリーワ大尉、すぐにこの犬兒を武裝のまゝ銃を持たせて立てて置給へ。こんな悪徒は銃の下で腐ッちまふが、それからロマシヨーフ少尉に向ひ、「少尉、君は職務の事よりも女の尻のことばかり考へてゐるのぢやらう。ワルツを踊つたり、ボール・デ・コック（淫本作者）を讀んだりしてゐるのぢやらう……此奴は一體どうしたんだ。君はこんな奴でも兵卒だと思つてゐるのか？」と、大佐はシャラフトデーノフの唇を指で衝突して、「こりや汚辱だ、恥洒した、面穢した。兵卒ぢやないぞ。自分の聯隊長の名すら知つてをらん……少尉！君にも實に、あ、あ、呆れつちまつたよ……」

ロマシヨーフは大佐の灰色が、つた、眞赤な、激した顔を見ながら、自分も侮辱と胸騒ぎとから動悸が自然に高まつてきて、急に眼の前が暗くなつたやうに感じた……そしてふいに、彼自身にさへだしぬけと思はれるくらゐふいに、低聲で言つた。

「聯隊長殿、此奴は韃靼人であります。此奴はロシア語が少しも解らないのです。それ

に……」

シニリゴウイチ大佐は見る見る眞蒼な顔になつて皺の寄つた頬はふる／＼と震え、眼はきよろつとして興味悪くなつた。

「なんだ?!」大佐は不自然な程恐しく大きな聲を張り上げて吼え出した。それに驚いてそこら邊の舗道の傍の塙の上に腰を掛けてゐた猶太人の子供らが雀のやうに「バ、バ、バ」とわたりへ散つた。「なんだと? 何を吐しやがる? 黙れつ! この青二才奴! 旗手の分際で……」  
：フェドロフスキイ中尉、今日の命令には俺がロマシヨフ少尉を、軍紀を辨へぬ者として四晝夜の謹慎に處すると告示して置き給へ。それからスリーワ大尉は自分の部下將校に服務規定を充分に了解させなかつた廉をもつて嚴重な譴責に處する。」

副官は恭しく平靜な顔付で敬禮をした。スリーワ大尉は前屈みになつて木偶のやうな、なんの表情もない顔付で突立つたまゝ、いつまでも震えてゐる手を帽子の庇へ當てゝゐた。「君は恥かしくないのか、スリーワ大尉!」とシニリゴウイチ大佐は漸く怒を鎮めて小言をいつた。「聯隊の中でも評判のいい、古參將校の癖に、若いものをこんな放任しとくと

はなんです。あんな奴はどし／＼曳張つてつて遠慮なくひつばたいてやるがい。あんな奴にはなんの遠慮も要らんのだや。お姫さんぢやあるまいし、腫れ上る氣遣ひはないよ……」

大佐はくるりと身を廻し、副官を連れて四輪車の方へ行つた。さうして二人を載せた車が舗道へ曲つて、中隊教室の建物の陰へ隠れるまで、練兵場は一種怪々した合點のゆかぬ静寂に支配されてゐた。

「おい! 大將!」二三分経つて將校等が銘々の室へ歸りかけた時、スリーワ大尉はロマシヨフに向つて輕蔑ひやうな調子で素氣なく憎さげに言つた。「なんだつて言ひ譯なんかする氣になつたのだ。お鉢が廻つてきたら突立つたまゝ黙つてゐりやい。君のお蔭で俺までが譴責を喰つちやつた。なんの因果で君のやうな男が俺の中隊へなんかはいりこんで来たんだらう。犬に五本目の足が無用であるやうに、君は俺に取つて無用な人間だ。赤ん坊のやうに乳首をしやぶることは出来るだらうが、然し……」

彼はしまひまで言はないうちに、グツタリ疲れたやうに手を振つた。そしてロマシヨフ

フに、パイと脊を向けて、前屈みになつて、首垂れたまゝ、自分のむさくろしい古ぼけた獨住の居宅へ歸つて行つた。ロマシヨーフはその後から彼の悲しさうな、細そりした、ひよろ長い脊中を眺めてゐたが、急に彼の心には先刻大勢の面前で侮辱された時の苦しい思ひを通して、あの獨りぼつちの、頑固な、何人にも愛されないスリーワ大尉に對する同情の念が湧いてくるやうな感じがした。大尉は廣い世界の中で、たつた二つの趣味しか持つてゐなかつた。それは自分の中隊の整頓と、それから「就眠前」にやるひそやかな獨酌とである。「就眠前」とは聯隊で、のんだくれの古參將校達の間に使はれる言葉である。

ロマシヨーフには——よく若い人々にはありがちなことだが——自分を第三者の位置に置いて、つまり自分のことを三人稱にして、殊に月並な小説の中の文句などに托して考へるといふ少々可笑しい無邪氣な癖があつた。で、今も彼は心の中でかう言つた。

「彼の善良な活々とした眼は哀愁の雲に蔽はれた……」

二 途 上

兵卒は小隊々々に分れて兵舎に歸つた。で、練兵場は急にからつとなつた。ロマシヨーフは暫く舗道の上になど、してゐた。彼は將校に敍せられてからまだ一年半にもならないのにもう幾度もかうした孤獨の辛さを経験した。意地の悪いあかの他人か、若くは冷淡な人々の間に捨られたやうな孤獨の悲痛、今宵を何處で送つたらいいか分らないといつたやうな退屈の思ひ——それを経験したことが幾度あつたか知れない。自分の寓舎のことや將校集會所のことなどは考へるさへ厭である。集會所も今頃はがらんとしてゐる。大方二人の見習士官が薄汚い小さな球突臺で球を突いたり、ビールを飲んだり、煙草を喫つたりしながら数々の球に祈願を込めたり、呪つたりしてゐるだらう。そして部屋々々には下手な料理人の拵へた食物の、長い間染み込んだ臭ひがぶん／＼してゐるだらう——あゝ、退屈だ！……

「停車場へ行かう。」ロマシヨーフは我と我心に言つた、「どうせ同じことだ。」

貧しい猶太人の部落には一軒の料理店もなかつた。それに軍人俱樂部も、文官俱樂部もみすばらしく荒れ果てた姿になつてゐるので、停車場だけが住民の屢々遊びに行つたり、鬱を散じたり、カルタをしたりする唯一の遊び場所になつてゐる。旅客列車の到着する時刻には婦人連までが出掛けてゆく。そしてそれがこの地方生活の限らない退屈に一小變化を與へるのであつた。

ロマシヨーフは毎晩停車場へ行つては郵便列車の着くのを樂みにして待つてゐる。その列車はプロシヤ國境に至るまでには、もうこゝよりほかに停車しないのである。ロマシヨーフは五臺の新しい、ピカ／＼した車箱のつゞいたこの列車が、急に曲角から飛び出して、全速力で停車場を目覚めて疾走して來るのに妙に氣を取られて、胸を躍らせながら見惚れるのであつた。二つのぎら／＼した眼が前方の軌道の上に明い斑點を投げながら見る大きくなつてばつと燃え立つのにも心ゆくばかり見惚れた。また列車が今に停車場を飛び越さうとする刹那にシューシュツ、ゴォーと凄い音をあたりに響かせながら、ちよつと立停つたのにも心を躍せた——其度に（まるで章駄天走りに疾走して來た巨人が、ふと岩石に

掴つたやうだ）とロマシヨーフは一人心の中に思ふのであつた。すると、やがて陽氣なお祭りのやうな灯がかつと照り輝いてゐる車箱の中から珍しい帽子を冠つて非常に派手な衣裳を着けた美しい、しなやかな貴夫人達が出て來る。その後から立派な服装をした文官たちがなんの心配もなささうな勿體ぶつた態度をして高らかな貴族的の聲でフランス語やドイツ語をべら／＼饒舌つたり、自由な身振をしたり、退屈さうに笑つたりしながら出て來る。それが曾てロマシヨーフに、チラとも眼をくれた者はなかつたが、ロマシヨーフは彼等のうちに、ある近づき難い華やかな、美しい世界の斷片を認めた。そこでは生活が永久の祭であり、祝ひである……

八分程経つと發車の鈴が鳴つて、汽關車がシュウ／＼音をたてる。そして輝かしい列車が停車場を離れて、プラットフォームや驛茶屋の灯が慌しく消えると、俄かに薄暗い平日に復る。ロマシヨーフはいつも長いことしんみりと滅入るやうなうら悲しい思ひで最後の車箱の後ろに調子よくゆらめいてゐる眞赤な灯影の跡を見送るのであつた。其灯影は夜の暗黒の中に次第に遠ざかつて、しまひには見えるか見えないくらの微かな火花のやうにな

る。

「停車場へ行かう」と、ロマシヨーフは思った。が、ふと自分の表靴を見ると直に刺々しい羞しさを感じてさつと顔を赤らめた。この表靴は深さ四分一半の、ドッシリした護謨製のもので、上の方まで真黒い泥が練粉のやうにこつてりと粘り着いてゐた。聯隊の將校等はみんなこんな表靴を穿いてゐるのである。それから彼は、ハネのために膝のあたりまで裾切れがして、縁糸の下つた、ボタン孔の汚れて大きくなつた自分の外套を見て溜息を吐いた。此前の週間であつたか、彼がブラットホームに沿うて例の郵便列車の側を歩いてゐると一等室の入口に黒の着物を着た、脊の高いストラツとした、素的に美しい貴婦人の立つてゐるのに遇つた。其女は帽子を冠つてゐなかつたので、ロマシヨーフはほんの束の間ではあつたがしかし其女の細そりと整つた鼻や、美しい、小さな潤ひのある唇や、澤々した、黒い、波打つてる髪の毛をはつきり心にとめることができた。髪の毛は頭の真中から真直に分けられて兩頬にふさふさと垂れて、額顚や眉の端や耳を蔽うてゐた。そして其女の後ろには背の高い若い男が立つて、女の肩越しに此方をジロ／＼見てゐた。男は高慢らしい顔付

の、派手な服を着て、鼻髭をカイゼル式にピンと上へ燃り上げてゐた所爲でもあつたか容貌までが幾分かカイゼルに似てゐた。女も矢張りロマシヨーフを見た。しかも其女は凝つと瞳を据ゑてマジリ／＼と見てゐるやうにロマシヨーフには思はれた。で其女の傍を通りながら少尉は例の如く自分を三人稱にして心の中にかう思つた。(見知らぬ美しい女の眼はさも満足さうに若い將校のストラツとしたきやしやな姿に見惚れた)。ところが十歩ばかり通り過ぎてからロマシヨーフはもう一度美しい女の視線を迎へようとしてふいと後ろを振り返つて見ると、彼女と彼女の同伴者とはまだ彼の後姿を眺めながら、さも可笑しさうに笑つてゐた。其時ロマシヨーフは急に恐しいまで判然と、ちやうど局外から自分の姿を観察してゐる様に自分の表靴や、外套や、蒼ざめた顔や、近眼や、何時もの軽卒や、不作法やを思ひ浮べると同時に今し方考へたばかりのあの美しい文句を思ひ出して無性に羞しくなり、針の上にも坐つてるやうな心苦しさを覺えて顔を赤らめたことがある。今も彼は春の黄昏の薄暗い中を一人歩きながら、あの時の羞しさを思ひ起して顔を赤らめた。

「さや停車場へ行つたつて仕方がな」と、ロマシヨーフは苦しう、頼りない想ひに咬ら



て、『少し歩いて、家に歸らう……』

四月の初めであつた。夕陽はいつのか濃くなつて、舗道を縁取つた白楊や道の兩側に立並んだ瓦葺の、低い、白壁の家や稀に通る人影や——凡てのものが薄黒くなつて色彩と陰影とを失つた。そして一切の物がみんな黒く區べつたい影像に變つてしまつたが其輪廓だけはまだくつきりと薄暗い夕空の中に描き出されてゐた。西の方の郊外には夕映が燃え立つて、さながら火焰のやうな、金の熔岩で真赤に焼けてゐる噴火口の中に、ドッシリとした鳩色の雲が顔び落ちて、血紅色、琥珀色、莖色と色々の火がバツと赤く燃え立つたやう。しかし噴火山の上には温しい春の夕空が藍色寶石や綠玉石のやうな綠色を呈して圓蓋のやうに高まつてゐた。

ロマシヨーンは大きな表靴を穿いた足をやう／＼曳きすつて、徐かに舗道を歩きながら其魔法のやうな火を傍眼も觸らずまじ／＼と眺めてゐた。彼は子供の時からいつも感ずるやうに、あの輝かしい夕映の彼方には、ある不思議な、光明の生活があるやうに思つた。遠い遠い雲の彼方に、地平線の向うに、此處からは見えない太陽の下に、眩い程美しい町

が燃えてゐて、それがあの内部に炎を包んだ密雲に蔽れてゐるかのやう。そこには金色の石を敷き詰めた舗道が目も綾に輝き、異様な圓蓋や深紅の屋根のある塔がスーッと聳えて、家の窓には金剛石が輝き、空中にはきら／＼した、いろんな色彩の旗が翻つてゐる。してその遠い所にあるお伽噺のやうな町には歡喜に充ちた、たのしげな人々が住んでゐて、其人々の生活は音楽のやうに甘く、憂鬱や悲哀さへも其人々にとつては魅するやうに優しく美しいのである。そして彼等はいつとも輝かしい廣場や影濃き花園に沿うて色々な草花や噴水の間に逍遙してゐる。彼等はいつとも晴々と名状し難い喜びに溢れ、神と同じく幸福や希望を限られることもなく、悲哀や羞恥や心配やに心を曇らされることもない……ふとロマシヨーンは先刻の練兵場の事を思ひ出した。聯隊長の荒々しい吹鳴聲や、其時受けた侮辱の感じや、兵卒の前で心を刺されるやうな、しかも小兒らしい氣まづい思ひをしたことなどが、それからそれと浮んで來た。彼が何よりも苦痛と感じたのは聯隊長やスリーフ大尉が彼を吹鳴る時の態度が、ちやうど彼が今日の汚辱の證人——口を利かない證人である兵卒等を時々吹鳴るのと少しも違はなかつたことであつた。さうしてこのことは

なんとなく地位の差別を無にして彼が將校として、將た彼の所謂人間としての資格を無視してゐるかのやうに思はれた。

と、彼の心の中に忽ち子供らしい——實際彼にはまだ子供らしいところが多かつた——復讐的な、幻想的な、剩へ酔つぱらつてゐるやうな取り止めもない空想がむらむらと湧いてきた。(なんだ、馬鹿々々しい！俺の前途には洋々たる生活が展けてるんだ！) ロマシヨーフはかう思ひながら、自分の思ひにひかされて思はず元氣よく歩き出して深く呼吸を吐いた。(よし、彼奴等の面當てに、明日は朝早くから本を讀んで準備をしよう。そして大學へ入らう。さうだ！勉強だ！勉強さへすれば何だつて好きなことが出来る。自制して、狂人のやうになつて一生懸命暗誦しよう……そしてみんなにだしぬけに、美事に試験に通つて見せる。すると彼奴等は屹度かう云ふに違ひない、何もさう吃驚するがものはないさ。我々はもうとつくからさう思つてゐた。何しろあんな頭腦のいゝ、あどけない天才肌の青年だからなあ。とかう言ふに違ひない。)

ロマシヨーフは又自分が多大の希望を屬さるべき學識ある參謀將校となる時のことを驚

くほどまざりと思ひ浮べた……大學で彼の名前が麗々しく金色の板に書き出される。すると教授等が彼に光榮ある未來を豫言して大學に留ることを勧める。けれども彼は聴かないで隊附になる。そして先づ中隊長の職を勤め終へなければならぬ。勿論それは必ず自分の聯隊でなければならぬ。そこで彼は去年の大演習と測量の時に見たあの參謀將校のやうに華々しい服装をして、謙遜なやうで無頓着な、高慢なやうで感奮な、シツカリした態度をしてこの聯隊へやつて來るのだ。そして將校仲間からはなるべく避けるやうにする。亂暴な軍隊の習慣や交際やカルタ遊びや酒宴や——そんなものには無論眼もくれない。彼は唯こゝを自分の將來の地位や榮譽を達する途中の一宿場と心得てゐるのだ。

そのうちに機動演習が始まる。敵味方兩軍の大戦争となる。シユリゴウイチ大佐は作戰命令が解らないで氣が錯亂して部下をわでさせ、自分もあわでると軍團長が二度も傳令使を派して彼れに注意する。(おい大尉、助けてくれ給へ)と、彼はロマシヨーフに向つて、(昔の交誼でね。ハ、ハ、憶えてますか。君とは大分喧嘩もやつたね。何卒願ひよ)と、キマリ悪さうに哀願するやうな顔付で言ふ。が、ロマシヨーフは別段悪い顔もせず敬禮し

て、乗馬のまゝ前に身を乗り出して沈着な鷹揚な態度で、大佐殿、失禮ですが……：…聯隊の移動を處置するのは貴下の責任です。私の任務は命令を受けてそれを實行するだけです……：…と答へる。そこへまた軍團長から第三の傳令使が新しい譴責を齎してくる。令名赫灼たる參謀將校ロマシヨーフは益々上へ上へと地位が高まつて行く……：…ふとある大きな製鐵工場に職工の騒ぎが起る。直ちにロマシヨーフの中隊が派遣される。それが夜である。火事が盛に天を焦して夥多しい群衆の喚き、ばらばらと飛び来る礫の音……：…其處へ威風堂々たる大尉の姿が中隊の先登に立現れる。それがロマシヨーフである。（おい諸君！）と、彼は職工に向つて、（豫め辭つて置くが、こんな事が三度四度と續いたら射撃するかも知れないから、さやう心得て居ろ！……：…）すると叫聲や、口笛や、笑聲がドツと起る……：…同時にひゆうと礫が飛んできてロマシヨーフの肩を撃つ。けれど彼は男らしく泰然としてびくともしない。彼は後ろに居る兵卒を振り返ると兵卒等の眼は憤怒に燃えてゐる。彼等が神のやうに崇拜してゐる指揮官が侮辱されたのを憤つたのである。（前面の群衆に一斉射撃……：…中隊打て……：…）といふ號令と同時に百發の彈丸が

一斉に發射される……：…阿鼻叫喚の聲がすさまじい。數十人の死傷者が一塊になつてはたゞ斃れる……：…残りの者共はちりちりになつて逃げるやら、跪いて救助を求めらる。そこで騒が鎮つて、ロマシヨーフは感謝の言葉と模範的の勇敢に對する褒賞とを下賜されることになる。すると今度は戦争が起る……：…いや、戦争どころか、既に開戦に先つてロマシヨーフは軍事探偵としてドイツに行く。前以てドイツ語の研究を充分に仕上げてから出掛けるのだ。なんとといふ人を酔はせる冒險だらう！一人で、全くの一人つきりでドイツ行の旅券を隠袋に入れて、手風琴を携へて出掛けるのだ。手風琴は必ず持つて行く必要がある。手風琴を鳴しながら町から町へ彷徨ひ歩いて、心付を貫つて、馬鹿のやうに見せかけながら、ひそかに要塞や武器庫や兵營や野營の地圖を寫し取るのだ。と、限りない危険が身邊を取巻く。本國政府は彼との關係を絶つて、彼は國法以外に立つ。もし彼が貴重な報告を齎すことが出来たら、其時は彼に金と位階と地位と名譽とがある。然しそれが出来なかつたら彼は裁判も其他の形式もなしに早朝どこかの傾いた側防管舎の壕の中で銃殺されるにきま

つてる。其時彼に同情を表して白い布で眼を縛るやうに勧める。けれども彼は傲然と其布を地面に抛つて、(君達は眞の將校が死に面して怖がるとても思つてるのか)と言ふ。すると年老つた大佐は同情を込めて、(まあ聞き給へ。君はまだ若いやうだ。俺の悴は恰度君位の年輩ぢや。君の姓を名乗り給へ。君の母國の名だけでも名乗り給へ。さうすれば死刑を監禁に替へてやるから)——が、ロマシヨーフは冷静に、而も感歎に彼の言葉を遮つて、(大佐殿、御言葉は難有いですが、然しそれは無駄な事です。何卒すべきだけの事はして下さい。)かう言つて彼は狙撃小隊に向ひ、(おい諸君!)とさつぱりした語調で、勿論ドイツ語で言ふ、(朋友の好誼で諸君にお願ひするが、何うか俺の心臓を狙つてくれ!)情に脆い大尉がやつと涙を隠しながら、白いハンカチを振ると、ズドン!……

此光景が餘りにまご／＼と手に取る様に想像に浮んだので、今まで急ぎ足で大股に歩きながら太息を吐いてゐたロマシヨーフは不意に慄え出して、あまりの怖しさに拳を擦撃つたやうに握り緊めて心臓をどき／＼させながら一つ所に立慄んでしまつた。が、直ぐに彼は薄暗い中で自分に謝罪するやうに軽く微笑んで、ちよつと身を悚めてまた歩きだした。

と、早くもまた彼は流れるやうに速い、到底も制することの出来ない空想に囚れてしまつた。プロシヤ、オーストリアの二ヶ國と慘澹たる激戦が始まる。曠漠とした戰場、死骸、榴弾、鮮血、死傷!是れが此戰役の運命を決すべき大激戦なのだ。最後の豫備兵が近づいて来る。敵の背後にロシアの迂廻縱隊が現れるのを今か今かと待つてゐる。敵の恐るべき襲撃を支へなければならぬ。どんなことがあつても喰ひ止めなければならぬ。と、敵の最も恐ろしい砲火と猛烈な攻撃がケレンスキ隊に向けられる。兵卒は獅子のやうに奮闘して、其部隊は刻一刻と雨霰のやうに打出す敵弾の下に消えゆくにも拘らずかつて列を亂したことがない。さア今が運命の刹那だ!もう一二分支へてをれば敵の手から勝利を奪ひ取ることが出来る。だが、シユリゴウイチ大佐は狼狽へてゐる。大佐の勇敢なことは争ふまでもないが、然し其の神経は到底も此の恐怖に耐へられまい。大佐は眼を閉ぢてぶる／＼慄えながら、眞蒼になつてゐる…… 聽て大佐は喇叭手に退却喇叭を奏するやうに信號する。喇叭卒は喇叭を唇に當て、今しも吹かうとする所へ恰度丘の向ふから汗に浸つたアラビヤ馬に跨つた師團參謀長ロマシヨーフ大佐が飛び出して来て、(大佐、退却はなりませ

んど！ロシアの運命が此の一戦で決まるのです」と言ふ……シユワゴウイチ大佐は、ひかつ腹を立て、（大佐！此處は俺が指揮してゐるのですぞ。俺は神と陛下の前に誓つて答へます。俺は自分の聯隊を此の砲撃の下に立たせて置くことは出来ません。喇叭手、退却！）と叫ぶ。が、ロマシヨーフは早くも喇叭手の手から喇叭を引奪つて、（諸君！進軍だ！陛下と祖國は諸君を護つてゐるぞ！ウラー！）兵卒等はロマシヨーフの後に續いて死物狂になつて、天地を震撼するやうな鬨の聲を擧げて突進する。何もかも一緒にたに砲煙に包まれてしまつて、どこか深い淵の中へ轉がる。と、敵の部隊はどつと崩れて隊を亂して退却する。すると彼等の後ろの遙か向うの丘の彼方にははや新しい迂迴縱隊の銃劍がきらりと輝く。（諸君ウラー！大勝利！……）

ロマシヨーフはもう歩行してゐるのではなく、夢中になつて手を振り頭を振りながら駆けてゐたが、ふいに立停つて、やつと我に歸つた。と、彼は自分の脊中や手足や着物の下の裸體やに沿うて、誰かの冷たい指先がサツと走つたやうな感じがした。同時に髪の毛がぞつとよだつて、眼は嬉し涙で溢れた。彼は自分ながらどうして自分の家に歸つて來たのか解

らなかつた。で、今この熱中した幻夢からふと我に返つて、見慣れた門や、門の向うの疎らな果樹園や、その奥にある白い小さな孫屋などを驚きの眼を睜つて眺めた。

「だがどうしてあんな馬鹿々々しいことがこのドンダリ頭にはいり込んだんだらう！」と彼はキマリ悪さうに呟いて、臆けたやうに頸を兩肩の間に縮めた。

三 從 卒

ロマシヨーフは我家に歸つて、着のみのまゝ、劍さへ脱らずに寢臺の上にござり横になつて長いこと身動きもせずばんやり眼を据ゑて天井を眺めてゐた。頭がづき／＼して來て脊中がチク／＼痛んだ。が、心の中はかつて思想も、追憶も、感情も浮んだことがないやうにまるで空虚であつた。興奮も退屈も感じない。唯、ある大きな暗い冷かなものが、じつと心の底に横つてゐる。

窓の外では哀愁を帯びた優しい緑が、つた四月の夕暮が靜かに消えて行つた。玄關では從卒が何か金屬性のものを注意深く鳴らしながら、靜かに立働いてゐた。

「なんだか變だぞ」と、ロマシヨーフは獨言ちた。「人間は一秒時も考へずには居られないといふことを俺は何かで讀んだことがある。ところが俺はかうして寝ころんだきりなんにも考へずゐる。ほんとにさうか知ら？ いや／＼俺は今何も考へてゐないと云ふことを考へてゐるのだ——してみるとやつぱり俺の頭には何等かの車輪が廻つてゐるのだ。そら今また

かう言つて自分を詮議してゐるのも、これもやつぱり考へてゐるのだ……」

彼は暫くかうした重苦しいこんがらがつた考に耽つてゐたが、ふと彼は生理的に一種の不快感を感じた。なんだか頭蓋の下に汚らしい、灰色の蜘蛛の巣が張つて、それを切離すことが出来ないやうな氣がした。彼は枕から頭を擡げて叫んだ。

「ガイナーン！……」

玄關の方で何かた／＼と轉がる音がした——大方サモワルの煙突でゞもあらう。すると、從卒がまるで後から逐つかけてられてゞも居るやうに戸をドンと開けるが早い、すぐと閉めて、慌しく室の中へ飛んで來た。

「少尉殿、私であります！」と、ガイナーンは吃驚したやうな聲で叫んだ。

「ニコラーエフ中尉の宅から誰も見えなかつたかい？」

「いえ、全く誰も参りませんでした。」と、ガイナーンは叫んだ。

少尉と從卒とはもう久しい以前から互に信じ合つた、卒直な、いくらか家庭的の親密な間柄にさへなつてゐた。が、公けな事に關して返答でもする場合、例へば（確かにさうであ

ります)とか、(決してそうではありません)とか、(御機嫌よう)とか、(全く存じてをりません)とか、答へる時、ガイナーンは思はず平常軍隊で兵卒が將校に向つて言ふ時のやうな硬ばつた不自然な無意味な叫聲で嗚り立てた。それはもう彼が入營した最初の日から彼の心に深く喰ひ込んだ無意識の習慣であつて、恐らく一生脱れないであらう。

ガイナーンはチエレミス生れの男であるが、宗教は偶像信者である。それがどういふ譯かひどくロマシヨフの氣に入つた。聯隊では若い將校等の間に極めて無邪氣な子供らしい滑稽な戯れが流行つてゐた。それは從卒にいろんな奇抜な變つたことを教へ込むことである。例へばウェーツキン中尉は友人が彼の處を訪ねて來ると、いつも從卒のモルダーツイヤ人に、(おいどうだ、ブゼスクールーうちの穴倉にはまだシャンペンが残つてゐるか?)と訊く。するとブゼスクールはさも眞面目腐つて、(いえ、少しも残つてをりません、中尉殿。昨日貴方は最後の一ダースを飲んでおしまひなされた)と答へる。またある將校エビフアーノフ少尉は自分の從卒に、恐らく彼自身にすら解りさうもない豪さうなことを好んで訊いた。(おい、きさまは現代フランスの君主制の復興に就いて、どんな意見を持つて

る?)と少尉が訊くと、從卒は瞬きもせず、(はい、確かにさうであります、少尉殿。おれは大變結構な成績であります)と、トンチンカンな答へをする。またポベチンスキイ中尉は從卒に宗教入門を教へ込むので、從卒は全體から揉ぎ離された、突拍子もない質問に吃りもせず答へる。例へば(第三、この事は何故重要なりや?)——と訊くと、(第三、これは重要な事ではありませぬ)と答へる。また(聖なる教會は此事を如何に説くや?)と訊くと、(聖なる教會は、此事に就いては黙してをります)と答へる。またこの從卒は「ボリス・ゴドゥノフ」(プーシキ)の中のビーメンの獨白を馬鹿氣切つた悲劇じみた身振をしながら、べらべらと饒舌つた。それからまたフランス語で「ボンデュール」(今日は)「ムシユール」(貴下)、  
「ボン、ニユイ」(今晚は)、  
「ヴレ、ヴァー、デュ、テ、ムシユール」(お茶は如何ですか貴下)といつたやうな言葉を從卒等に使はせることも流行つた。こんなことはみんな一つ所に閉籠つた生活の狹隘と、退屈と、軍隊勤務以外に何等の興味もないところから自然と考へ出されたのであつた。

ロマシヨフは度々ガイナーンとその信仰してゐる神々の話をした。しかしその事に就

いては御當人のチェレミス人も極めてばんやりした智識しか持つてゐなかつた。それから殊によく話すのはガイナーンが陛下と祖國とに忠實を誓つた時のことである。實際、彼の誓文の仕方は頗る振つたものであつた。誓文の朗讀はそれ／＼宗派別にして、例へば正教信徒には司祭が讀み、加特力教徒には神父が讀み、猶太教徒には祭司が、新教徒には牧師がゐなかつたのでデイーツ二等大尉、回々教徒にはベーク・アガマーロフ中尉といふ風に誓文を讀んだ時、ガイナーンだけは全然特別な誓文の仕方であつた。聯隊副官が彼と彼の同郷者でもあり同信者でもある二人の兵卒に向つて鹽の付いたパンを劍の尖端へ載せて、順に差出すと、彼等はそのパンに手を觸れずにいきなり口で咬へて其場で喰つてしまつた。この儀式的象徴的な意味は大方かうであらう——この通り私は新しい主君に忠勤を表する印としてパンと鹽とを食つた。もし私が不忠なことをしたら私を劍で罰しても宜い——かういふ意味であらう。ガイナーンはこの特別な儀式に與つたといふことを多少誇りにしてゐるらしかつた。さうして彼は好んでそれを想ひだしては話すのであつた。が、その度毎に彼はこの物語に色々新しい枝葉を添へるので終には彼の話が、ある荒唐無稽な

信じ難い馬鹿げた滑稽になつてしまつた。それがまたロマシヨーフや彼の所へ來る少尉等を非常に面白がらせたのであつた。

ガイナーンは今に少尉が彼に、例の神々や誓文式のことを話しかけるだらうと思つたので、そこに突立つたまゝ、ニコ／＼と小伶俐しい笑を浮かべながら待ち構へてゐた。が、ロマシヨーフは如何にも元氣のなさうな口の利きかたをした。

「あ、宜しう……往つてさ……」

「少尉殿、新調の服を出しませうか？」とガイナーンは忙しうに訊いた。

ロマシヨーフは黙つて躊躇してゐた。彼は諾とも言ひたし、否とも言ひたし、また思ひ返して諾とも言ひたかつた。そして小兒のやうに幾度となく溜息を吐いて悲しうに言つた。

「さあ、いゝや、ガイナーン……もうそんなものに用はない……打棄つて置け……こゝへサモワルを持つて來い。そしてささまは集會所へ行つて夕飯を食へ……一體どうしたんだらう！」



「今日は態と行くまい」と、彼は強情に、然し力なげに考へた。（毎日々々人に退屈な思ひをさせるのも宜くない。さうだ……俺だつてあんなところはあまり面白くもない。）頭ではこれが固い決心のやうに思はれたが、どこか心の奥の方では自分はやつぱり昨日のやうに、この三ヶ月の間殆んど毎日してきたやうに今夜も亦ニコラーエフの家へ出掛けて行くに違ひないといふ考へが意識には判然と上らないが、どこでか密かに動いてゐるやうな氣がした。毎日夜の十二時頃ニコラーエフの家から歸る途すがら彼は自分の意志の薄弱なるを羞しくも腹立しくも思つて、もうこれから一二週間は行くまいとか、でなければ彼の所へは全く足を絶たうなど、心に誓ふのであつた。さうして彼は家へ歸つて寢臺の上に横になつて眠入るまではこの誓を守ることは容易であると信じてゐたのであつた。が、夜が明けて、日が厭々ながら廻轉して、やがて夕方になると彼はまたあの綺麗な明るい家の居心地のいゝ室、あの氣樂な、愉快さうな人々、とりわけあの女の美貌と愛嬌と妖媚の甘い魅力とに、一も二もなく殆んど病的に惹き付けられるのであつた。

ロマシヨーフは寢臺の上に坐り直つた。周囲はもう薄暗くなつてゐたが、彼にはまだ判

然と自分の室内が見えた。あゝ、毎日こんな同じやうな貧乏臭い僅かな身の周りの物を見るのが彼には堪なく退屈であつた。小さな事務卓の上には薔薇色の蓋を被せたランプと並んで慌だしくカチ／＼鳴つてゐる圓い枕時計と、狎の形をしたインキ壺とが載つてゐる。寢臺の傍の壁には鎗を持った黒人の騎士と虎とを織りだした絨氈が掛つてゐる。一方の隅には書物の入つてゐる脆弱つい置戸棚があつて、他の隅にはウイオリン・セロの匣の影繪が幻像のやう。唯一つしかない窓の上には筒のやうに巻き上げた廉が掛つて、戸の傍には着物の掛つてゐる衣紋掛がある。それをシートで蔽うてゐる。獨身者の將校や見習士官の室には誰の所にもきまつてこんなものがあるのだ。が、たゞウイオリン・セロだけは例外である。それはロマシヨーフが聯隊の軍樂隊に要らないのがあつたから持つて來たのである。が、彼は一年程まへまだマジヨルの音階さへ習ひ込まないうちにウイオリン・セロも音楽もすつかり棄て、しまつたのだ。

一年あまりまへに士官學校を出た當座、ロマシヨーフは此等の下らぬ物を樂しさうに且つ得意になつて備へ付けたのである。自分の住居、自分の所有物、それを自分の見立て

買つて来て自分の好きなやうに並べ立てる——こんなことが昨日まで學校の椅子にばかり坐つてゐて、お茶や朝食の時には學友と一緒に列を作つて行かねばならなかつた二十歳の青年の心には自愛心を煽るやうな歡びを湧せたのである。こんなみすばらしい贅澤品を買ひ集めてゐた頃は彼も多くの希望や計畫を抱いてゐた！……：……：鹿瓜らしい生活の順序もちやんと立てゝゐた。先づ最初の二年間は古典文學を根本的に學び、フランス語とドイツ語とを系統的に研究し、それから音楽を稽古する。次の年には大學へ入る準備をする。また社會生活と文學と科學との研究もどうしても必要だと思つた。で、そのためにはロマシヨーフは新聞も取れば、有名な月刊雑誌もとつた。特に自己修養のためにグンドの『心理學』リユーイスの『生理學』、スマイルスの『自助論』なども購つた……：……：が、それらの書籍ももう九ヶ月といふもの本棚に載つたきりで、ガイナーンもそれに塵拂を掛けるのを忘れてゐる。新聞は封も切らずにテーブルの下に放つてゐる。雑誌は次の半年分の前金を拂はないので、もう送つてよこさない。して、ロマシヨーフ自身は集會所へ來てはウオーツカを澤山飲む。聯隊貴夫人(聯隊附將校の夫人で聯隊の祝祭日などには世話をやくお轉變な婦人を謂ふ)とは長い怠屈な醜關係を結ぶ。そ

してその夫人とぐるになつて嫉妬深い肺病の夫を騙したり、賭博をしたりして次第々々に職務も朋友も自分自身の生活さへも苦にするやうになつた。  
 「どうも濟ないことを致しました」と、唐突に従卒が玄關から飛んできて叫んだ。が、すぐに彼はまるで異つた、卒直な、人好きのする調子で言ひ出した。  
 「私、すつかり申し忘れました。ペテルソン夫人から貴下に手紙が參つてをります。従卒が持つて來ましたが、お返事が頂きたいと言つてゐました。」

ロマシヨーフは顔を擧げて細長い薔薇色の封筒の封を切つた。その封筒の隅の方には手紙を咬へて飛んでゐる鳩が描いてあつた。

「ガイナーン！、ランプを點ける！」と、従卒に命じた。

「いと貴く懐しきお髭のシヨルジク様！」と、ロマシヨーフはよく見慣れた右下りの醜い筆蹟を讀みだした。(貴郎様にはもう一週間も私方へお出で遊ばされず候ま、私はお慕しさの餘り昨夜はまんじりとも致さず、一晩泣き申し申候。もし貴郎さまが私を見棄てなさる御思召に候は、私は貴郎さまの心變りを黙つて耐へて居る譯には參らず候間此事しかと

御記憶下され度候。モルヒネの罖を一飲すれば私は永久に苦しみを絶ち、貴郎さまは良心の苛責を受けなされるべく候。今晚七時半には必ずお出で下され度候。あの人は戦術教練に出で不在に候へば憚る人も無之候。私は貴郎さまを強く、強く、力の限り接吻いたし参らすべく候。何卒是非ともお出で下され度候。貴郎さまを十億萬度も接吻致し参らすべく候へば。貴郎のライサより。

二伸

思ひ出れば戀人よ、

あの水邊の柳の、

枝振の雄々しかりしことよ、

君は妾に熱き接吻を贈りて、

妾は君とそを願ちまひ。

三伸

ペー

來週の土曜日の夜會には必ず必ずお出で下され度候。私は前以て貴郎様を第三カドゥリール(舞踏)にお招き申候。それは深き意味あることに候ぞ!!!

エルペー

と、あつてお終ひの四頁めの一番下には次のやうに書いてあつた。

私に  
茲處に  
接吻し  
てよ

手紙は例のペルシヤ連翹の香水の匂ひがして、ところどころ香水の滴りの乾いた跡が黄色い斑点になつて、それがため、その下の字があたりへ滲み出してゐた。この甘つたるい匂ひや、いやに巫山戯たやうな手紙の調子が、あの赤ちやけた頭髪を持つた小さな狡猾い顔と一緒に突然ロマシヨーフに堪らない程嫌惡の感を起させた。彼はさも憎さげに小氣味よく手紙を眞二つに引裂いて、それをまた重ねては四つにも五つにも、手で裂けなくなるまで、ピリ／＼と千裂つた。そして齒を露出して下唇を喰ひ縛つたと思ふと、キレ／＼に裂いた

紙屑を机の下へ放り投げた。が、ロマシヨーフはかうした刹那にも、彼の習慣として、自分のことを他所事のやうに、ハツキリと第三人稱で考へるのであつた。

(そして、彼はさも輕蔑むやうに、がくしく苦笑した。)

かう思ひながらも、彼はまたすぐにニコラエフの家へどうしても行かねばならないやうな氣がした。(だが、これがもうほんとの最後だ!)と、彼は自分を欺かうとした。すると、彼は急に愉快になつて氣が落着いてきた。

「ガイナーン! 服を出せ!」

彼は慌だしく顔を洗つて、新調の服を着て、綺麗なハンカチに花香水を振りかけた。が、彼がもうすつかり身仕度をして出掛けようとした時、突然ガイナーンが呼び止めた。

「少尉殿!」チレミス人は何時にもない優しい、願ふやうな調子でかう言ひながら急にそこで踊り出した。彼はいつも何かにひどく感動するか、氣がそはくするかした時にはこんな風に踊り出すのが癖で、兩膝を交る突きたしたり、肩を揺ぶつたり、頸を引込めては、また延ばしたり、だらりと下げた手の指を激しく慄はせたりするのであつた。

「ささまにまだ何か用があるのか?」

「少尉殿! 私はあなたに是非お願い申してえことがありまして。あの白い神様を私に下さませんか。」

「何だ? 白い神様つて?」

「あれ、あなたが放棄れと仰つた物です。ほらあれです、ほら……」

彼は暖爐の向うを指した。その床の上にはふとある時ロマシヨーフが行商から買った、プーシキン(名詩人の有)の半身像が立つてゐた。この半身像はその銘とは異つてロシヤの偉大なる詩人ではなく、老耄れた猶太人の仲買人を像つたもので非常に出来の悪い上に、一ぱい蠅の痕がついてゐて堪らなく眼障りになるので、ロマシヨーフはとうとう近頃になつてガイナーンにそれを屋外へ放り出すやうに命じたのであつた。

「どうしてささまはあんなものが欲しいのだ。」と、少尉は笑ひながら「よし持つて行け、本當に持つて行け。おれは喜んで遣る、俺には要らないのだから。だが、どうしてささまはそれが欲しいのだ?」

ガイナーンは黙つて躊躇してゐた。

『まわ、いゝや。どうだつて構はない。』ロマシヨーフはかう言つて、『だが、まじまじはこれが誰だか知つてゐるのか？』

ガイナーンは愛嬌よく、そはくして、ニコニコ笑ひながら、前よりも激しく踊り始めた。

『存じまへん……』と袖で唇を拭つた。

『知らなければ教へてやらう。これはブーシキンだ。アレキサンドル・セルゲーイチ・ブーシキン。解つたか。俺の言ふ後から言つてみる！アレキサンドル・セルゲーイチ……』

『ブーシエフだつて？、よし〜ブーシエフでもなんでもいゝ』と、ロマシヨーフは點頭して、『だが俺はもう出掛けるぞ。もしペテルソン夫人から使ひが来たたら少尉は出掛けたが、どこへ行つたか分らないと言へ。いゝかね？だが、もし何か職務上の用が出来たら、俺はニコラーエフ中尉の家に居るから直ぐに駆けて来い。さよなら老爺！……集會所から

俺の夕飯を持ってきて食つてもいゝぞ。』

かう言つて彼は親しげにチェレミス人の肩を叩いた。チェレミス人はその返禮に黙つて、ニコニコと相好を崩しながら嬉しうに慣々しく笑つた。

四 戀 人

屋外はもう一寸先も見えない真闇暗だったので、ロマシヨーフははじめのうちは盲人のやうに道をさぐり／＼歩かなければならなかつた。大きな表靴を穿いた彼の足は飴のやうにねば／＼した泥濘の中へず／＼と深く陥つてそれを抜く度にシューツと大きな音がする。時々片方の表靴が固く陥り込んで足だけスボリと抜けるのでその都度ロマシヨーフは片足で立ちながら、他の足で暗の中を搜索して脱けた靴を拾ふのであつた。周囲の村はまるで死んだやうになつて、犬さへ吠えなかつた。低い、白い家々の窓からは此處彼處の燈火がぼろ／＼とした線のやうにゆら／＼と流れて、黄ばんだ鶯色のてか／＼した地上に細長い窓框を描いてゐた。が、ロマシヨーフがいつも通つてゐた、あのシットリとじ／＼／＼してゐる塀や、白楊の濕つばい皮や、道路の泥濘などからは春らしい、調子の強い、歡樂をそゝるやうな、そしておのづと氣持よく官能を刺戟するやうなある物がぶんと匂つた。通りを激しく吹捲つてゐた強い風さへもさながら慄へたり、縫れたり、戯れ付いたりしてゐ

るかのやうに、いかにも春らしくさ／＼に断え／＼に吹いてゐた。

ニコラーエフの家族が住んでゐる家の前まで来るとロマシヨーフ少尉は一寸氣が懸けて躊躇ふやうに立停つた。小さな窓は地の厚い肉桂色のカーテンに覆はれてゐた。が、その蔭には穩かな、明い燈火のあるのが感じられた。カーテンの一部分が撓んで、細長い隙間が出来てゐる。ロマシヨーフは胸を悸々させながら、室の中に聞えはしないかと出来るだけ息を潜めて窓硝子に頭を押しつけた。

彼はシューロチカの顔と肩とを見た。彼女は例の緑色の絹布を掛けた長椅子の上に心持前屈みになつて深く埋まるやうに坐つてゐた。その坐つたところ、軽く體を揺ぶつてゐるところ、頭を／＼と下げてゐる様子などで、彼女が何やら手仕事をしてゐるといふことが分つた。

彼女は突と身を延し、頭を擡げて、深く溜息を吐いた………彼女の唇は動いてゐる………（何を彼女は話してゐるのだらう？）と、ロマシヨーフは思つた。（あ、微笑つた！おあして話してゐる人を窓越に眺めてゐながらその話聲の聞えないのは、何だか變だなあ！）

すると、シユーロチカの顔からふいに微笑が消えて、額に皺が寄つたが、急にまた強い表情に唇が動いて来て、人を馬鹿にしたやうな、嘲るやうな微笑が浮んだ。やがて彼女は徐かに否定するやうに頭を振つた。(俺のことを考へてるのかも知れない)と、ロマシヨーフははら／＼しながら思つた。かうして此の若い女を眺めてゐると、まるで長い間見馴れてゐる、ある活々とした、可愛らしい畫中の女でも眺めてゐるやうに、ロマシヨーフの心はなんともいへないシン、ミリした、清い、穏かな氣分に涵された。(シユーロチカ!)と彼は思はず優しく呟いた。

シユーロチカはふいに仕事の手を止めて顔を挙げたが、急に吃驚したやうな表情をして窓の方に振向いた。ロマシヨーフは彼女が真正面に自分の眼を見たやうに感じた。で、彼ははつと驚いて、心臓がひやりと縮み上つた。そして慌て、窓桁の蔭に身を隠した。ちよつとの間彼は羞しくなつたのだ。彼は家へ歸らうとしたが、また思ひ返して木戸を通り抜けて勝手もとの方へ行つた。

ニコラーエフ中尉の従卒が、ロマシヨーフの泥塗れの表靴を脱つて、長靴を雑布で拭い

てゐる間、彼は温氣に曇つた眼鏡を近眼の傍近く持つて行つてハンカチで拭いてゐた。と客間からシユーロチカの甲高い聲がした。

『ステパンや、お前何か命令でも持つて来たのかい?』

(彼女は態とあんなことを言つてるんだ!)と、ロマシヨーフ少尉は少し疚しくなつて、

(俺がいつも今時分来るのをよく知つてる癖に。)

『いゝえ、私です、アレキサンドラ・ペトロウナさん。』と、彼は入口のところで態とらしい聲で叫んだ。

『わゝ! ローモチカさんですか! さあ、おはいんなさいまし。おはいんなさい。どうして貴方そんなところに、マ、ゴ、ゴとしてゐらつしやるの。あれウオローヂヤや! ロマシヨーフさんがお出でですよ。』

ロマシヨーフはソワ／＼しながらキマリ悪さうに脊を屈めて用も無いのに手を擦りながら入つた。

『アレキサンドラ・ペトロウナさん、あなたはもう私には飽き飽きなすつたでせうね。』

彼はかうも言つたら陽氣に打解けるだらうと思つて言つたのであつたが、かへつて氣拙

くなつた。そしてすぐに自分の言つたことが極めて不自然なやうに思はれた。

『また、そんな下らないことを！』と、シユーロチカは叫んだ。『何卒お坐り下さい、お茶

でもいれませう。』

ロマシヨーフの服をまじくとおぼびらに見入りながら彼女はいつものやうに自分の小

な、温かい、柔かい手で、彼の冷い手をぎゅつと力を籠めて握り緊めた。

ニコラーエフ中尉は彼に背を向けて書物や地圖や構圖などの散ばつてゐる机に向つて坐

つてゐた。彼は今年參謀本部附屬大學の入學試験を受けねばならないので、一年中熱心に

体みなしにその準備をした。彼はもう二年續けて落第したので、これでもう三度めの試験

である。ニコラーエフは自分の前に開いた書物の上になぐと眼を据ゑたまゝ、振向きもせず

肩越しに手をロマシヨーフに差出して落着いた低い聲で言つた。『ヤア今日は、ロマシヨーフ

君！珍しい事はないかね。おい、シユーロチカ！お茶を上げろ！俺は忙しいから失敬する

よ。』

（勿論俺は用もないのにやつてきたのだ。）ロマシヨーフはまたがつかりしたやうにかう思

つた。（あ、俺は何といふ馬鹿だらう！）

『いゝえ、格別珍らしいこともありませんが……：こなひだチエンタウルが集會所でリ

ョーフ中佐を蹴倒したさうです。なんでも先生ずぶ酔ひに酔つばらつてたさうですよ。それ

からどの中隊へ行つても土人形の試し斬を強ひられますので閉口です……：エビファン

は營倉に投り込まれたさうです。』

『さうか？』と、ニコラーエフ中尉はびそやり問ひ返した。『どうぞ話してくれ給へ。』



彼はシユーロチカと並んで椅子に腰を掛けてゐた。シユーロチカは編棒を手早く閃めかせながら何か編物を編んでゐた。彼女はいつも仕事なしで坐つてゐるといふことはなかつた。で、家にある限りのものは、卓布も、ナフキンも、ランプの蓋も、窓掛もみんな彼女の手で編れたものであつた。

ロマシヨーフは毯から彼女の方へ歩いてゆく絲を注意深く手に取つて、そして訊ねた。「これは何といふ編みか」

「ギビユール編つてゐるよ。あなたはもう十度も訊きなすつたわ。」

シユーロチカはふいに注意して少尉の顔に見入つたが、すぐにまた元のやうに眼を編物に落した。が、ぢきにまた眼を上げて笑ひ出した。

「まあ、ようございませうよ、ロマシヨーフさん……あなた少し落着いて坐つてゐらつしやいよ。あなたがたの號令なさるやうに、(氣を着け!)をなさいよ。」

ロマシヨーフははつと太息を吐いて、ニコラーエフの灰色の胴衣の襟からすつきりと眞白に出でゐる頑丈らしい頸筋をチラと眺めた。

「中尉殿は幸福ですね」と、彼は言ひ出した。「夏になればもうペタルブルグへおいでになつて……大學へお這入りなさるんですから。」

「さあ、それがどうなりますか、随分危なっかしいものですよ」と、シユーロチカは態と夫に當てこするやうに忌々しうに叫んだ。「もう二度も赤恥を掻いて聯隊へ戻つて來たのですからねえ。今度がもう最後なんですよ。」

ニコラーエフは後を振り向いた。柔い鼻髭を生やした、軍人らしい、人の善ささうな彼の顔は少し赤らんで、大きな黒い、牡牛のやうな眼は腹立たしく輝いてゐた。

「馬鹿なことを吐かすな、シユーロチカ！俺が及第すると言つたからには屹度及第して見せる」と、彼は掌で机を強く敲いた。「おまへは唯坐つてべら〜饒舌つてばかりりやいんだ。俺が言つたからには……」

「俺が言つたからには！」と、妻も夫の口真似をしながら小さな薄黒い掌で膝を敲いた。

「そんなら私が問題を出しますから答へてごらんさい。部隊の戦闘序列は如何なる要件を要すべきか。さあ、これをあなたは存じですか。」かう言つて彼女は意味ありげにロマ

シヨーフに向つて活潑に狡辯らしく眼で笑ひながら、「あの人よりか私の方がよほど戦術に詳しいことよ。さああなた、参謀將校のウォローヂヤさん、どんな要件が必要ですか？」

「これ、シユーロチカ！下らんことは廢せよ！」と、ニコラーエフ中尉は忌々しうに呟いた。が、急に彼は椅子ごとく、つと妻の方へ振向いた。さうしてそのバツと瞬いた美しく愚かしい眼のうちには殆んど驚異に近い絶望的な疑惑が浮んでゐた。

「待てよ、お嬢さん、實際の所、俺もすつかりは憶えてをらんやうだぜ。戦闘序列？戦闘序列の編制はでき得るかぎり敵の砲火を受けないやうにしなければならん。次には指揮に都合のいいやうに……それから……待てよ……」

「待ちますからその代り罰金をお出しなさい！」と、シユーロチカは勝ち誇るやうに遮つた……さうして彼女は顔を閉ぢて身體を振り振り首席の女學生のやうに、べチャ／＼早口で言ひだした。

「戦闘序列に缺く可からざる要件は敏捷と活氣と輕快と指揮の便と場所の適應とでありませぬ。戦闘序列は出來得る限り砲火を受けないやうに注意し、軍隊の集合と展開とが容易に

行はれ、且つ敏捷に行軍序列に造り換へられるやうに編制されなければなりません………  
……終り！………」

彼女は眼を開けてはつと息を繼いだ。そして始終笑を含んだ活々とした顔をロマシヨーフに向けて訊いた。

「この通りでせう？」

「畜生、馬鹿にいい記憶力だね。」と、ニコラーエフ中尉は自分の手簿を見つめながら羨ましそうに、また嬉しそうに言った。

「私達はいつとも一緒にやつてるぢやありませんか」と、シユーロチカが言った。「私なら今すぐになつて試験に及第しますわ。まあ肝腎なことは」と、彼女は編棒で宙を敲きながら

「一番肝腎なことは——系統よ。私共の系統——これは私の新發明です。私の誇りです。つまり私共は毎日々々數學、戦術、操典といふふうになん／＼と少しづつ片附けて行くのです——勿論砲術だけはとも私の手には負へませんの。彈道だとか何だとか可厭な方式ばかりありましてね——それが終ると今度はまた二ヶ國の國語を一日置きにやるのです。

そして地理、歴史もやつぱり一日置きに。」

「ではロシア語は？」と、ロマンヨーフは叮嚀に訊いた。

「ロシア語？そんなものは数に入れなくつてよ。文典はグロートので、もうやつてしまつたし、文章だつて大概分かつてますわ。毎年おなじやうなものが出るんですもの。『Para

paem, para bellum』(羅句語「戦争を以てするが、平和」を以てする)だの、『オネーギンの性格と其時代』(キンの傑作「エウゲーニイ」だの、そんなものばかりですもの、なにも六ヶ敷いたわりやしませんわ……………」

と、俄かに彼女は興奮してきて、ロマシヨーフの氣を他の事に散らさないやうにしようと、彼の手から毛糸を取り上げて、自分の今の生活の中心や興味がどんなものであるかを夢中になつて語りだした。

「私はいつまでもこんな所には居られません。とても居られません。ローモチカさん！まあ考へて見て下さい！こんなところに埋れてゐるのは零落れたと同じことですわ。聯隊の世話焼女となつてあなたがたの野蠻な夜會などへ出掛けたり、無駄口をたゝいたり、悪い

ことを企んだり、旅費日當のやうな……………僅かなお錢のために腹を立てたり、あ、厭だ厭だ……………お友達と代り番こにあんな詰らない舞踏會を開いたり、カルタをとつたり……………だのあなたは私共の住居がゆつたりしてゐるとか何とか仰有るけれど、まあそんなさいな、この町人じみた生活を！私が自分で編んだこの編物や、自分で縫ひ直したこの着物や、この汚らしい毛ばだつた敷物……………どれもこれもみんなあき／＼しますわ！まあ考へて見て下さいな、ローモチカさん。私には交際社會が必要です！廣い／＼本當の交際社會がね。光明や、音楽や、崇拜や、優しい媚や、氣の利いた話相手や、そんなものが必要なですよ。あなたも存じでせうが、ウオローヂヤは火薬こそ發明致しませんけど、ほんとに正直な、勇ましい勤勉家です。もしあの人が參謀本部にでも入ることになりましたら私は——誓つて——あの人のために立派な地位を造つてやります。私は外國語も解つてゐますし、どんな交際場裡へ出たつて、ちやんと一通りの作法は辨へてゐます。私には——なんと言つていゝんですか——婉曲とでも申しますか、どこへ行つてもその場所々々にちやんと適るやうな心の軟かみといふものがあります……………それからね、ローモ

チカさん、私をさらんなさい。よつく氣を付けてさらんなさい。私は人として、そんなに興味のない人間でせうか。また女としてそんなに醜い女でせうか。どの地圖にも載つてゐないやうなこんな洞穴のやうな汚らしい片田舎に、一生埋れてしまはなければならぬほどに。」

彼女は急いでハンカチで顔を覆うて、俄かに意地悪い、傲慢な、己惚れの涙を流して泣き出した。

吃驚した夫は合點のゆかないやうな、呆けたやうなふうをして、すぐに妻の傍へ走せ寄つた。が、シユーロチカはもう氣を取り直して顔からハンカチを取つた。彼女の眼はまだ意地悪さうな、烈しい炎に輝いてはゐたが涙はもう出なかつた。

「なんでもありませんよ、あなたなんでもありません」と、彼女は夫を手で推退けた。さうしてもう笑ひながらロマシヨーフに向つて、また彼の手から絲を引奪つて語るやうな、媚びるやうな笑ひ聲で訊ねた。

「氣の利かないローモチカさん、私は好い女だかわるい女だか返事して頂戴！ 女が頻り

にお世辭を求めてゐるのに返事をなさらないのは失禮以上といふものよ！」

「シユーロチカ、おまへはよく羞しくもないなあ」と、ニコラーエフは自分の席から分別ありげに言つた。

ロマシヨーフは苦しさうにおづ／＼して苦笑ひしたが、ふいに微かな顫え聲で眞面目に悲しげに答へた。

「よつばどあなたは美人ですよ！……」

シユーロチカは強く眼をしばた、いて、巫山戯るやうに頭を振り動した。で、そのほつれた髪の毛が額にさつと振り掛つた。

「ローモチカさん！あなたほんとに可笑しな人ねえ！」と、彼女は細い子供らしい聲で叫んだ。

が、少尉は顔を赧らめながらいつものやうに胸の中で考へた。(彼の心は酷く打碎かれた……)

みんな黙つてしまつた。シユーロチカは編棒をてばしこく動してゐた。ニコラーエフは

トウッセンとランゲシネテットの獨修書の中の文句をフランス語に翻譯して靜かに口の中  
で吐いてゐた。

黄色い絹の蓋を被せてあるランプの灯はゆら／＼と顫えて、音を立てゝゐた。ロ  
マシヨーフはまた絲を手にとつてそれを、そつと自分にも分らないくらの靜かに若い女の  
手から引張つた。彼の注意深い努力に對してシユーロチカの手が無意識に抵抗してゐるの  
が彼に微かな優しい快感を與へた。何か二人を繋いでゐる。不可思議な、波立つた流れ  
がこの絲を傳つてゐるやうに感じられる。

同時に彼は傍から目につかないやうに、そつと俯向いてゐる彼女の頭を飽かず打見守つて  
ゐた。さもシユーロチカと仲の好い、感動に満された内證話でもしてゐるやうに、微か  
に唇を顫せながら、黙つて胸の中で囁いてゐるかの如くかう考へた。

「私は、女ですかなんて、彼女はよくもあんなことを大膽に訊ねたものだ！ お、おまへは美しい！ 可愛い女だ！ 斯うして私は坐つておまへを眺めてゐる——なんといふ幸福  
だらう！ まあお聴きよ、おまへがどんなに美しいか話してやらう。お聴きよ。おまへの顔

は蒼白くつて、曇つてゐる。情熱の顔である。その顔には眞赤に燃えてゐるやうな唇があ  
る。その唇が接吻する時はどんなだらう！——それから黄ろい陰で縁取られたまなざし：  
……おまへがまともに見入つてゐる時、おまへの白眼は微かに縁が、つて、その大きな  
瞳には、どんよりした深い青みがある。おまへは黒髪女ではないが、しかしおまへはどこと  
なくツイガン人らしいところがある。だがその代りおまへの髪の毛は素的に綺麗だ。濃や  
かで、そつと指で觸つて見たいほどしつとりと、なだらかに、美事に後ろの方へ結び下  
げられてゐる。おまへは體が小さくて軽いから、私はおまへを小兒のやうに兩手で差上げ  
ることが出来る。だが、おまへは體がしなやかで強く、おまへの胸はまるで處女の胸のや  
うだ。いつも身體中が濃潤として、活動してゐる。おまへの左の耳の下には耳環の跡のや  
うな小さな黒子があるが、それがまた素的に美しい！……」

「あなた、新聞で將校の決闘した記事をお読みでしたか？」と、出し抜けにシユーロチカ  
が訊いた。

ロマシヨーフはふるつと顫えて、やつと彼女から眼を離した。

「いゝえ、読みはしなかつたですが、聞いたことは聞きました。どうしてです。」

「勿論あなたはいつものやうになんにもお読みなさらないでせう。ローモチカさん、ほんとにあなたは墮落しましたわね。私の考へだと、あの決闘は下らぬ結果になつたらしいですわ。私は決闘が將校たちの間では必要な、そして氣の利いたことだと思つてゐますの」と、シユーロチカはさも確信あるらしく、胸に編物を壓着けて、「ですが、なんだつてあんな不秩序なことをやるんでせう。考へてごらん下さい。ある中尉がもう一人の中尉を侮辱したんださうですよ。其侮辱がひどかつたので軍法會議を開いて二人に決闘を宣告したんださうですが、その後が下らない馬鹿々々しいんですよ。その條件といふのが、まるで死刑同様で、十五歩の距離を置いて、重傷を負ふまでは、果合ふと云ふんです……さうして二人が足で立つてゐるかぎりには射撃を續けると云ふんです。ですけどそれではまるで虐殺も同じことぢやありませんか。それではまるで……なんといつていゝか分りません！まあしかし、それはまだしもとして、その決闘の場所へ聯隊中の將校や、將校の夫人連までがゾロ／＼集つて来て、おまけにどこかの蔭で寫眞を撮つてゐたといふぢやありません

か。ねえ、あなた、あんまり酷いぢやありませんか。ウオローヂヤの言ひ草だとあなたのやうな不幸な少尉、つまり辱しめた方ではなく辱しめられた方の少尉が愈々四發目に腹に重傷を受けて、夕刻になつて悶え死をしたさうですよ。その少尉のところにはちやうど私共のミーヒンのことと同じやうに、老母と、少尉の妹の老嬢とが一緒に暮してゐたんです……まあ、お聴なさい。一體なんのために、決闘中にあんな残酷な戲れをする必要があるんでせう？それも決闘が許される早々からなんですもの。だから私を信じなさい、私を信じなさい！」と、シユーロチカは燃え立つやうな眼を輝かせながら叫んだ。「今に將校の決闘に反對する感傷的な人だちが出て來ます——私はそんな見下げ果てたわがまゝな臆病者を知つてゐますわ——今にあの人だちは、あゝ蠻行だ！あゝ野蠻時代の遺風だ！、兄弟殺しだ！などと騒ぎ出すにきまつてます。」

「だが、あなたは随分殘忍ですね、アレキサンドラ・ペトロウナさん！」と、ロマシヨーフは口を挿んだ。

「殘忍ぢやありません。決してさうぢやありません！」と、彼女は鋭く逆らつた。「私は寧ろ

る情深い方ですわ。私は私の頸を探る蟲一匹取るにもそうつと痛くないやうに氣を附けてゐるくらゐですの。ですけどよく考へてごらんさい、ロマシヨーフさん——これは、ごく單純な理屈ぢやありませんか。一體將校はなんのためです？ 戦争のためです？ 戦争のために一番必要なものは何ですか？ 勇敢と、豪氣と、それから死に面してビクともしないことです。そんなら、かうした氣象は平時にはどこに一番よく現はれるでせう？ 決闘ぢやありませんか。たゞそれだけの話です。分り切つたことですわ。して、それもフランスの將校に決闘が必要だといふのではありません——なぜといつてフランス人の血には名譽の念がもつと強い意味で深く喰込んでゐますから——またドイツの將校にも必要はありません——ドイツ人は生れ落ちる時からちやんと規律正しく訓練されてゐますから。ですけど我々には、我々には必要なんです！ さうなれば我々の將校仲間にもアルチャコーフスキイのやうな搏徒もなくなるし、ナザンスキイのやうな、んだくれの醉漢もなくなりませう。さうなれば集會で、給仕のゐる前で無遠慮な嘲笑や、不作法や、お互ひの口汚い罵り合や、またお互ひに心ではどうか外れてくれ、ばい、と思ひながら壘を頭へ投げつことをするやう

な、そんなことは自然となくなつてしまひます。さうなればあなたがたはお互にそんなに睨みつこなにかしないやうになります。さうして將校の言ふことは一言一句が問題になります。將校は軍紀の模範です。さうなれば銃丸を怖がることなんか、なんといふ女々しいことでせう！ あなたがたの職務は生命を賭することです。さうぢやありませんか！』

と、彼女は語るやうに、自分の話を切つて、専心仕事に取掛つた。また一しきり静かになつた。

「シユーロチカ！ 競争者といふ語はドイツ語にどう譯したらいいだらう？」と、ニコラーエフは書物から頭を擧げて問うた。

「競争者？」と、シユーロチカは考へながら編棒で柔かい髪の中の分けめの所を搔いて、「全體の文句を言つてごらんなかつら。」

「こゝにかう書いてあるんだ……今直ぐに見付けるよ……さうだ、我々の外國の競争者……」

『Unser ausländischer Nebenbuhler』シユーロチカは急いで即座にかう譯した。

「ウンゼル」と、ロマシヨーフはうつとりとランプの灯に見惚れながら小聲で繰返した。  
 (彼女が何かに胸を亂した時彼女の言葉はちやうど銀の盆の上に散弾を振撒いたやうに勢よく甲高にはつきりと口を突いて出る)と、彼は考へた。「ウンゼル——なんといふ可笑な言葉だらう……ウンゼル、ウンゼル……」

「あなたは何をぶつ／＼いつてゐるの、ローモチカさん？」と、ふいにシユーロチカはさつとなつて訊いた。「私の居る所で噺言なんか言つちやア可厭よ。」

ロマシヨーフは呆けたやうな微笑を浮べた。

「私は噺言を言つたのではありません……私はウンゼル、ウンゼルと心の中で繰返したのです。なんといふ可笑な言葉でせう……」

「なんです、下らない……ウンゼルですか！ どうして可笑しいの？」

「まアごらんさい……」と、彼は自分の考へをどう言ひ現はしたらい、か、ちよつとまごつてゐるが「ある一つの言葉を長いこと繰返しながら、考へ込んでゐると、その言葉が突然意味を失つて變なふうになります……さうですね、なんといつたらいいでせう。」

……」

「あ、解りました、解りました！」と、シユーロチカは慌だしく、嬉しさうに彼の話を遮つた。「ですけどそれが今はさう容易くは参りませんが、以前子供の時分には——あ、それがどんなに面白かつたでせう！……」

「さうです、さうです、その子供の時分にです、さうです。」

「どうです、私はよく憶えてるでせう。私を特別に驚した言葉をまだ憶えてますわ。それは「大方」といふ言葉でしたが、私はしよつちゆう眼をつぶつては身體を揺りながら「大方、大方」と、繰返してゐたものです……さうすると急にその言葉がなんの意味とも譯が分らなくなつて、一生懸命思ひ出さうとしても思ひだせなくなつたのよ。さうして私にはその言葉がなんだかから尻尾の二本ある肉柱色の赤みが、つた斑點のやうに思はれるのでした。あなたもやつぱりさうなんでせう？」

ロマシヨーフは優しさうに彼女を眺めて、

「二人の思想が同じなのも不思議なやうですね」と、彼は小聲で言つた。「ですが、ウンゼ



ルつていふと、なんだか、かう高い高い、瘦せかけた、そして刺のある何かのやうですね。ちやうどひよろ長い意地悪い昆虫か何かのやうに。』

『ウンゼルがですか！』と、シューロチカは頭を擧げた。そしてロマシヨーフの言つたことを心に思ひ浮べながら眼を細くして、遠く室の暗い隅の方を眺めた。『さうぢやないわ。あれは何だかから緑色の尖がつたもの、やうですわ。あ、さうく無論昆虫よ。蝗見たやうで、もつと厭らしい、もつと毒々しいものよ……まあローモチカさん、私共はなんといふ馬鹿者でせう。』

『それからまだこんなことがあります』と、ロマシヨーフはさも不思議さうに話しました。『これもやつぱり子供の時の方がずつとはつきりしてゐました。私はある言葉を發音するのにできるだけそれを長く引ッ張るのです。一字々々を限りなく引ッ張るのです。すると、突然周囲の物が何もかも消えてしまつたやうに、ちよつとの間變な、變な氣持がするのです。さうなると自分が話してゐるといふこと、生きてゐるといふこと、また自分が考へてゐるといふことが不思議に思はれるのです。』

『あ、私もやつぱり同じやうな經驗がありますの！』と、シューロチカは愉快さうに言ひました。『ですけど、ほんの少し違つてゐてよ。私はよく力の續くだけ息を耐へて考へてゐるのです。これなら！私は息をしないのでゐます。今でもまだ息をしません。ほらまだしません、まだよ、まだよ……さうするとそれが變な氣持になるのでした。私は「時」が私の傍を通り過ぎるのを能く感じました。いや、さうぢやなくつてよ。大方「時」は全くなかつたでせう。こんなことは説明ができませんわね。』

ロマシヨーフは歡喜に溢れたやうなまなざしで彼女の顔を見ながら低い、幸福さうな、静かな聲で繰返した。

『さうです、さうです……これは説明ができません。これは不思議なことです……不可解です。』

『だが、心理學者達！もういゝかげんに止し給へ。そろそろ夕飯の時間だ。』と、ニコラーエフは椅子から起ちながら言つた。彼は長い間坐つてゐたので足が痺れて、背が痛み出した。で、身を延して兩手を上にぐつと擧げて、胸を突き出した。この猛烈な運動のために

彼の大きな筋張つた體の關節がこつ／＼鳴つた。

せ、こましいけれど、こざつぱりとした食堂の中は光澤消の白い陶器製の釣ランプにかつと照されて、食卓には冷たい食事が備へてあつた。ニコラーエフは飲まなかつたが、ロマシヨーフのために火酒の小壺が出されてゐた。シユーロチカは愛想の好い顔をさむつかしさうに響めていつものやうに無遠慮に尋ねた。

「あなたは勿論この汚物なしでは済まされないのでせうね？」

ロマシヨーフはキマリ悪さうに微笑んで、そしてどまついたためにウオツカに咽んで、こ／＼咳をしはじめた。

「まあ、あなたはほんとに羞しありませんか！」と、女主人はきめつけるやうに言つた。

「まだ碌に飲み方も御存知ないのに……あなたが惚れ込んでゐらつしやるナザンスキイなどは、とつ／＼に葬られた人ですから仕方がありませんが、あなたのやうな方が一體どうなすつたんです？ そんなにお若い、華やかな、出來の好い青年が、ウオツカがなけりや食卓に就かないなんて……一體何うなすつたんです？ それもこれもみんなナザンスキイに傷は

れたんですわね。」

彼女の夫は今届いたばかりの命令を讀んでゐたがふい／＼に叫んだ。

「あ、ナザンスキイといへば家事の都合で一ヶ月間休職になつたやうだ。先生屹度飲んだと見えるな？ 君、ロマシヨーフ君、君は大方彼に逢つたやう？ どうだ、先生酔つぱらつてゐたかね？」

ロマシヨーフは驚いて眼を瞬いた。

「いゝえ、私は逢ひませんでした。が、大方飲んだのでせう……」

「あなたのナザンスキイは可厭な人ですわねえ」と、シユーロチカは憎さげに、たしなめるやうな低い聲で言つた。「若し私だつたらあんな人間は狂犬みたやうに撃殺してしまひますわ。あんな將校は聯隊の恥辱です、面汚しです！」

ニコラーエフは矢鱈に澤山食べたので、夕飯後直ぐに勉強に取掛ると忽ち欠伸をはじめた。そしてしまひには明らさまにかういつた。

「みんな、ちよつとのま就眠ではどうだな？ 昔の有名な小説の中に言つてある通り「微

「睡」んではどうだな。」

「それは至極結構です、中尉殿！」と、ロマシヨーフは自分でも気が附くほど、なんだか慌てたやうな、機嫌を取るやうな打ちくつろいだ調子で言つた。同時に彼は席を立てて悲しさを考へた。「さうだ、此家では俺に對して餘りに無遠慮過ぎる。なんだつて俺はこんなところへ陥つたんだらう？」

彼はニコラーエフが彼を家から逐ひだしたくてあんなことを言つたやうに感じた。が、わざと素知らぬふらに、シユーロチカと挨拶する前に、ニコラーエフと別れの挨拶をしながら、彼は次の瞬間には優しい女の強い愛想好い握手を受けるのだと思つて非常に嬉しかつた。彼は歸る時になるまいとも其事を考へた。して、その瞬間が來ると彼は此の蠢惑の握手に全心を奪はれてしまつて、シユーロチカが次のやうなことを言つても耳に入らないくらゐであつた。

「あなた、私共をお忘れなならないで頂戴ね。此方ではあなたの入らつしやるのをいつも喜んでゐるんですから。あなたのナザンスキイなんかと酔つぱらつたりするよりか、私共、

の家にお出でなさる方がよつほど気が利いてゐますわ。唯私共があなたに對して無遠慮なことだけは幾重にも御承知を願ひますよ。」

ロマシヨーフはこの言葉をばんやり聞き流しながら、往來へ出てからはじめてその意味を解するのであつた。

「然うだ、俺に對してあんまり無遠慮過ぎる」と、彼は苦い侮辱を感じながら呟いた。彼と同じ年輩の若い自信の強い人々が斯うした侮辱に對して酷く感じ易いやうに。

五春の夜

ロマシヨーフは玄關へ出た。夜は一層濃く、一層暗く、温くなつたやうだ。少尉は柴籠に沿うて手探りで歩いた。そして自分の眼が闇に馴れるのを待つてゐた。其時ニコラーエフの家の勝手口がふいに開いて、ぼんやりした黄色い光の太い線をちよつとの間暗の中に投げた。誰か泥濘の中へボチャリと飛び下りた。同時にロマシヨーフはニコラーエフの從卒のステバンのブン、ン、ン、ンと發憤つてるやうな聲を聞いた。

「彼奴、毎日々々歩いてばかりゐらア。一體なんのために歩いてるだか譯が分らねえ！……」

と、もう一人の、少尉の聞き慣れない兵卒の聲が長い、倦怠るさうな腰と一緒に冷淡に答へた。

「何か用でもあるだらうよ、兄弟……いや、餘り暇すぎて、肥太つてばかりかゝるで、仕方なしにあんな真似でもして遊んでゐらアね。では、お別れにしよう、ステバ

ン」

「では、さよなら、パウリン！またそのうちに寄らねえか。」

ロマシヨーフは扉にびつたりと寄り添つた。彼はたまらなく羞しくなつて闇の中に拘らず真赤になつた。そして急に身體中が汗に滲んで、足や脊中の皮膚がちやうど無數の針でチク、ンと突刺されるやうな感じがした。（愈々お終ひだ。從卒ですら笑つてゐやがる！）彼は斯う思つてがっかりした。と、突然今晚のことがのこらず彼の記憶に上つた。そしてニコラーエフ夫婦の間に交されたゐるんな言葉や話の調子や眼付のうちにさつき氣の付かなかつたゐるんな細かい點が見出された。それらの點は今から考へて見ると皆飽いた客に對する無作法や、嘲笑や、堪へ難い昂奮を現はしてゐることが分つた。

「何たる侮辱だ、何たる侮辱だ！」と、少尉は一つ所に突立つたまゝ、身動きもせず呟いた。「おまへが來るとたまらなく可厭になるといはんばかりだ……いやもう澤山だ。俺はもうこれで澤山だといふことがよく分つた！」

ニコラーエフの家の客間の灯がぼつと消えた。（おや、もう二人は寢室へ行つた）と、ロ

マシヨーフは考へた。さうして彼はニコラーエフ夫婦が臥床に就かうとして、最う長い間添うてゐる人々に見る如く、お互ひに馴れ切つてしまつて、恥も義理も忘れて、平氣に衣物を脱ぎながら彼のことを話してゐる有様を常になくまざりと想像した。彼女は袴一枚になつて鏡の前で夜化粧の髪を梳してゐる。ニコラーエフは肌着一つになつて寢臺に腰を掛けながら力を入れて長靴を脱いでゐる。それがため顔を眞赤にして腹立たしく、そして癢ぼけたやうな聲で、(シユーロチカ、俺はもうおまへのロマシヨーフには實に飽き飽きした。それだのおまへはどうして彼奴とあんなに戯れ付いてゐるんだ?)といふ。と、シユーロチカは口に留針を咬へたまゝ、振向きもせず、鏡に映つてゐる夫に向つて不満足さうな調子で、(彼の人は決して私のぢやありません、あなたのですわ……)と言ふ。

ロマシヨーフがかうした苦しい辛い思ひに揺揺られて、歩き出すまでにはもう五分も経つてゐた。ニコラーエフの家を繞らしてゐる長い垣根の傍を彼は偷ひやうに通つた。宛も自分の足音を聞かれるのを恐れるもの、如く、また何か悪者でも捉まへようとするかのやうに足を泥濘から引き抜くにも氣を附けた。彼は自宅へ歸りたくはなかつた。いや、却つ

てあの煩囀くほど飽き飽きした家具のはいつてゐる、狭苦しい、一つしか窓のない細長い室のことを想ひだすとせつないやうな可厭な感じさへするのであつた。(よし、彼女への面當てにナザンスキイの所へ行つてやれ)と、彼はふいにかう決めた。と、同時に彼はこの思ひのうちに一種の復讐的の満足を感じた。(彼女は俺がナザンスキイと親密なのをけなしたから、よしその面當てだ!構ふものか!……)

彼は眼を空に舉げて手を固く胸に壓着けて熱した調子で獨言ちた。(俺はもう今日限り彼等の所へは誓つて、誓つて行かない。こんな屈辱はもう二度と堪へられない。誓つたぞ!)そしてすぐに例の通り心の中でかう附け足した。

「彼の生々した黒い眼は決心と侮蔑に輝いた!」

その實彼の眼は決して黒くはなく、至極平凡で、緑色の輪廓を持つた黄ろい眼であつた。ナザンスキイ中尉は友人のゼグルジユト中尉の家の一室を問借りしてゐた。このゼグルジユト中尉といふのはかつて職務上に何等不都合の點もなく、また露土戦争に参加したことがあつたにもかゝらず、恐らくロシアの陸軍部内では一番の古參中尉であらう。何等か

の運命的な、明し難い事情で彼は昇級されなかつたのである。彼は鯨夫で、四人の幼ない子供まで有りながら、しかも四十八ルーブルの給料でどうかからか遣り繰りを付けてゐる。彼は大きな家を借りて、部屋を獨身の將校たちに間貸して料理人の世話をしたり、鶏や七面鳥を飼つたりした。そして何うしたものか薪を其折々に特別廉價で買ひ取るのが頗る上手であつた。自分の子供には自分で槽の中で湯を遣はせる、病氣をすれば家傳の調劑で癒す、また彼等のチョッキでもズボンでもシャツでも一切自分の手で縫つてやるといふ、極めて調法な人である。まだ結婚しない前はゼグルジユト中尉も多くの獨身將校のやうに女の手仕事に熱中したのだが、今は必要に逼られてそれに従事するやうになつた。口性ない人々は彼が自分で拵へた手工品をそつと袖の下に隠してどこかへ賣りに行くと言ひふらしてゐる。

しかし凡てのこんな細々しい家政上の工夫もゼグルジユトにはさう扶助にはならなかつた。家禽は傳染病で死んでしまふし、部屋はあくし、下宿人は食事が悪いといつて悪口を吐いたり、お金を拂はなかつたりする。で、一年に四度はきつと時を決めて瘡をこけたひ

よる長い、髻ひしやなゼグルジユトがガツカリしたやうな汗ばんだ顔付で、どこからか金を引出す目的で、町の中を彷徨いてゐる姿を見ることがある。其際の彼の煎餅形の帽子は脇が脇の方へ傾いて、露土戦争前に拵へた古いニコライ帝時代の外套は、バタ／＼として、彼の肩先で翼のやうに翻へつた。

今彼の家の部屋々々には灯が點いてゐた。ロマシヨーフは窓に近づいて見ると、ゼグルジユト中尉が釣ランブの下の圓卓に向つて坐つてゐた。彼は禿頭を低く俯向けて、ぢ、ぢ、ひ、ひ、皺くちやな、温順しい顔をして、赤い紙で何か布片を繕箔してゐた——大方、小ロシヤ型のシャツの胸當でもあらう。ロマシヨーフは窓硝子を、トン／＼と叩いた。ゼグルジユト中尉は吃驚して慄え上つて仕事を傍へ押除けて窓際に近寄つた。

「私です、中尉殿、ちよつと開けて下さいませんか」と、ロマシヨーフが言つた。  
ゼグルジユト中尉は窓床の上に這ひ上つて、通風口から禿げ上つた額と、片方へ靡いてゐる薄い鬚とを突出した。

「あゝ君か、ロマシヨーフ少尉。だが、どうしたんだ？」

「ナザンスキイ中尉は御在宅ですか？」

「居るとも、居るとも、何所へ彼が出るものか！あ、吃驚した！」ゼグルジエト中尉の鬚が通風口の中で顛えた。「君のナザンスキイにもてこずつたよ。もう二ヶ月も賄つてゐるのに、拂ひの方はいつも口先ばかりなんだからな。彼が引越して来たそも〜の時、俺は間違のないやうに、よつく頼んで置いたのに……」

「さうです、さうです……そりや……實際です……」と、ロマシヨーフは呆けたやうに口を入れて、「ですが、中尉はどんなふうです！面會ができるでせうか？」

「できるだらうと思ふんだが……なんでも先生、しよつちう室の中を往つたり來つたりしてゐる様子だよ」と、ゼグルジエト中尉はちよつと聴耳を立てた。「ほら、今でも歩いてゐるやうだ。君、解つたかね。俺は間違のないやうにと先生にきつぱり言つて置いたのだ。その上拂ひはキチン〜するやうに約束までしたのだよ……」

「さあ、ご免下さい、中尉殿、私は今すぐに」と、ロマシヨーフは話の腰を折つて、「さう  
れまたそのうちお伺ひ致しますせう、今は大急ぎの用もありませんから……」

彼はもつと先の方へ行つて角を曲つた。植込の奥にあるナザンスキイ中尉の室には灯が  
点いてゐた。一つの窓は開け放たれてあつた。ナザンスキイ自身は上衣も着ないで襟をくつ  
ろげた下衣一枚になつて室の中をせつつかしくあちこちと歩いてゐた。彼の白い姿と金色  
の髪の毛の生えた頭とが窓口にちらついたり、壁の蔭に隠れたりした。ロマシヨーフは植  
込の扉を乗り越えて彼を呼んだ。

「誰方です？」と、ナザンスキイはさも呼ばれるのを待つてゐたものゝ如く、窓床の上から  
ヌツと顔を突出しながら靜かに訊ねた。「あ、ロマシヨーフ君か。ちよつと待ち給へ。入口  
から入るのは遠廻りで暗いから、窓から上り給へ。さあ、手を出し給へ。」

ナザンスキイの室と來たらロマシヨーフのよりも一層みすばらしい。窓際の壁の傍には  
弓形に曲つた、低く、狭い、薄ッぺらな寢臺が横はつてその鐵床の上にはたつた一枚の蓋  
薇色をした紙織の蒲團しか載つてゐないやうだつた。他の壁際にあつけない白木のテーブ  
ルと二脚の粗末な床几とがあつた。室の一方の隅には狭い木造の置戸棚が祭壇の代りでも  
もあるらしくびつたり壁際に壓し着けられてゐた。寢臺の脚には手荷物切符をべた〜貼

り廻してある赤ちやけた革のカバンが置かれてある。これらの物と机の上のランプのほかにはこの室には何にもなかつた。

「やあ、今日は！」と、ナザンスキイはロマシヨーフの手を強く握り緊めて振りながら、じつと思ひ沈んだやうな美しい碧色の眼付で真正面に彼を見詰つて言つた。「さあ、此の寢臺の上に坐り給へ。君は僕が病氣届を出したのを聞いたかね？」

「え、たつた今ニコラーエフ中尉がその話をしました。」

ロマシヨーフはまた從卒ステパンの恐ろしい言葉を思ひ出して苦しうに顔を顰めた。

「あ、君はニコラーエフの家にゐたのか？」と、ナザンスキイは急に元氣付いて、さも興味のあるやうな調子で訊いた。「君は彼人たちの所へ度々行くのかね？」

ナザンスキイのこの問が何時にない調子だつたので自然とロマシヨーフの心には用心しなければならぬといふ本能的の心が萌して来て、嘘をいふ氣になつた。で、彼はどんざいに答へた。

「い、え、極く偶にしか行きません。今日はたゞ偶然立寄つたのです。」

ナザンスキイは室の中を往つたり來つたりしてゐたが、ふと置戸棚の前に立停つて、それを開けた。その中にはウオッカの罇ときちやうゆんに細かく切り割いた林檎とが戴つてゐた。お客に脊中を向けたまゝ、彼は慌だしく自分の盃に「ナミ」と注いで、ぐつと一呑みに呑みほした。ロマシヨーフは彼の脊中が薄い木綿の underwear の下で痙攣するやうに顫へるのを見た。

「君はどうだね？」と、ナザンスキイは置戸棚を指さしながら勸めた。「肴は澤山ないが、もし饑じければ卵焼だけは出来るよ。原人アダム(家主)を説き付けやうか。」

「有り難う、私はまた後で。」

ナザンスキイは兩手を隠袋に突込んで室の中を歩いた。彼は二回ほど歩き廻つてから、あたかも途切れたばかりの話を續けるかのやうに話し始めた。

「さう、僕はかうしてしよつちう歩きながら考へてゐる。それで君、僕は幸福なんだよ。明日は聯隊でみんなが僕の酔つぱらつてゐることを言ひ觸すだらう。だが、それが何だ。そりや或は、事實かも知れないけれど、單にそれだけぢやない。僕は今幸福でこそあれ、



決して病氣でもなければ煩悶してもゐないのだ。平常は僕の理智と僕の意志とは壓迫されてゐる。さうして僕は饑多た臆病な周囲の社會と融和して下らないものとなつて、自分自身が退屈になる。それでゐて僕は賢い。思慮分別がある。例へば僕は軍隊勤務を憎んでゐながらやつぱり服務してゐる。なんのために僕は服務してゐるのか、その理由は誰も知らない！それといふのも子供の時分から今まで周囲の人々が僕に向つて人生の最大要義は服務して飽食暖衣するにゐると繰返し繰返し説き聴かせたからだ。彼等の言ふには哲學なんか下らないもので、あんなものは仕事のない閑人とか、母譲りの遺産のある人々の道樂にすることださうだ。で、僕なんかまるで心にもないことをして、實生活の動物的な恐怖のために時としては残酷だとも思はれ、時としては無意義だとも思はれるやうな命令をも實行してゐる。僕の存在は垣根のやうに單調で、兵卒の服のやうに灰色だ。僕は強ひて思ひに沈むやうなことはしない——まして戀愛や、美や、我と人類との關係や、自然や、平等や、人類の幸福や、詩や、神や——さういふことに就いて強ひて大聲を張上げて論議するやうなこともしない。そんなことを言ひ出さうものなら彼奴等はすぐに大口を開いてハッハ

ハ、そんなことはみんな哲學だと笑ふにきまつてゐる。陸軍歩兵將校の分際で高尚な問題なんか考へるのは、滑稽で野暮で許すまじきことだ。そんなことは哲學なんだ。だから論語なんだ、暇潰しの下らん空言なんだ、とかう言ふにきまつてゐる。」

「ですけど、それが人生の要義です。」と、ロマシヨーフは思ひ沈んだ調子で言つた。

「今に僕は彼奴等にそんな残酷な名で呼ばれる時が来るのだ」と、ナザンスキイはロマシヨーフの言葉も聴かず言ひ續けた。彼は始終室の中を往つたり來たりしながら時々ロマシヨーフをそつち除けにして自分の往つたり來たりしてゐる室の兩方の隅に向つて説き付けるやうな身振をする。「ロマシヨーフ君、その時こそ僕の自由な時なんだ。僕の心と意志と理智との自由な時なんだ！さうなれば僕は或ひは變調な、けれども深刻な、不可思議な内的生活をするかも知れない。まあ謂はゞかういふ充實した生活なんだ。僕の見たり、聞いたり、讀んだりしたあらゆるものが、みんな僕の心の中に復活して、非常に輝かしい光明と、深い、限らない意味とを受ける。さうした生活なんだ。その時僕の記憶力はちやうど稀有な天啓の博物館のやうになる。どうだ、解つたかね。僕はロッシールドなんだ。僕はな

んでも自分の前に落ち来る最初の物を取る。そして其れに就いて、長い間徹底するまで歡樂の心持で考へ込むのだ。例へば人々のことや、邂逅の事や、性格のことや、書物のことや、女のことや——あゝ別けて女の愛のことを考へ込むのだ！……時として僕は古への偉人のこと、科學の爲に殉じた人のこと、賢人のこと、英雄豪傑のこと、それから彼等の驚くべき教訓などを考へる。ロマシヨーフ君、僕は神を信じないが、然し、時々僕は聖人の事や、苦行者の事や、殉難者のことを考へては聖典だの、讚美歌だのを思ひだすことがある。僕は君、神學校にも居たことがあるからね。それに僕の記憶力は異常だからね。僕は凡てこれらのことを考へてゐるんだ。そして時々他人の喜びや、他人の悲みや、またはある立派な不滅の行爲に打たれて痛切に感ずる場合がある。そんな時にはかうして一人で歩きながら……泣いてるんだ——夢中に、熱して、泣いてるんだ……」

ロマシヨーフは静かに寢臺から立上つて開いてゐる窓の上に立膝をして坐つた。それで彼の脊中と足の裏とが兩方の窓框につつばつた。この明い室の中から眺めると夜が一段暗く、一段深く、一層神秘に見える。暖かい、氣まぐれな、その癖ソヨとも音のしない風が

窓下の唯ある低い灌木の黒い葉を動かした。何とも言へない不可思議な春の香りに充されたこの柔かい空氣、この靜寂、この暗黒、そして殊更に輝かしく暖かさうに見えるかの星影——それらの物には秘密な情熱の醗酵が感じられ、母胎の渴望と、地や、植物や、樹木や、全世界の蕩けたやうな情慾とがシ、ミ、と了解された。

が、ナザンスキイは絶えず室の中を歩き續けて、ロマシヨーフの方を見向きもせず、まるで室の壁や隅に向つて話しかけてゐるやうに話した。

「こんな時には思想が極めて自由に、様々に、ふいに迷り出る。そして理智は鋭く明くなつて、想像はまるで水の流れのやう！僕の思ひ浮べるあらゆる事物や、あらゆる人物がまるで寫眞機に映つたやうに、僕の前にくつきりと浮出て、心ゆくばかり鮮かに現れる。だが、君、この感情の鋭敏が、この靈性の輝きが、神経系統に及ぼした酒精の生理作用に過ぎないといふことを僕はよく知つてゐるよ。僕は始めて此の内的生活の不可思議な興奮を経験した時は、これこそ眞のインスピレーションだと思つたね。が、さうではなかつた。その中には何等獨創的などころもなく、何等堅實などころもなかつた。それは單なる病的

作用に過ぎなかつた。それは單にその度毎に益々河床を浸蝕してゆく不意の出水に過ぎなかつた。さうだ。けれどもやはりその馬鹿な事が僕に取つては楽しいのだ。それに：衛生の心掛などは屁とも思はない。數千年も生き延びて珍らしい長命の模範だと、新聞紙の雜報欄に書き立てられたといふやうな馬鹿げた望みなんか、口にするのも忌々しいや。俺は幸福なんだ！そしてそれで澤山なんだ！」

ナザンスキイはまた置戸棚の所へ行つて一杯飲み干して叮嚀に戸棚を閉ぢた。ロマシヨーフも懶さうに、殆ど無意識に起つて行つて同じく彼の眞似をした。

「中尉殿、あなたは私の來る前に何を考へてゐたんです！」とロマシヨーフは前のやうに窓床の上に坐りながら訊いた。が、ナザンスキイは殆んど彼の問には耳も假さなかつた。

「例へば女のことを空想する、何といふ快樂だらう！」と、彼は向うの隅まで行つて、ぐるつと此方の隅に向き直りながら説き付けるやうな鷹揚な身振りをして叫んだ。「いや、考へるのは決して穢はしいことではない。何故といつて、たとへ心の中にせよ、人間を惡の同類または汚穢の同類と考へるやうなことは更にないのだから。僕は屢々優しい、純潔な美

しい女のことを考へる。彼等の輝かしい涙や清しげな微笑のことを考へる。また若々しい、貞操の高い母親のことや、愛のためには死をも辭せない戀人のことや、また雪のやうに清い心を持つた、美しい、無邪氣な、鷹揚な、そして凡てに通じて、何物をも恐れない少女のことを考へる。勿論そんな女は居はしないさ。でも、僕の觀察は不公平だから、或ひはさういふ女が居ないとも限らない。が、僕等は一度も出逢つたことがない。或ひは君は見

たことがあるかも知れないが僕はなう。」

かう言つて彼は今ロマシヨーフの前に立つて眞正面に彼の顔を眺めた。が、彼の眼のうつりと空想してゐるやうな表情にも、彼の唇の周圍に漂うてゐる氣まぐれな微笑にも、彼が自分の話相手を心から見てゐるのではないといふことが分つてゐた。ロマシヨーフにはナザンスキイの顔が機嫌のいゝ清醒の時でもこんなに美しく楽しさうに見えたことは今迄のいぢなかつたことだ。彼の高い清らかな額の周圍には黄金色の髪の毛が大きな圓い輪を造つて垂れてゐた。彼の四角な形をした、濃い、赤みが、つた僅かな鬚はちやうど渦巻いてゐるやうにちやんとした波紋を描いてゐた。さうして貴い晝にでも描かれたやうな露

はな顔と大きな美しい頭とは、ロマシヨーフがどこかの銅版畫で見たことのある希臘の  
 英雄か、賢人かの美しい半身像の頭に似てゐた。晴々とした、殆んど濡んでるやうな碧  
 い眼は生々として、伶俐さうに、温順しさうに見開いてゐた。その美しく整つた顔の色ま  
 でがなだらかな、軟らかい薔薇色の調子を帯びてゐた。そしてよほどの經驗のある眼で、  
 もなければ、その表面だけの鮮かさや、いくらか腫れ上つた輪廓などが、酒精のために血  
 の焼けた所爲であるといふことを見分けることは出来ないかも知れない。

「戀！女に對する戀！なんといふ神祕の深淵だらう！なんといふ快樂だらう！そしてなん  
 といふ鋭い、甘い苦痛だらう！」ナザンスキイは突然歡喜に溢れて叫び出した。彼は心が  
 亂れて、自分の髪の毛を両手で掴んで、また室の隅へと歩き始めた。が、隅まで行つて、  
 ふと立止つてロマシヨーフの方を振り向いた。そして愉快さうに大聲で笑つた。少尉は心配  
 になつて來て彼を打見守つてゐた。

「僕はある可笑しな物語を思ひ出したよ」と、ナザンスキイは無邪氣に卒直に話した。  
 「まわどうして僕の考へはかう飛跳ねてるんだらう！……僕は或時リヤザンの「オーカ」と

いふ波止場で汽船を待つてゐたことがある……大方一晝夜程待たせられたね——それはち  
 やうど春の出水の時であつた——僕は勿論御承知の通り食堂に陣取つた。すると食堂の向  
 うに十八ぐらゐの娘が立つてゐたのだ。それが君、痘痕面の頗る醜い女ではあつたが、素  
 的に元氣のいゝ黒眼勝ちの妙な笑ひ方をする女で、つまり可愛らしい女さ。波止場にはそ  
 の女と私と小柄な腿毛の白い電信技手と、三人しか居なかつた。いやその女の父も居た。  
 それが君、まるで老老れた、猛惡な、獵犬のやうに赤い、デク／＼と肥太つた、髪の毛の薄  
 黒い請負師のやうな醜面をしてゐたのだ。だが、その男はまるで舞臺の蔭に居るといつた  
 調子であつた。二分開ばかり物賣臺の方に出て來て腰ばかりしてゐた。そして絶えずチヨ  
 ツキの下の横腹をポリ／＼搔いてゐたが、眼がどうしても開かないので、また寝に行つた。  
 が、電信技手は始終來てゐた。彼は肘を物賣臺に凭せたまゝ、黙つてゐた。彼女も黙つて窓  
 越に出水を眺めてゐた。と、ふいにその苦者が朗讀するやうに歌ひ出した。

戀とはそも何をか言ふらん？  
 何をか戀とや言ふらん？

そは我等の血を湧かす

此世ならぬ感情ぞ。

またひとしきり黙つてしまつた。と、五分ばかり経つてからその女がかう口吟んだ。(戀とはそも何をか言ふらん？何をか戀とや言ふらん？……)と。ところが、それが極めて俗悪な調子なのさ。大方二人ともどこかの小さなオペラか音楽堂で聞いたのか……でなければ態々町へ出掛けて行つて聞いたものらしい。それはまあ、どうでも可いとして、二人は歌つてはまた黙つてしまつた。すると、女は素知らぬ風をして、絶えず窓を眺めながら手を物賣臺に置き忘れてゐる。で、男は女の手を取つて、指を一々弄り廻してゐる。と、また(戀とはそも何をか言ふらん？……)と歌ひ出す。屋外は春と出水と疲勞とに充ち満ちてゐた。彼等はまる一晝夜かうしてゐた。その時はこの「戀愛」が僕にはかなり退屈であつたが、今は君、思ひ出すさへ胸が躍るのだ。彼等は大方僕の來る二週間も前から、僕の去つた一ヶ月も後までこんなふうにして互ひに愛し合つたらうと思ふ。僕はたゞ後になつて始めて感じたのだ。我々の生活よりもずつと限られた、百倍も限られた狭い貧弱な彼

等の生活の中ではあんなことがどんなに幸福で、どんなに光明であらうかと感じたのだ……だが、ちよつと待ち給へ……ロマシヨフ君僕の頭はこんぐらがつてしまつた。何だつて僕は電信技手のことなんか話し出したんだらう？」

ナザンスキイはまた置戸棚の傍へ寄つた。が、彼は酒を飲まずにロマシヨフに背を向けて、右手の指で苦しさに額を擦つて、グツと顛顛を壓へた。して、その神経質な動作のうち、なんだか憐れつばい弱々しいビクついているところがあつた。

『あなたは今女の戀や、戀の深淵や、神秘や、歡樂のことをお話しなさいました』と、ロマシヨフが思ひ出させた。

『うむ、さうだ、戀だ！』と、ナザンスキイは嬉しさうな聲で叫んだ。彼は素早く盃を飲み乾して、燃えるやうな眼付をして戸棚から離れて、慌だしくシャツの袖で唇を拭つた。

『戀！戀の何たるかを誰が知つてゐるだらう？穢はしい隈褻なオペラや、下等な春畫や、野卑な物語や、俗悪極まる詩など、皆な題材を戀に採つて居る。しかもそれを我々將校が作つてゐるのだ。昨日僕の所へデイーフがやつて來たが、恰度君の今坐つてゐるところに坐

つて、金縁の鼻眼鏡を弄りながら女のことを饒舌つたよ。ロマシヨーフ君、假りに動物が——例へば犬でも好い——人間の言葉を理解し得るとして、その一匹が昨日のデイーツの話聴いてゐたとしたら、きつと羞かしさに室から逃げ出したに違ひない。君も知てる通りデイーツは人の善い男だ。いや、ロマシヨーフ君、誰だつて人は皆善人だ。悪い人なんかありやしないさ。だが、あの男は女のこと、いへばあんなことよりほかに言ふのを恥だと思つてゐる。それといふのも彼が破廉恥漢、放蕩者、女蕩しだと云ふ評判を落すことを恐れるからだ。そこに或る人間に共通な虚偽がある。不自然な男性の衝氣がある。また女に對するある傲慢な侮蔑がある。そしてそれらはみんな多數の者にとつては戀、即ち女を占領すること、女を全然自己のものにするこのうちに一種の荒々しい動物的な、たゞ自己の利益にする利己的な或物が潜んでるところから來てゐる。ある隠れた、卑しい我儘な恥づべき何物か、潜んでるところから來てゐる。あゝそれをどう言ひ現はして、いゝのか僕には分らん。それだから多くの人は女を獨占した後冷淡と嫌惡と仇敵の感とを抱くのだ。それだから人々は戀のためには強盜や殺人など、同じやうに夜を揮ふのだ……そこ

で君、自然は人間のために誘惑と係歸とのある潜伏所を拵へたのだ。」

『そりや眞實です』と、ロマシヨーフは靜かに、悲しげに點頭いた。

『いや眞實ぢやない！』とナザンスキイは大聲で叫んだ。『僕は君に言ふが、眞實ぢやないよ。自然が凡ての物と同じやうに巧みに配置されてゐるんだ。デイーツ中尉に取つては戀の後に嫌惡と飽滿とが残り、ダンテに取つては戀が凡て美であり、蠱惑であり、春であるといふところに意味があるのだ！いや、僕が戀の事をたゞの肉の意味で話してゐると思つちやいかんよ。だが、戀は一體選ばれたる人々の占有すべきものだ。さあ、譬へて言ふと、凡ての人は音樂的の耳を持つてゐる。けれども百萬の人の耳は皆鰻の耳か、でなければツシリチエニコ大尉のやうな耳ばかりだ。してその百萬の人の中にたつた一人ベトーグエンのやうな人がゐる。なんでもさうだ、詩でも、藝術でも、學問でも……君に言ふが、戀にもやつぱり百萬人のうちの唯一人にしか許されない頂點があるよ。』

彼は窓の所へ來てロマシヨーフと並んで壁の隅に額を押し着けた。そして春宵の温かい暗闇を物思ひげに眺めながら、深く、心に徹するやうな顫え聲で話した。

「あ、我々は どうして戀の優美な捉へ難い美を評價することができないのだらう。我々は實に粗笨で、懶惰で、深い所が見えないのだ。慰めやうのない、絶望的な戀のうちにとればど様な幸福や、甘い苦痛があるか、君にはとても解るまい。僕がまだ若かつた頃、僕は一の空想を抱いてゐた——それはどうかして自分とは何等の交渉もない、ある犯し難い非凡な女に戀して見たいといふ空想であつた。一生その女を戀して、有りつたけの感情をその女に捧げて見たい。たとひ日雇人足でも、家僕でも、馭者でも、なんでもいゝから、身姿を變へて、うまくその家へ入り込んで、せめて一年に唯の一度でも彼女をよそながら眺めて、階段に印した彼女の足跡に接吻がして見たい——お、なんとといふ無智な幸福だらう！——せめて一生に一度でもいゝから彼女の着物の裾に觸れて見たい、とさういふ空想を持つてゐた。」

「そして氣狂になつて終るのですね？」と、ロマシヨーフはいかにも不興氣に言つた。

「さや、君どうなつたつていゝぢやないか！」と、ナザンスキイは躍起となつて逆ひながら、また烈しく室の中を駆けはじめた。「大方——勿論理由は分らんがね——君はその時はヒ

めて幸福な、お伽噺のやうな生活に入るかも知れん。まあ、いゝさ、君はさうした奇抜な空想的な戀から氣が狂ふし、ドイツ中尉は發作的の痙攣や穢はしい病氣から氣が狂ふのさ。どつちがいゝんだ？しかし君、夜一夜街道の向側の物陰に立ち盡して自分の崇拜めてる女の窓を眺めてるのはどんなに幸福だか考へて見給へ。ふと、窓の内側から明りがさして、カーテンに影がゆらめくと、あれは彼女ではないか知ら？彼女は何かをしてゐるだらう？何を考へてゐるだらう？などと思ふ。またその燈火がポツと消えると、穩かに眠れ、わが喜びよ！眠れ、わが戀人よ！……などと思ふ。かうして一日が終ると——もう占めたものだ！幾日、幾月、幾年と、いろんな工夫や執着の力を盡してゆくに從つて、そこに心を昏ますやうな偉大な歡喜を見るのだ。つまり彼女のハンカチや、菓子子の包み紙や、投げ捨てられた芝居の廣告紙などが君の手に入るやうになるのだ。しかし女の方では君のことはなんにも知らない。君のことは一度だつて聞いたことがない。彼女の眼は君には注がないで傍へ這る。けれども君は女の傍に居て絶えず彼女を崇拜して、彼女のためにはいや彼女のためどころか、彼女の強情のためにも、彼女の夫のためにも、彼女の戀人や愛

犬のためにも、生命と名譽と其他身になんて凡ての物を捧げやうとする。ロマシヨーフ君こんな喜びは到底美男子や女蕩しなんかの知らないところなのだ。』

『あ、全くその通りです。あなたの仰有ることはみんなほんとです！』と、ロマシヨーフは昂奮して叫んだ。彼はもう先刻から窓床を降りてナザンスキイのやうに細長い室の中を歩きながら、絶えずナザンスキイと衝突かつては立停るのであつた。『あなたの考はなんといふえらい考へでせう！私にもさういつたやうなことがありました。私はある一人の：女に戀したことがあります。それは勿論此地では、此地ではありません。まだモスクワに居た頃……私が下士だつた頃です……ですが、女の方ではなんにも知りませんでした。それでも彼女の傍に坐つてゐるといふことが、また彼女が何か仕事をしてゐる時にその糸を握つて、そつと引張つたりするといふことが、私に不思議な満足と興へました。唯それだけのことでしたが、彼女はそれに氣が付かなかつたのです。それでも私は嬉しさのあまり眩暈がしました。』

『あら、あら、僕にもよく解るよ』と、ナザンスキイは愉快さうに、愛嬌よく微笑みなが

ら點頭いて、『僕には君のことがよく解る。それは恰度電流のやうな一種の針線だつたらう。さうなんだらう？何かかう細いやんわりした觸感といつたやうなものだらう？あ、君、人生はなんと美しいぢやないか……！』

ナザンスキイは我ながら自分の思想に感激して黙つてしまつた。彼の碧い眼には涙が一杯溢れて輝いてゐた。ロマシヨーフも矢張りぼんやりした柔い哀傷と、いくらか神經質な感動とに支配された。かうした感情は彼自身にも、またナザンスキイにも同じやうに起つた。

『中尉殿、私はあなたに感服しました。』ロマシヨーフはナザンスキイの兩手を取つて強く握りながら言つた。『あなたは實に才能の秀れた、鋭敏な、そして心の豊かなお方です。だのに……わざと自分を滅すやうなことをなさる。いや、さうぢやありません。私はあなたに下らない道徳なんかを強ひて説くやうなことは致しません……私自身……ですけれどもしあなたが一生のうちにあなたの價値を解し得るやうな、あなたに相應しい女と出遇しませたらどうなさいませう。私は度々そんなことを思ひます……！』



ナザンスキイは立止まつて、久時開け放たれた窓を見詰めてゐた。

『女……』と、彼は思ひ沈んだやうな調子で長く引張つた。『さうだ！ 僕、君に話さう』と彼はふいに決然と叫んだ。『僕は是迄たつた一度不思議な、非凡な女に出遇したことがある。まだその女は處女で……けれどもそれが君、ハイネの歌つたやうに、（彼女は愛に値せしが故に、彼は彼女を愛しぬ。されど彼は愛に値せざりしが故に彼女は彼を愛せざりき）と、さういつた女さ。彼女は僕が酒を飲むので僕を捨てたのだ……だが、しかし僕は彼女が僕を捨てたから、ヤケに飲むやうになつたかも知れない。それはどちらだか分らない。彼女は……彼女もやつぱり此地にゐたのではない……これはずつと以前のことだ。君も知つてる通り、僕は最初三年の現役を終へて、それから豫備に四年居た。それから又三年前に聯隊に入つたのだ。彼女と二人の間にはどんなローマンスもなかつた。みなで十五回遇つたきり、そのうち親密な話しを交したのは、ほんの五六回しかなかつた。だが、しかし君は避けることのできない、必然的な過去の魅力といふことに就いて考へたことがあるだらう？ その通り、あんなたわいもない詰らんことのない僕に僕の富があるのだ。僕は今でも

彼女を愛してゐる。ちよつと待ち給へ……君になら聞かすだけの價值がある。僕は君に彼女が僕に送つた最初の手紙で同時に最後の手紙である、たつた一通の手紙を讀んで聞かせよう。』

彼は提鞞の前へ蹲んでその中の書物の束をゆつくり引きめぐりながら話を續けた。

『さう、彼女は今迄一度だつて自己以外の者を愛したことはなかつた。彼女には底知れぬ虚榮と意地悪い傲慢なところがあつた。同時に彼女はまた人の善い、女らしいたさらなく可愛い、女であつた。恰も彼女のうちには二つの人格があつた。一方は味も素氣もない利己的な理智を持ち、一方は優しい熱烈な情を持つてゐた。さア、これを讀んで見給へ。ロマシヨフ君、初めの方は餘計なことなんだ』と、ナザンスキイは初めの數行を飛ばして『ほら、此處からだ。讀んで見給へ。』

ふと、ロマシヨフは何物にか傍から頭をドシンと打たれたやうな氣がして、室中が彼の眼の前でぐら／＼揺ぎ出したやうな心地がした。その手紙はシユーロチカに特有な、粗い神経質な細い手蹟で書かれてあつた。かの女の手蹟にはすぐそれと分る程な持前の癖が

あつて、亂雑なくせに綺麗だつた。ロマシヨーフは彼女から屢々午餐やカルタ會やの招待状を受取つたことがあるので、この手蹟だけはどんなに數多い手紙のなかからでもすぐ見別れることができた。

「……かかることを申し上げるは實に堪へ難く、心苦しきは候へど」と、彼はナザンスキイの手の蔭から手紙を読み出した。「私共の友誼をかかふる悲しき破目に至らせ候は皆なおん身の罪と存じ参らせ候。妾は常々臆病と意志の薄弱より來る虚偽とを此世の何物よりも羞かしと思ひ居候まゝ、決して嘘などは申さず候。妾は是迄もおん身を愛し参らせ候ひしが、今もなほ愛し居候。この愛の羈絆を譯もなく手軽く脱するとは到底出來難きことに候。さりながら妾は何卒してこの感情に遂には打勝ち申すべく候。妾にとりてその他に詮方も無之と存じ参らせ候。勿論妾にも、世の意氣地なく、零落れて、道德的に腐敗せる人の保護者や、附添ひや、看護婦となり得る力と犠牲の心とは有之候へど、併し時と場所とを辨へざる卑怯な寛大と憐憫の情とは妾の深く惡むところに候。さればおん身が妾にかかる考へを起さしめ給ふことを妾は好み申さず候。またおん身が同情や犬の如き忠實の犠牲とならんことも妾の好まざるところに候。さりながらおん身はおん身の智と美しき心とを御持ちなされ候にも拘らず到底別人と生れ變ることは出來まじくと存じ参らせ候。まこと其通りには候はずや、何卒眞實に、正直に御仰せ下され度候。あゝもしおん身が此際心を改めて別人とお成りなされ候へば！もしもしか候へば！妾は凡ての情と、凡ての望みを傾けておん身を愛し参らすべく候に。併しおん身は御自身妾を熱望なされしことは無之候。戀人のためには全世界を覆へすといふことも有之候はずや。而も妾の願ひはほんの僅かなことに外ならず候。如何に候や、おん身は到底別人に生れ變ることは出來まじく候や？

今はこれにて御免蒙り候。心のうちに於ておん身のお願を、死者を接吻する如くに接吻致し参らせ候。何故ならばおん身は妾に取りては最早死せし人と同様に候へば。この手紙は御一讀の後直ちにお焼捨て被下度候。それは妾が何者かを恐れるためにては決して無之、唯これがありては時経るにつれてこの手紙がおん身のために悲哀と苦しき想ひ出の種子と相成るべく候へば、それが氣懸りにて候。今一度繰返して申し参らせ候が……」

「これから後は君には興味のないことだ」と、ナザンスキイはロマシヨーフの手から手紙

を取上げて言った。「これが彼女の僕に寄せた唯一の手紙なのだ。」

「それからどうなつたのです？」と言ひにくさうにロマシヨーフは訊いた。

「それから？それからはもう二人は遇はなかつた。彼女は……彼女はどこへ行つてしまつた。大方ある……技士のところへでも縁づいたらしい。けれどもこんなことは大したことぢやない。」

「そしてあなたはそれから一度もシユーロチカのとこへはお出なさらなかつたのですか？」

ロマシヨーフはこの言葉を殆ど呟くくらゐに言つたのだが、二人の將校はこの言葉のためにふる／＼と戦慄えて暫くの間は互ひに傍眼も振らず見交してゐた。この數秒のうち二人の間には人間の狡猾と虚偽と不透明とのあらゆる障壁が取り除けられたやうであつた。そして二人は自由にお互の心を読むことができた。これまでお互に隠し合つてゐたことが何もかも一時に解けて、彼等の今日の話が忽ちある特殊な、深い、殆ど悲劇的な意味を帯びてきた。

「どうした？君もやつぱりさうなのか？」と、ナザンスキイはとう／＼雙の眼に無智な恐

怖の色を浮べて静かにかう言つた。が、彼は直ぐ氣が付いて長く引張るやうな笑聲を出してから叫んだ。

「ふふう、何といふ誤解だらう！僕等は話題からすつかり逸れてしまつた。君に見せた今の手紙は百年も昔に書かれたものだ。その女は今はどうぞか遠方の——大方裏カウカサスにでも暮してゐるだらう……だが、僕等はなんでまた話しを止めたのだ？」

「私はもう家に歸る時刻です、中尉殿。大層遅くなりました」と、ロマシヨーフは起ち上りながら言つた。

ナザンスキイは彼を留めようとしなかつた。彼等は別れる時は別段冷淡でも不愛想でもなかつた。互に差むるやうな顔をしてゐた。ロマシヨーフには今はあの手紙がシユーロチカの書いたものだといふことが一層判然と信じられた。家へ歸る途すがら彼は頻りにその手紙のことを考へ續けた。が、自分ながらその手紙が彼にどんな感じを惹起させたのか分らなかつた。そこにはナザンスキイに對する嫉妬の恨みがあつた。過去に對する嫉妬があつた。そしてニコラーエフに對する勝利者の意地悪い同情もあつた。が、同時にまた茫々と

した不確かな、けれども甘い、心を誘ふやうな、ある新らしい希望をも感じた。恰もその手紙がブーツと未来まで伸びて行つてを、ある神秘的な眼に見えぬ線を彼の手の中に握りしたかのやうであつた。

風は静まつた。

夜は深い静寂に充ちてゐた。その暗黒はピロイドのやうに暖かに感じられた。その醒めた空や、眼に見えぬ樹々の静けさや、土の香りのうちには造化の神秘的な生命が感じられた。ロマンヨーフは道も見ずに歩いた。そして彼には絶えず強い、權威のある、愛想のいゝ何者か、彼の顔へ熱い息を吹掛けてゐるやうに思はれた。そして彼の心の中には過ぎ去つた少年時代の、非常に輝かしい、二度と再び歸らない春に對する嫉ましい悲哀が湧いた。自分の清い、懐かしい過去に對する静かな優しい羨ましさを感じた……

家へ歸ると彼はベテルン夫人からの二度めの手紙が届いてるのを見た。彼女は拙手なおつに調子をとつた文體で、狡猾な欺きだの、自分にはなにもかも解つてゐるといふことだの、破れた女の爲し得る復讐の恐ろしいことだのを書き並べてあつた。

（妾は今や如何に爲すべきかを承知致し居り候！）と、嚇すやうな書き振である。（若しも妾が御身の淺ましき行爲のために肺病になりて死せざる限りは、妾は必ず御身に苛酷な復讐を致すべく候へば、左様御承知下され度候。或ひは御身は何人も御身が毎夜何處にあるかを知らぬものとお思ひなされ候はんも、あはれ盲目者よ！壁にも耳あるの譬へ有之候。妾は御身の一步步をも明かに存じ居り候。さりながらどの道御身の風采と雄辯とを以つてしても彼處にてはH様より犬の如く戶外に突き出されるより外何も得るところはあるまじくと存じ候。して御身は妾をもよく御注意遊ばされてしかるべくと御忠告申置き候。妾は己が受けたる恥辱を無下に赦すが如き女には無之候。

妾は匕首の術を能くす、

妾はカウカサスの傍りに生れたれば、

嘗てはおん身のもの

今は何人のものにもあらぬ

ライサより。

二伸

この土曜日には必ず集會所へお出で下され度候。私共は是非を明かにする必要有之候へば。妾はあなたのために第三のカード（舞踏の名）を残し置くべく候。しかし此度は最早なんの意味も無之候。

エ、ル、ベ、ー

この拙ない無意味な手紙は、愚かさ、田舎の泥沼と、意地悪い譏諷とでロマシヨーフの心を取捲いた。そして彼は自分ながら愛しない女と殆ど半年も關係したといふ重い、拭ふことのできない汚辱に頭から足の先まで穢されたやうな氣がした。彼はぐにやりとして恰も今日の一日で壓潰されたやうになつて、寢床の上に横になつた。さうして間もなく、と〜微睡みながら、今夜ナザンスキイから聞いた言葉に托して自分のことを考へた。

（彼の思想は兵卒の服のやうに灰色であつた。）

彼はぢきに熟睡に落ちた。さうして近頃になつて煩悶の後にいつもある様に自分が子供になつた夢を見た。汚れも、退屈も、生活の單調もなかつた。身體のうちには鬱勃たる元

氣が感じられた。心は晴々と純潔で、そして無意識の喜びに戯れた。全世界が明るく、清らかで、その真中にいとしい見慣れたモスクワの町が、夢でなければ見られないやうな美しい光りに輝いてゐた。この喜びに溢れた世界のどこか一端に、遙か地平線の上に、薄黒い無氣味な斑点があつて、そこには灰色じみた懶い町が隠れてゐた。その町には辛い退屈な勤務や、中隊教室や、集會所の酒宴や、苦しさや、厭な戀の關係や、煩悶や、孤獨なものがあつた。そこでは全生涯が調子高く響いて歡喜に輝いてはゐたが、薄黒い憎さげな斑点が恰も黒い幻影のやうに秘かにロマシヨーフを打見守つて自分の番を待つてゐた。そして清い、心配のない、無邪氣な、「幼いロマシヨーフ」は、この意地悪い暗黒のうちに解くるが如く遠ざかつて行く「年取つたロマシヨーフ」を思つていたく泣いた。

夜中に彼は眼を覺すと枕が涙にしつとりと濡れてゐるのを見た。彼は容易に涙を止めることができなかった。で、久しいこと温かい濕つばい急な流が彼の頬を傳つて走つた。

六 謹 慎 中

榮達を願ふ少数のものを除いて、總ての將校等は各自の職務を無理強ひな、不愉快な、忌々しい役でもしてゐるやうに、いかにも疲れ切つたやうに厭々ながら勤めてゐた。下級將校等はまるで小學校生徒のやうに毎日の教練にも遅刻した。そしてもし大丈夫罰せられな  
いと思つたら彼等はその教練の場からさうつと逃げ出すことさへあつた。中隊長は大抵家族が多くて、家庭のいびこぎや、妻のローマンスに始終没頭して、酷い貧窮と収入以上の生活とに壓迫されて、法外な支出と借金に首も廻らないほどに苦んでゐる。彼等は一方で金を借りては他の借財を埋め合せるといふやうに借財に借財を重ねてゐた。彼等の多くは重に妻に強請まれて、中隊の金や隨意作業のために兵卒に支給する給金を借りる。あるものは規則上彼等が開封することになつてゐる兵卒の爲替入の手紙を數ヶ月も數ヶ年も留めおくことがある。中にはカルタや賭奕ばかりを商賣にして暮してゐるものもある。誰かカルタを胡魔化することがあつて、みんなそれを知つてゐても見て見ない振をした。それに、

彼等は揃つてひどい酒飲みで、集會とか、互ひにお客に召れたとかいふ時には殆んど度を知らなかつた。またあるもの、例へばスリーワ大尉の如き、獨酌でチビリチビリとやる組もあつた。

かうした體態なので、將校等には眞面目に職務にたづさはる暇がなかつた。平常は曹長が中隊内部の機關を全部働かしたり、整理したりした。それに中隊のさきもりは一切この曹長がやつてゐるので、その老練な筋張つた掌の中には中隊長を隱約の裡に確乎と壓へ付けてゐた。中隊長等も部下將校等と同じく厭々ながら出勤した。そして、自分の威嚴を保つために、然し又時偶には我儘な強情から見習士官達を引摺り廻してゐた。

大隊長となると、殊に冬などは殆ど何もしなかつた。陸軍には大隊長と旅團長といふ二つの中間の職があつてこの二つの上官は何時も曖昧な暢氣な位地にゐるのだ。それでも夏になると彼等も大隊教練を行つて、聯隊や師團の演習に参加して、機動演習の難關を通り抜けねばならぬのだ。が、暇な時になると彼等は將校集會所に坐り込んで、熱心に雜誌「燈兵」を讀んだり、昇級のことを言ひ合つたり、骨牌を弄んだりする。それからよく

下級將校等におどらせたり、自分の家で夜會を催しては數ある娘等を嫁にやらうと努めたりした。

しかし閱兵式の前になると、下士卒から上長官に至るまでみな氣が張つて、互に相引き相引かれてゐた。その時になると休息どころではない。教練の餘暇でも無暗矢鱈に精力を緊張して今迄怠惰けたのを償ふのであつた。で、兵卒の力も計らずに、彼等を疲勞の極度に至らしめた。中隊長は下級將校等をひどく打つたり敲いたりするし、下級將校等は無理に口汚く罵り合ふし、下士等は罵言のために聲を枯らしながら掴み合つたりした。だが、掴み合ふのは雷に下士ばかりではなかつた。

こんな日は特に辛かつた。で、聯隊長を初め髪を振り亂した泥塗れの從卒に至るまで聯隊中が、たまに來る日曜の休みや、睡眠の暇を天國の福樂のやうに思つた。

この春は聯隊では夢中になつて五月の閱兵式の準備をしてゐた。その閱兵式には鬼將軍と言はれる軍團長が臨むといふことが確かに知れた。將軍はかのカルロス黨の戦争や、また彼が自ら進んで義勇兵として參加した一千八百七十年の普佛戦争に關する戦記で世界の

戦争文學に有名な人である。ヌウオーロフ將軍流の簡潔な調子で書かれた彼の命令書はなほ一層有名なもので、彼は落度のある部下をその命令書中に彼獨特のキビクした、用捨のない諷刺で書きつけたから、將校等はそれをどの懲罰よりも怖しがつてゐた。で、各中隊では二週間も忙しない、目の廻るやうな作業が續いた。疲れきつた將校等や、曳張り廻されて馬鹿になつた兵卒等は一樣に日曜日を堪らなく待ち焦れてゐた。

が、ロマシヨーフは謹慎を仰せ付つてゐた御蔭でこの甘い休息の快味を全く知らずに過ぎた。彼はやたらに早く眼が覺めて、どんなに努めてもそれから眠れなかつた。彼はぐづぐづ着物を着て、厭々ながら茶を飲んで、やがて何の用か荒々しくガイナーンを呼び付けた。ガイナーンはいつもの通り若い小犬のやうに嬉しさに喉いでそつつかしかつた。

ロマシヨーフは灰色の、襟の開いた下衣を着て狭い室の中を廻り歩きながら寢臺の脚に足を突掛けたり、よろ／＼した塵だらけな棚に肘を打突けたりした。一年半ぶりで始めて——それも不幸な偶然の事情で——彼は全く一人つきりになつてしまつた。以前には勤務や、日直や、夜會や、カルタや、ペテルソン夫人との情交や、ニコラーエフ中尉の夜會な

どに妨げられてゐた。時として何もすることのない暇な時間でもあるとロマシヨーフは無爲と怠屈とに疲れて、恰も自分自身を恐れるかの如く、倶楽部や、知人の家や、或は的もなく街道へ慌だしく飛びだして、獨身者の朋友の誰かに出遇しては、いつも飲酒に終つた。が、今は孤獨の一日を前に控へてゐるといふことを思つて退屈に感じた。同時に彼の頭にはそれからそれとある變な碌でもないくだらぬ考へが浮んだ。

町では遅い祈禱の鐘が鳴つた。まだ取外されない外側の窓を通して、春らしい、心をそそるやうな、うら悲しい福音の鐘が音から音を生み出すやうに顫へながら響いてロマシヨーフの耳まで達した。窓の外にはすぐ庭園が続いて、そこには野櫻が夥しく生えてゐた。その花が一面に雪のやうな羊の群か、白い衣物を着た處女の群のやうに白く、つぶらにちぢれて咲いてゐる。その間々には此處彼處に白楊樹が祈るやうに梢を天に向けてすつくと聳えてゐる。そして栗の老木が勢のいゝ圓蓋のやうな梢を廣く擴げてゐる。他の樹木はまだ落葉のまゝで、裸かの枝が寂しく黒ずんでゐる。が、流石にもうやんぱりとした嬉しうな若芽がやつと見分けのつくくらゐに黄ばんでゐる。明るく、輝かしい、露けき朝であつた。

窓の右手には、門を隔て、汚いどす黒い通りの一部と、向側の誰人かの塚が見えた。その塚の傍を人々が氣を付けながら乾いたところを撰つてゆつくり歩いてゐた。(彼等にはまだ眼の前に一日があるのだ)と、ロマシヨーフは羨ましさうに彼等を見守りながら思つた。(だからあんなに急がないのだ。あゝ自由な一日よ！)

彼は急にたまたまなくなつて、無性に、殆んど泣くばかりに、直様衣物を着て室から飛びだしたくなつた。勿論彼の心を誘つたものはいつもの集會所ではない。彼は唯譯もなく街道や大氣の中へ出たくなつたのである。彼は恰も今迄この自由の價値を知らなかつたかのやうであつた。自分の行きたい處へ行き、勝手な辻を曲つたり、廣場へ出たり、教會へ寄つたりして、結果などを考へもせず、怖れもせず、どしどししたいことをして行くことのできる單純な自由のうちに、如何に多くの幸福が含まれてゐるかといふことを思つて、彼



は今始めて自分ながら驚いたのである。彼にはこの自由が忽ちある偉大なる心の歡樂だと思はれた。

それと同時に彼はまだ士官學校に入らない前、小児の時分に、母が彼を罰するため細い糸で足を寢臺に結び付けておいて、自分はその儘外へ出てしまつたことを思ひ出した。幼いロマシヨーフはさうして幾時間でも温順しく坐つてゐた。彼は逃げようと思へば二階の窓から雨樋を傳つて下りることができたにも拘らず一日中温順しくして一秒時も逃げようなどとは思はなかつた。その癖彼は度々窓から滑り降りては軍樂隊を聞いたり葬式を見たりしにモスクワの郊外へ出掛けて、その都度年上の友達のために大膽にもおつかさんの所から砂糖や、お菓子や、巻煙草などを偷んだものである。それなのにこの糸、この小さな糸は彼の心に不可思議な催眠的作用を持つてゐた。剩へ彼はその糸がどうかして切れないかと思つて、少しでも強く曳張るのを怖れた。それはしかし刑罰の怖れではなかつた。といつて勿論羞恥でもなければ懺悔でもない。それは強い力のある、とても及び難い成人の働きに對する迷信的の恐怖か、または野蠻人が妖婆の魔術に戦さ恐れるやうな一種の催眠術であつた。

(今俺は足を縛られた小學生か、小児のやうに坐つてゐる)と、ロマシヨーフは室の中を歩き廻りながら考へた。(戸は開いてゐる。俺は行きたいところへ行つて話したり、笑つたり、なんでもしたいと思ふことをしたい)が、俺は糸で縛られて坐つてゐる。この「我」が坐つてゐる。「我」でなくて誰だ。だけど「我」が坐つてゐなければならぬといふことを決めたのは彼ではないか。いや「我」はそれに同意しなかつた。)

(我だ!)と、ロマシヨーフは室の真中に足をだらしなく不揃ひにして立停つて俯向きながら深く思ひに沈んだ。(我だ!我だ!我だ!)と、彼は今始めてこの簡短な言葉を了解したかのやうに吃驚して、ふいに大聲で叫んだ。(こゝに立つて下を向いて板の間の黒い裂目を見詰めてゐる者は誰だ?これは「我」だ。あゝ、何と不思議だらう!...我——え)と、彼はゆつたり引延すやうに言つて、我と我心をこの響きのうちに没した。

彼はぼんやりキマリ悪さうに笑つたが、直ぐに顔を曇めた。そして餘りに思想を緊張したために蒼くなつた。この五六年この方彼にはこんなことが度々あつた。心の成熟期に入

つた若い人々にはよくあることだ。彼がもう疾くから機械的に呑み込んでゐる單純な眞理や、俚諺や、名高い格言——それらが、ふいにある突然の内の光輝のために深い哲學的意義を帯びてきた。その時彼はそれらの言葉を始めて聴くやうな氣がして、殆ど彼自ら發見したやうに思つた。彼はかうした感じを始めて経験した時のことを記憶してゐる。それは、士官學校で、舊約聖書の授業中のことであつた。司祭が石を運んでゐる勞働者の譬喩を説明したことがある。一人は始め小さいのを運んで、重たい石に取掛つたが最後の石を運ぶことが出来なかつた。いま一人はその反對にやつたので、仕事を無事にして退けたといふ話であつた。ロマシヨーフは讀書のできる頃からこの無邪氣な譬喩を知つてゐたので、聞くとすぐにその中に含まれてゐる處世訓の深い意味が、バツと彼の心に開いたやうな氣がした。やがてまた(七度測つて一度切れ)といふ度々聞いたことのある諺を聴いた時もさうであつた。ある幸福な、心の充實した瞬間に彼はこの諺のうちに叡智と、先見の明と、細心の用意と、周到な注意との訓へられてゐることが解つた。この數語のうちには大なる實生活上の經驗が含まれてゐた。それと同じやうに今も彼は自分の個性に對する思ひ掛な

判然とした意識に突然驚されて、グラ〜と顔を上つた……

(一番の中心は我である)と、ロマシヨーフは考へた。(あとのものは全然没交渉だ。「我」ではない。この室も、街道も、樹木も、空も、聯隊長も、アンドルセーウイチ中尉も、勤務も、軍旗も、兵卒も、みな「我」ではない。さうとも、決して「我」ではない。この手も、足も)と、ロマシヨーフは自分の手をまるで始めて見たかのやうに顔へ近づけて吃驚したやうに眺めながら、「いや、これはみな「我」ではない。それからして俺が自分の手を燃る……さうだ、この通りに……これが「我」である。俺は手を見てゐる。それを上へ舉げる——これが「我」だ。今考へてゐるもの——それも「我」である。そしてもし俺が出掛けたと思ふなら、それも「我」だ。ほら今俺が立停つた——これが「我」である。

(あゝ、なんといふ變なことだらう、なんといふ單純なことだらう、なんといふ驚くべきことだらう。大方誰にもこの「我」があるかも知れぬ。或は誰にも無いかも知れぬ。或は俺のほかには誰にもないかも知れぬ。だが、もし有るとすると、どうなる？ 假りに俺の前に百人の兵卒が立つてるとして、俺が彼等に向つて、「右へ、準へ！」と、號令すると、銘々

自分の「自我」を持つてゐて俺を自分達とまるで關係のないものと見てゐる百人の人間が  
みな同時に頭を右に向ける。が、俺は彼等を銘々區別してはゐない。彼等は團體だ。その  
通りにシユリゴウイチ大佐にとつては大方俺も、ウエーツキンも、ルポーも、すべて  
の中尉も、大尉も、やつぱり一つの顔に溶け合つて、我々は彼より見ればあかの他人で、  
彼は我々を銘々區別してはゐないのだらう。」

戸がガチャリと鳴つて、ガイナーンが飛び込んできた。まるでダンスでもするやうに足  
を踏み交したり、肩をすぼめたりしながら彼は叫んだ。

「少尉殿！ 給仕はもう煙草をくれまへん。スクリヤビン中尉が決してやつてはならぬえと  
言はれましたやうでがす。」

「え！ 畜生！」と、ロマシヨーフの聲は迸つた。「まア歸つていゝ、歸つていゝ……だが、  
どうしたら俺は煙草なしでゐられやう？……まアどうでもいゝや、ガイナーン！ 歸つて  
いゝ。」

（今何を俺は考へてゐたのだつけ？）と、ロマシヨーフは一人になつてから我と我心に訊

ねた。彼は思想の連絡を失くしてしまつたのだ。彼は元來順序を逐つてものを考へる習慣  
がないのですぐにはその連絡を探し當てる事が出来なかつた。（今、俺は何を考へてゐた  
つけ？ 何かある重大な肝要なことについてだつたが……待てよ、後へ戻らにやならんぞ……  
えーと……俺は閉門されてゐる……人々が街道を通つてゐる……小兒の時分、おつかさ  
んが縛り付けた……「我」を縛り付けた……さうだ、さうだ……兵卒にもやはり「我」がある。  
シユリゴウイチ大佐……やつと思ひ出したぞ……さあ今度はそれから先だ……

（俺は室の中に坐つてゐる。戸は閉つてゐない。出たいには出たいのだが敢て出ようとも  
しない。なぜ出ようとしぬのか？ 俺はどんな罪を犯したのか？ 泥棒？ 殺人？ そんなこと  
ぢやない。たゞ俺は俺と没交渉なあかの他人と話した時膝をピツタリ合せずに、何か言つ  
たわけのことだ。それとも俺は膝を合せなければならなかつたのかしら？ なぜだらう？ こ  
んなことが重大なことなのかしら？ こんなことが人生に於て大事なことかしら？ もう二三  
十年も経てば、俺の後にも、前にも續いてゐる時劫の一刹那が来る。ほんの唯一刹那だ！  
その時になれば「我」は恰度心を引込めた燈火のやうに消えてしまふのだ。が、燈火は二度

も三度も助け直すことができる。が「我」はもうなくなつたきりだ。さうしてこの室も、空も、聯隊も、すべての軍隊も、星も、地球も、俺の手も、足も、なくなつてしまふのだ……如何となれば「我」がなくなるからだ……

「さうさう……全くその通りだ……まあ、い……待てよ……ゆつくり考へなければならん……さてそれから「我」が無くなつてしまふ……と眞暗闇になる。何者か俺の生活に火を點じて、すぐにまたそれを消したので、また永久に限りなく暗闇になる……俺はこの短い瞬間に何をしたらう？ 両手をキチンと脇に垂れたり、踵をくつ着けたり、歩調行進の時に爪先を下に向けたたり、咽喉一ぱいの聲を張揚げて、「擔へ、銃！」と喚鳴つたり、銃の操縦が悪いために怒つたり、罵つたり、それから數百人の人々の前でびく／＼慄へたり……そんなことしかしなかつた。一體それはなんのためだ？ 俺の自我と一緒に亡びてしまふこれらの幻影が、俺に何の要もない可厭なことをさせて、そのために「我」を侮辱し、卑屈にしてしまつた。この「我」をいなぜ、俺の自我はこんな幻影なんかに服従したのだらう？」

ロマシヨーフは机の傍に坐つて慄ながら両手で頭を壓へた。彼は自身にとつて、この稀しい、自由な思想を壓へるのが容易でなかつた。

「うむ……だがきさまは忘れたのか？ 祖國を？ 搖籃を？ 祖先の靈を？ 祭壇を？……軍隊の名譽と規律を？ 忘れたのか？ もし外敵が侵入して來たら誰がきさまの祖國を防禦するのだ？……さうだ。だがしかし俺が死んでしまへば、もう祖國も、敵も、名譽も無くなる譯だ。俺の意識のある間だけしか存在しないのだ。だが祖國や、名譽や、軍服や、その他のすべての偉大なる言葉が消えても、俺の自我は依然として侵されない。さうして見ると兎に角俺の自我は義務や、名譽や、愛や、それらのあらゆる觀念よりももつと重大なものではないか？ かうして俺は服務してゐる……が、突然俺の自我が「いやだ」と言ひ出したら、否、俺の自我ぢやない。もつと多くの陸軍を組織してゐる數百萬の「我」が、否、もつと多く、地球に住んでゐるすべての「我」が突然「いやだ！」と言ひ出したら、さまざま戦争などは思も寄らないものとなつてしまふ。さうしたら「列を併せ！」だの「半ば右向け右！」だのといふことはもう永久に絶えて了ふだらう——如何となればそんな必要が

なくなるから。さう、さう、そりやほんとだ、ほんとだ！」と、ロマシヨーフは心の中で一種の勝誇るやうな聲を放つた。(あらゆる武勇も、軍紀も、敬禮も、軍服も、兵學も、これらはみんな人類が「可厭だ！」とは思ひながら、それを憚つて言ひ得ないところから築かれてゐるのだ。

(巧みに組立てられたこれらの軍事上の建設物は一體何だらう？ 虚無だ、厩氣樓だ、空中樓閣だ。「厭だ！」といふ短い言葉そのものではなく、たゞ今迄人がなぜだかこの言葉を口に出さなかつたといふことで漸く存在を繋いでゐる建物に過ぎない。俺の自我は食つたり呼吸をしたり、物を見たりするのを厭だとは言はないが、しかし彼に向つて死ねと言つたら、屹度厭だ！と言ふに違ひない。すれば死を免れることの出来ない戦争や、人を殺す最も宜い方法を研究してゐる戦術などは一體何と言つていゝだらう？ 世界的過失か？ それとも心の眩惑か)

(否、ちよつと待てよ……ひよつとしたら、この俺が間違つてゐるかも知れんぞ。俺だつて間違はないとは限らない。なぜつて、この「厭だ！」といふことは誰の頭にも屹度

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

浮ぶやうな單純な、自然なことだから。まわい、や、一つ考へて見よう。假りに明日か今日かこの思想がロシア人にも、ドイツ人にも、イギリス人にも、日本人にも……凡ての人の頭に浮んだとしたら……そしたらもう戦争はばつたりなくなる。同時に將校も兵卒もなくなつてみな家に歸つてしまふ。さうしたらどうなるだらう？ さうだ。どうなるだらう？ 思ふにシユリゴウイチ大佐はこの問にきつとかう答へるに違ひない——さうなれば、きつと敵が我々のところを、ふいに襲つて来て土地や家を奪ひ、田畑を荒し、我々の妻や姉妹を掠奪するだらうと。だが、それは謀反者のことか？ 社會黨のことか？ 革命黨のことか？……否々そりや嘘だ。既に人類全體が血を流すことは厭だと言つてゐるではないか。それなのに誰が武器と強迫とを以て襲つて來るのだ？……誰も來はせん。ではどうなるだらう？ さうなれば、或はみんな和睦するか、お互に譲り合ふか、助け合ふか、赦し合ふか？ あゝどうなるだらう？)

ロマシヨーフはこんな考へに没頭してゐたので、ガイナーンがそつと後ろから近づいて來てだしぬけに肩の上から手を出すまで知らなかつた。で、ロマシヨーフは不意打を喰つて

慄え上つて、驚きの餘り小聲で叫んだ。

「何用だ、畜生！……」

ガイナーンは机の上へ肉桂色の紙包を置いた。

「少尉殿に！」と彼は親しげに、愛嬌よく言つた。ロマシヨーフは彼が自分の背後で親しげに笑つてゐるのを感じた。「少尉殿に巻煙草を持って参りました。鶏でがす。」

ロマシヨーフは紙包を見た。それには「鳩」二十本入、定價三哥と書いてあつた。

「こりや一體なんだ？ どうしたのだ？」と彼は吃驚したやうに訊いた。「ささまはこれをどこから持つて来たのだ？」

「少尉殿が煙草に困つてゐましたから私は自分のお錢で買つて来ました。鳥でがす。さア何卒、鳥でがす。何でもありません。少尉殿に上げます。」

ガイナーンは羞んで大急ぎで室から駆け出しながら大きな音を立て、戸をビシャンと閉めた。少尉は巻煙草を喫ひ始めた。室中封蠟と焼けた羽根の臭ひがした。

「いや、可愛い、奴だ！」と、ロマシヨーフは感じ入つて考へた。（俺は彼奴を怒つたり、

嘔鳴つたり、それから毎晩彼奴に靴ばかりぢやない、靴下やズボンまでも脱せてゐる。だのに彼奴は俺に自分の僅かなはした金の中から煙草を買つてきて、「鶏」でがす、さアどうぢよ！」と言つて勧めた。なぜ彼奴はこんなことをするのだらう？）

彼はまた立上つて手を脊中に組んで室の中を歩き始めた。

「まああんな奴が我々の中隊に百人もゐるが、彼奴等は銘々に思想もあり、感情もあり、特殊な性格もあり、實生活の経験もあり、また個人的好悪もある。彼奴等のことについて俺は何か知つてゐることがあるだらうか？ 彼奴等の外貌の外は何も知らない。右翼の方から始めて、ソルツイス、リヤボシヤブカ、ウエデネーフ、フェゴーフ、ヤシチーシ………みんな一様な灰色の顔をしてゐる。俺は彼奴等の心に自分の心を觸れ、彼奴等の自我に自分の自我を接觸させるために何をしたらだらう？ 何もしない。」

ロマシヨーフはふとあるどんよりと曇つた晩秋の夕を思ひ出した。數名の將校と一緒にロマシヨーフは集會所に坐つて、ウオーツカを飲んでゐた。そこへ第九中隊の曹長グメニエークが駆け込んできて、喘ぎ喘ぎ自分の中隊長に向つて叫んだ。

「中隊長殿、新兵共を驅り集めて來ました！……」

實際驅り集めて來たのである。彼等は聯隊の庭に恰も怪々したおとなしい獸の群の様に一塊になつて雨の降る中に立竦みながら、訝しさに、上眼使ひにキョト／＼してゐたが、彼等はみな銘々異つた顔付をしてゐた。或は衣物が異つてゐたからさう思はれたのかも知れない。(この男はきつと錠前屋だつたらう)と、ロマシヨーフはその時彼等の傍を通りながら顔を眺め眺め思つた。(此奴は大方陽氣者で、手風琴の名人に違ひない。此奴は讀書きのできる敏捷いすれつからしで流暢な早言でべら／＼饒舌る男だらう。前身はどこか料理屋の掃除番であつたかも知れぬ?)など、考へた。

實際彼等は驅り集められて來たやうに見えた。そして五六日前に老婆や子供等が泣き喚いて彼等を見送つたことや、彼等自身が送別の酒宴に泣きの涙を壓へて氣を張つてゐたことなどがそのあたり想像された……がそれからもう一年経つてしまつた。今はもう彼等はあんな長い死んだやうな隊列を造つてゐる。個性をなくされた、灰色の木偶のやうな兵卒よ！彼等は實際入營を厭がつた。彼等の自我がそれを厭がつたのだ。あゝ一體この恐

しい行違ひの原因はどこにあるのだらう？この難題の元は何處にあるのだらう？それともこれはあの有名な鶏の實驗と同じやうなことだらうか？鶏の頭を机の上に押へ付けるとしきりにばた／＼悶搔く。それにも構はずその鼻先から机の上へずつと白墨で線を引き、奴さん縛り付けられたのだと思つて、しやがんでしまつてゐる不思議な恐怖に襲れたやうに身動きもせず眼を閉ぢていつまでもち／＼と坐つてゐる。

ロマシヨーフは寢臺まで行つて其上に、ごゝつと寝ころんだ。

(斯んな場合に俺はどうしたらいいのだらう?)と、彼はいま／＼しさに我と我心に問うた。(ほんとにどうしたらいいのだらう?退職か?だが、きさまは何を知つてる?何が出來る?最初は塾、それから幼年學校、士官學校、幽閉せられた學校生活……きさまは實生活の奮闘や困難やを知つてるのか?いや、きさまはちやうど女學生のやうにフランス麵麩は木に生るものだからに思つて、何不足なく暮してきたではないか。退職でもしてみろ、それこそ人々に苛められたり、酒を飲んだりして、獨立生活の第一歩から墮落してしまふだらう。一體きさまの知つてる將校のうちで誰が自ら好んで退職したものがある?誰もわ

るまい。誰もかもみな自分の將校の職に嘯り付いてゐる。それといふも畢竟彼等はその以外に何の役にも立たないからだ。何も知つてないからだ、もし退職でもしたら、あゝは汚い毛帽子を冠つて、(エイエ、ラ、ボンテ(何卒御願ひです)と云ふ程の意味)……正直なロシアの將校です……コムブレネ、ヴー(お分りになるてせ)……)なんかと言つて彷彿くより外はないのだ。

あ、俺はどうしたらいいだらう？俺はどうしたらいいだらう……」

「四人さん、四人さん！」と、窓の下で明瞭な女の聲がした。

ロマシヨーフは寢臺から飛び起きて窓へ走せ寄つた。戸外にシユーロチカが立つてゐた。彼女は眼の上に掌を翳して日光を避けながら、こゝした鮮かな顔を窓硝子に押着けて節をつけて言つた。

「主——や貧しき四人を憐み給——へ！」

ロマシヨーフは窓の把手を掴んだが、まだ外側の二重窓が取外されてないのに氣が附いた。彼は俄かに嬉しさうな決心に溢れて、力一杯二重窓を引張つた。窓はとうとうぱつと音を立て、開いた。で、ロマシヨーフの頭に石灰や乾いたペンキの破片がばらばらと降り

かゝつた。白い花の柔い、優美な、楽しい香りに浸された涼しい空氣が流れるやうに室の中へさつと入り込んだ。

「これでいゝ！かうして出口を見出さなけりやならん！」と、嬉しさうな笑聲がロマシヨーフの心の中で叫んだ。

「ローモチカさん！狂人さん！あなた何をしていらつしやるの？」

ロマシヨーフは窓から差延した肉桂色の手袋にびつたりくるまつてゐる彼女の繊細な手を取つて強く接吻した。始めは手の先からだん／＼上の手首や、ボタンの開いた穴にまで接吻した。彼はこんなことは今迄つひぞしたことはなかつた。が、彼女は恰も彼の心にふいに起つた勇ましい歡喜の波に身を任せてゐるかのやうにうつとりして彼の接吻に逆はうともしなかつた。そして唯吃驚したやうに微笑みながら彼に見惚れてゐた。

「アレキサンドラ・ペトローウナさん！何と私はあなたにお禮を申していゝやら分りません。」

「ローモチカさん、あなたはまアどうなすつたの？何がそんなに嬉しいの？」と、彼女は



笑ひながらなほまじくと物好きにロマシヨーフに見入りながら言つた。「あなたの眼は輝いてゐますね。ちよいとお待ちなさい。私あなたが閉門されてゐますから差入物を持って参りましたの。今日は私共で珍しい甘い林檎のお菓子を持へたもんですから……ステパンや、さあ籠を持ってお出で。」

ロマシヨーフは彼女の手を放さずに輝かしい惚れ惚れした眼差で彼女に見惚れてゐた——彼女はそれにも逆はなかつた——そうして慌だしく彼は言つた。

「あゝ！今朝私がどんなことを考へてゐたかもしあなたに御存じだつたら……あゝあなたが御存じなすつたわけでも！ですがこのことは後のことにしませう……」

「え、後にしませう……あれ、良人が、私の命令者が参ります……手を放して頂戴！あなたまア今日は大層異つていらつしやることね。その上幾許もお立派におなりなすつてよ。」

窓の側へニコラーエフ中尉が近づいてきた。彼は顔を顰めて、稍々素氣なくロマシヨーフに挨拶した。

「お歸り、シユーロチカ！お歸りよ！」と、彼は妻を急ぎ立てた。「一體なんといふことだ。お前達はほんとに氣でも狂つたのか。聯隊長に聞えたらどうするんだ！ロマシヨーフ君！君は謹慎中の身ぢやないか。では、さよなら。また寄り給へ！」

「お寄りなさいね、ローモチカさん」と、シユーロチカは繰返した。彼女は窓を離れたが直ぐに戻つてきて早口に呟いた。

「あのね、ローモチカさん、ほんとに私共をお忘れなすつてはいけませんよ。私が親友として交る方はたつた一人つきりよ。それはあなたですわ。唯ね、そんな羊のやうな眼をして私を見ないやうにね。でないと私あなたの顔を見るのが厭になりますわ。何卒ねえ、ローモチカさん、自分のことを餘りくよくよく考へないでねえ。あなたはほんとに男らしくな  
すわ。」

七 譴責

三時半にロマシヨーフの所へ聯隊副官のフェドロフスキイ二等大尉が立寄つた。この人は聯隊貴婦人等の言つてゐる通り、背の、スリとした代表的の青年將校で、冷靜な眼付をして、濃い鼻髭は肩の邊まで延びてゐた。彼は非常に慇懃ではあつたが、下級將校等に對しては嚴格な武斷的な態度を取つて、誰とも親しまなかつた。そして自分の職務上の位置を如何にも高く見てゐた。で、中隊長等は彼に阿諛つてゐた。

室へ入つて来て、彼は眼をすぼめながらロマシヨーフのみすばらしい身の廻りの物をチロ／＼見廻した。その時まで寢臺に横臥んでゐた少尉は慌て、飛び起きて、顔を赫らめながら急いでシャツのボタンを詰め始めた。

「僕は聯隊長殿の仰せで來たのだがね」と、フェドロフスキイ二等大尉は素氣ない調子で言つた。

「早く服を着けて僕と一緒に出掛けて呉れ給へ。」

「ではちよつと失禮します……直ぐですから……服は平常のでよろしいでせうか？御免なさい、どうも一向無遠慮なものですから。」

「何卒御遠慮なく。服は禮服を着け給へ。ちよつと坐つてゐても宜いかね？」

「さあ、何卒。失禮致しました。御茶は如何ですか？」ロマシヨーフは遠てた。

「さや、有難う。何卒急いでくれ給へ。」副官はロマシヨーフが服を着てゐる間、外套も手袋も脱らずに、椅子に腰掛けてゐた。ロマシヨーフはそは／＼して、用もないのに慌て、自分の薄汚い肌着を羞しがつてゐた。フェドロフスキイ副官は眞直に身動きもせず坐つたままきつとした石のやうな顔をして、佩劍の柄に手を措いてゐた。

「聯隊長殿はなんの御用でせう？あなたを存じないですか？」

副官は肩を凍めた。

「妙な質問だね。どうして僕が知つてゐるやう。それは勿論僕より君の方がよく知つてゐる筈だ……仕度は済んだかね。君、劍帯を肩章の上でなく、下へ通した方がいゝだらう。

聯隊長殿はそれがお嫌ひだから。さう、その通りだ……さあ出掛やう。」

門口には脊の高い二頭の肥え太つた聯隊の馬をつけた馬車が立つてゐた。將校等はそれに乗つて出掛けた。ロマシヨーフは副官を窮屈にさせまいとして、慇懃になるべく身を脇へ寄せるやうにしたが、副官はさもそれには氣が付かない風であつた。途中で彼等はウエーキン中尉に出遇した。中尉は副官と敬禮を取交したが、すぐ副官の後から振返つたロマシヨーフに名状し難い皮肉な身振をした。それがちやうど「どうだ君、審問にでも曳張られたのか」と言つてゐるやうであつた。まだ五六人の將校等に出遇した。ある者は、ひろくと、ある者は吃驚したやうに、またある者はさも嘲つてゐるやうにロマシヨーフを眺めた。そして彼は彼等に見られる度に思はず身を縮めた。

シユリゴウイチ大佐はすぐにはロマシヨーフを引見しなかつた。大佐の書齋には誰か來てゐるやうであつた。で、彼は薄暗い應接間で待たされた。そこには林檎の香や、ナフタリンの香や、新しく漆を塗つた器物の香や、まだ何かの一種特別な香かしてゐた。それはちやうど有福な、キチンとしたドイツの家庭の衣物や器物の香のやうな悪くない匂ひであつた。ロマシヨーフは應接間を、あちこちと歩きながら、テカテカした橄欖の梓縁を嵌め

た姿見に映る自分を幾度も眺めた。その都度、彼には自分の顔が厭に蒼褪めて醜く、そしてなんとなく不自然に見えた。それから禮服が餘りに古ぼけて肩章がひどく皺くちやになつてゐるやうに見えた。

始めのうちは書齋から大佐の低い、沈んだ單調な低音が聞えてゐるばかりであつた。言葉は聞えなかつたが、その抑揚の烈しい、激したやうな語勢で察すると、大佐は頑固なとても和さうもない憤怒を發して誰かを叱つてゐるらしかつた。それが五分間許り續いた。やがてシユリゴウイチ大佐は突然黙つてしまつた。誰かの歎願するやうな願え聲が聞えた。それがちよつと途切れたかと思ふと、ふいに恐しい傲慢と憤怒と侮蔑とを含んだ言葉がロマシヨーフの耳に一句々判然と聞えて來た。

『なんだつて君は俺を馬鹿にするんだ。子供？ 妻？ 君の子供なんか唾でも吐き掛けてやりたい。子供を拵へる前に、どうして養つて行くかそれを考へるが、何？ ふん、今になつてで免下さい大佐殿だ？ 大佐殿は君の事にはちつとも責任はないぞ。大尉、いゝかね。もし今大佐殿が君を將校會議に附さなけりや、それがために俺の職責上の罪になるのだ。』

なんだと？ 黙れ！ 過失ぢやない、罪なのぢや。一體君は聯隊なんか居る資格はない。何處にゐるのが適當だか君こそ知つとるだらう、どうだ？」

また悸々した歎願の聲が顫えるやうに聞えた。それはまるで人間らしいところがないと思はれるほど憐れつばい聲であつた。(あゝ一體どうしたんだらう)と、ロマシヨーフは姿見の傍にゐるで釘付けにされたやうになつて、自分の蒼ざめた顔を真正面に眺めてはゐたが、それには氣をも留めずに、たゞ譯もなく自分の心臓がわく／＼して病的に顫えるのを感しながらかう思つた。(あゝなんとといふ怖ろしいことだらう！……)

訴へるやうな聲は大分長いこと續いた。それが止むとまた聯隊長の底力のある低音が鳴り響いた。が、今度は稍々穩かに和いでゐた。それがちやうど大佐はもう自分の忿怒を啜り盡して、他人の屈服したのを見て、威力の渴望を満足させたといつたふうであつた。大佐は断れ断れに言つた。

『宜しい、それが最後だぞ。よく憶えて置くがい。これがもう最後だぞ。いゝかね？ 君のその酔つぱらつた赤鼻の上によく刻み付けておくがい。もし今度君が飲んだくれた

といふことが俺の耳に入つたら……何？ よし、よし、君の誓ひは解つた。今度の俺の檢閲に中隊を準備しておくだらうな。いや、中隊ぢやない、大隊だ！ 一週間後に俺が自分で行つて檢閲するからな……して、それから俺は君に忠告するが、第一に君は兵卒の給金と會計とを整理し給へ。いゝかね？ それは明日中にしてしまはにやいけないぞ。何？ 俺になんの關係があらう？ 君が生れ變つたところで……それから大尉、これでもう君には用はないよ。ではさよなら！』

誰か書齋でござ／＼と動く氣配がしたと思ふと、足を爪立て、靴音をさせながら戸口へ出た。が、すぐに聯隊長は眞面目らしく非常に聲を荒らげて呼止めた。

『待て、こゝへ來い。ささや喰度もう酒は飲まんだらうな？ え？ 借金なんかしないだらうな？ え？ この馬鹿、馬鹿、馬鹿野郎……悪魔はもうささやの腎臓まで喰ひ込んでゐる。一度が二度、三度、四度と重つて……幾百度になるか知れやしない。もうこの上容赦ならぬぞ。大尉、ささやは何といふ愚劣な奴だらう』と、大佐は次第に聲を高めて呶鳴つた。

「もう決してこんなことをしちやならん！ほんとに卑劣極まる！……だが、空わ出る、出る、どこへでも勝手に出て行け。さやうなら。」

と、小柄なスウェトウイードフ大尉が真赤になつて鼻や額に汗を浮かべながら、きまりの悪い取亂した顔をして應接間へ入つて来た。彼は右の手を隠袋の中に入れて、新しい紙幣を烈しくがさぐささせた。ロマシヨーフを見ると彼は足を緩めて冗談のやうな作り笑ひをして、自分の湿つた、熱い、顔てる手で少尉の手を強く握つた。彼の眼はひきつツて差しさうにきよとくしてゐた。そして同時にロマシヨーフが今のことを聞いてゐたかゝないかを探らうとしてゐるやうであつた。

「残酷だ！虎のやうだ！」と、彼は書齋の方を願で指して無遠慮に小聲で叫んだ。「だが、なんでもない！」と、スウェトウキードフ大尉は手早く神経質的に二度十字を切つて、「まア何でもなくてありがたい、ありがたい！」

「ボンダーレンコ！」と、壁の向うで隊長が叫んだ。彼の大きな聲は一時に家の隅々まで響き渡つて應接間の薄い隔壁がびりびりと揺れたやうだつた。彼はいつも用事の時には、

自分の非凡な咽喉を頼んで呼鈴を用ひなかつた。「ボンダーレンコ！まだそこに誰かゐるのか？呼んで来い！」

「小獅子のやうだ！」と、スウェトウイードフ大尉は苦笑ひして叫んだ。「では、少尉、失敬。まア善い相談でもし給へ。」

入口から従卒がひよいと入つて来た。その男はにやけた傲慢な顔をして、油を塗つた髪を横の方で分けて、真白な毛糸の手袋を嵌めた典型的な隊長附の従卒であつた。彼は叮嚀な調子で、同時に荒々しく少尉の眼を真正面に見ながら眼を窺めるやうに言つた。

「大佐殿があなたをお呼びであります。」

かう言つて彼は脇の方立つて書齋の戸を開けた。そして自分は道を開けるやうにして後退りした。ロマシヨーフは入つた。

シユリゴウウイチ大佐は入口の左の隅の机の側に坐つてゐた。服は灰色の背廣を着て、その下から立派なびか／＼したシャツが見えてゐた。彼は筋張つた赤い手を木造の安樂椅子の肘臺に載せてゐた。その短い刷毛のやうな白髪と楔形をした白い腮髯との生えてゐる

大きな老人らしい顔は厳格に、そして冷静であつた。色の褪せた明い眼は意地悪さうにきら／＼してゐた。少尉の敬禮に對して大佐はちよつと頭を振つた。ロマシヨーフはふと大佐の耳に十字架のついた半月形の銀の耳飾の掛つてゐるのを見た。そして心の中で、「おや俺は今迄あの耳飾を見たことはなかつたが」と思つた。

『いかなあ』と、聯隊長は腹の底から押し出すやうな、吼えるやうなドツ聲で始めた。そして少時間を置いて、『君、恥しくないのか！』と彼はだん／＼聲を高めて續けた。『聯隊に来てから、まだ一年に一週間ほど足りない癖にもう怠け出してゐる。君にも不満足な理由は澤山あるだらうさ。まあ一體なんといふことだ。聯隊長が注意を與へるのに、少尉の分際でなんだかだと讒言を吐かしてさ。みつともないぢやないか！』大佐はロマシヨーフが慄え上る程大きな聲で、いかに嘔鳴り立てた。『とても考へられないことだ。放埒極まる！』

ロマシヨーフは苦い顔をして傍の方を見てゐた。彼にはこの世のどんな力も彼の眼を移して大佐の顔を眺めさせることはできないやうに思はれた。(俺の自我はどこにあるんだ？)

と、急に彼は己れを嘲りたくなつた。(かうしてきさまは不動の姿勢を取つて黙つてゐなければならぬのだ。)

『どうして俺に知れたか君には言はんが、君が飲んでるといふことはよく知れてゐるぞ。實にけしからんことだ。まだ學校を出たばかりの青二才の癖に、集會所で靴屋の小僧みたいに飲んだくれるなんて。俺は君、皆知つとるぞ。俺の眼から何も隠すことは出来ない。俺には君さへ不審がるくらゐ澤山色々の事實が知れてゐる。君が下り坂を轉り落ちたいといふのなら仕方がないが、しかし君に最後の注意を與へておく。俺の言ふことをよく聽いて置くが、初めの一杯が、二杯、三杯と重つて、終ひには何處かの堀の下でくたばつてしまふやうになる。屹度さうなるに決まつてゐる。よく頭に刻みつけておくが、それからいゝかね。我々がいくら忍耐強いといつても、天使の忍耐だつて破れることがある……よく氣を付ける！、そして我々に迷惑を掛けないやうにしる！君だけなら宜いけれど、將校社會は一つの家族だからな。いつだつて……君の尻尾を掴んで外へ放り出すことができる。』

（俺は立つてゐる、俺は黙つてゐる）と、ロマシヨーフは大佐の耳に掛つてゐる耳飾りを傍眼も振らず見詰めながら懶さうに考へた。だが、俺はそんな家族なんか尊重してゐない。今すぐでもその家族を離れて、豫備に入ることができるとか、もう言ふことができる。言つてやらうかしら？この俺に言へるかしら？）ロマシヨーフの心臓はまたぶる／＼と慄えて、その上彼は唇を力なげに動して唾を呑んだが、やつぱり前のやうに身動きもしなかつた。

『さう、一體君の行動は……』と、シュリゴウイチ大佐は厳しい調子で續けた。例へば、君は去年、まだ一年も勤めないのに退職を願ひ出たことがある。なんだか君の母が病氣だとか言つて母から来た手紙を見せたことがある……俺は自分の部下の將校を信じない譯にはいかない。まア君が母だと言ふなら母でもいい、そりや有りがちのことだ。だが、君——それがみな何もかもさうだといふ譯にはいくまい。解つたか……』

ロマシヨーフはもう先刻から自分の右足の膝が初めはやつと分るくらゐだつたが、だんだんと強くがた／＼慄えてくるのを覺えた。とう／＼この神経の不隨意運動が著しく目立

つやうになつて、それがために身體全體が慄え出した。それが非常にさまり悪く、自分ながら厭な氣がする。ロマシヨーフはシュリゴウイチ大佐に、自分の身慄ひは大佐を恐れられた所爲だと思はれるのを羞しく思つた。が、大佐が彼の母のことを言ひ出すと、ふいに熱した、人を酔せるやうな血が頭に上つて忽ち身慄ひが止んだ。そして彼は始めて眼を上へあけて自分で氣の附くぐらゐキツとした傲慢な顔付をして、シュリゴウイチ大佐の鼻柱を眞正面に執拗く、憎さげに見詰めた。その顔付はまるで恐しい上官と小さな部下とを別つてゐる大きな楷段をなくしたやうであつた。と、室中が急に眞暗になつて、まるで幕を掛けたやう。そして聯隊長の低い聲が、とある森然とした深みに沈んで行くやうであつた。氣味悪い暗黒と静寂の時が来た。そして思想もなく、意志もなく、あらゆる外來の印象も消えて、たゞ今この瞬間に何か馬鹿げた、取返しが付かない、えらいことが起るだらうといふ恐しい一の確信の外には殆ど無意識であつた。ふと、ロマシヨーフの耳に、外から妙な、まるで別人のやうな聲が呟いた。（今俺は彼奴を打つ敵いてやる）と、ロマシヨーフは徐かに眼を肉付のいゝ、老人らしい、大きな頬に移した……

やがて彼はぼろつと、夢みてるやうに、シユリゴウイチ大佐の眼の中に驚愕や、恐怖や、不安や、悲哀が交る交る映つてゆくのを見た……：：：：：シユリゴウイチの心をあれほど恐ろしく必然的に囚へた無智な、避け難い波動は忽ちバタリと崩れて、溶けて、遠く流れ去つて了つた。シユリゴウイチはちやうど今日を醒したといふやうに深く、力ある太息を吐いた。と直ちに彼の眼中にはあらゆる物が單純に平凡に見えた。シユリゴウイチ大佐は慌だしく彼に椅子をすゝめて、思ひ掛けないぞんざいな愛嬌のある調子で言ひだした。

「いや……：：：：君はなんとといふ怒りつばい男だらう……：：：：：まア坐り給へ。君はまアどうしたといふんだ！ うむ……：：：：君達は皆さうだ。俺をまるで黙かなんどのやうに思つてゐる。何を毫碌爺が下らんことを吐しやがるとかう思つてゐるだらう。だが俺は」と、大佐の沈んだ聲は熱のある波立つやうな調子に頓えて來た。「だが俺は、ほんとうに、君達をみな自分の子供のやうに可愛がつてるのぢや。まア君達は俺が君達のために苦勞してゐないと思つてるのか？ 氣を病まないと思つてるのか？ 君達はまるで俺を解してゐないのだ。まア……、いや、いや。俺は少し怒り過ぎた。激昂し過ぎた。だが老人に腹を立てることはできまい？ さあ仲直りをしよう。これでおしまひだ。手を出し給へ。そして一緒に晝飯でも喰はう。」

シユリゴウイチ大佐には子供がなかつた。彼の妻の、まるくと肥太つた、頸の短い二重頸の、勿體ぶつた無口な婦人が給仕に出た。彼女は鼻眼鏡を掛けて傲慢な眼付をしてるのにも似合はず、顔は頗る平凡で、ちやうどいびつに焼き付けられたパンに乾葡萄で目を附けたやうな印象を興へた。彼女の後から足音をたて、大佐の老母が出て來た。小柄

シユリゴウイチ大佐は黙つて頭を下げて、差し出された大きなふつくりした冷たい手を握つた。屈辱の感は去つてしまつたが、彼はなんとなく氣が揚らなかつた。今朝の勿體ぶつた傲慢な思想に引換へて今は自分を小さな憫らしい、蒼ざめた小學生のやうに、またはある愛せられない見捨てられた臆病な小兒のやうに感じた。そしてこの氣分の變化を彼は恥しく思つた。それがため彼は大佐の後に跟いて食堂に行きながら、例の如く心の中で自分を三人稱にして考へた。

（暗い思ひは彼の顔に皺を作つた。）

シユリゴウイチ大佐には子供がなかつた。彼の妻の、まるくと肥太つた、頸の短い二重頸の、勿體ぶつた無口な婦人が給仕に出た。彼女は鼻眼鏡を掛けて傲慢な眼付をしてるのにも似合はず、顔は頗る平凡で、ちやうどいびつに焼き付けられたパンに乾葡萄で目を附けたやうな印象を興へた。彼女の後から足音をたて、大佐の老母が出て來た。小柄



で、耳は遠いがまだなか〜元気で、意地悪さうな強情な老婆であつた。彼女はローシヨーフを眼鏡越しにまじ〜と無遠慮に頭から足の先まで眺めながら、自分の小さな薄黒い皺だらけになつたミイラの碎片のやうな手をロマシヨーフに差出して、その唇に突き着けた。それから大佐に向つてまるで自分達二人の外は食堂には誰も居ないといつたやうな調子で訊ねた。

「これは誰方かね？ 何だか見覚えがないやうだが。」

シユリゴーフウイチ大佐は手を話筒のやうに口へ當て、老婆の耳のすぐ傍で叫んだ。

「ロマシヨーフ少尉ですよ、おつかさん。立派な將校です……な〜の豪者でして……幼年學校出身です。」

「あ、さうだ！」と、大佐はふと思ひ出して、「少尉！君は確か生れはペンザ縣だつたね？」と訊いた

「左様であります、大佐殿。ペンザ縣の者です。」

「あ、さう、さう……俺は今思出した。我々は同郷人ぢやないか。確か君はナロウチ

ヤツ郡だつたね？」

「確かにさやうであります、ナロウチヤツ郡で。」

「あ、さうか……どうして俺は忘れたのだらう？ ナロウチヤツは杭ばかり突立つてるところだね。だが、我々はインサルのものだ。ねえ、おつかさん！」と、彼はまた母の耳に向つて話筒を拵へて、「ロマシヨーフ少尉はペンザの人ですよ！……ナロウチヤツ郡ですよ！……同郷人ですよ！」

「あゝ！」と老婆は意味ありげに眉を動して、「さう、さう……私もさうだと思つた。

ではお前さんは、シーシキンさんの息子さんですね。」

「おつかさん！ 違ひますよ！ 少尉の苗字はロマシヨーフといふのです、シーシキンなんてまるつきり違ひますよ……」

「さう、さう……私もさういうたでせう……シーシキンさんは私もよう知らないよ……唯噂で聞いてゐたばかりで。だが、ペョートルさんなら幾度も遇つたことがありますよ。領地續きでね。ほんとにまあよろこぶお出でした、お前さん……」

『老いぢれた椋鳥さんが何か囁りだしたぞ。』と、大佐は、ぞんざいに愛想よく小聲で言つた。  
 『坐り給へ、少尉……フエドローフスキイ中尉！』大佐は戸の方に向つて叫んだ。『そ  
 こをしまつてウオツカを飲みに来給へ！……』

聲に應じて副官が食堂へつか／＼と足早に入つて来た。副官は、大抵の聯隊がさうだが、  
 いつも聯隊長のところで食事をするのであつた。静かに慣れ慣れしくガチャ／＼拍車を鳴  
 らしながら、彼は肴の出でゐる別仕立の小卓に着いて酒を注いで、はゆ／＼と飲んだり食  
 つたりした。ロマシヨーフは彼に嫉妬と、そして一種の可笑しな、形ばかりの敬意を表し  
 た。

『君、ウオツカはどうだ？』と、シユリゴウイチ大佐は訊ねた。『飲むだらう？』

『い、え、ありがたうございます。私はなんだか飲みたくありません。』ロマシヨーフは噁  
 れた聲でかう答へて咳をした。

『そ、それでこそぢや。さうゐるべきぢや。これからいつもさういふふうにしてもらひ  
 たさね。』

食事は飽きるほど澤山あつて、おいしかつた。子供のない大佐夫婦は美食といふ無邪氣な  
 慾に耽つてゐるらしかつた。若根と若葉との香りのい、ソップや粥と雑ぜた焼魚や、美事  
 に飼ひ肥らせた家鴨や、サラダなどが出た。食卓の上には白葡萄酒と赤葡萄酒とマデラ酒  
 との入つた三本の壺が置いてあつた。みんなもう口を開けて銀の立派な栓を抜いてあつた  
 が、外國商標の付いた上等な高價なものであつた。大佐はさつきの疝癢が大分彼の食慾を  
 誘うたと見えて、殊更にうまさうによく食べるので、彼を見てゐるさへ氣持がよかつた。  
 彼は、べつに無邪氣に粗笨に滑稽を言つては笑はせた。サラダを出した時彼は眩い程眞白  
 な硬いナフキンを襟に深く押込んで愉快さうに言つた。

『もしも俺が國王であつたら、しよつちうサラダばかり食べてゐるんだがなあ！』

だが、その前にフライの出た時に彼は堪らなくなつて上官らしい口調でロマシヨーフに  
 呷鳴つた。

『少尉！ フォークを脇へ置き給へ。フライやカッレツは特別に肉叉で食べるものだ。いか  
 んな！ 將校になつたら食べ方ぐらゐは知つてゐなければならん。どの將校も至尊の御倍食

に招待を受けないとも限らぬのだから。よく憶えとき給へ。』

ロマシヨーフは食事中手をどこへ置いていゝか分らないので、大方は机の下へ置いて卓布の總をいぢくりながら、キマリ悪さうにもぢ〜と窮屈さうに坐つてゐた。彼はもう久しい以前から立派な家庭の空氣や、ちやんと整つた、豊かな器具や、食事の作法などに遠かつてゐたのである。彼は絶えずある一つの思ひに掻き亂されてゐた。(なんといふ厭なことでだらう。俺はこの屈辱的な響應を拒むことができなかった。拒み得なかつたとは、俺もなんたる弱い卑怯な奴だらう。さあ俺は今すぐに立上つて、みんなに挨拶して出て行かう。なんとも勝手に言ふが、彼奴だつて俺を食ひ殺しはしまし。俺の心や、思想や、意識を取つてしまふやうなことはしまし。さう出て行かうか?)すると、また彼は心臓が悸々と痺れて、心の動搖に顔さへ蒼くなつて、我と我身を恨みながら、しかもそれを斷行し得ないといふことを感じたのであつた。

コーヒーが出た頃はもう夕刻であつた。赤々とした斜めな夕日は窓に射し込んで薄暗い壁紙や、卓布や、硝子の器や、食事をしてゐる人々の顔に、キラ〜とした赤銅色の斑点を落

した。あらゆる物がみなこの黄昏のあるうら悲しい魅力にひつそりと静まり返つてゐた。

『俺がまだ少尉の頃に』とシユリゴウイチ大佐が話し始めた。『俺達の旅團長はフオファノフ將軍だつたが、非常に愛嬌のある老人で、勇敢な將校だつたよ。カントニスト(生前に編入せられ、生後軍隊にて教育せらるゝ兵士の子息を云ふ。此制は一八五六年アレキサンデル二世によりて廢止せらるゝ)の出身らしかつた。將軍が鼓手を檢閲する時には——將軍は無性に太鼓が好きだつたが——傍へ寄つて(さあ兄弟、俺に一つ悲しい曲を聴かせてくれ)と斯う言ふのだつた。うむ、それから將軍はお客の來てゐる時でも十一時になればちやんと寢床に就いたものだ。よく客に向つて、かう言ひ〜したよ、(さあ諸君は食つて、飲んで、楽しみ給へ。俺はネブチユンの懐に行くから)と。で、みな(それはモルフエイでせう? 閣下…) (モルフエイは睡眠の神にしてモルフ)と言ふと、(や、なんでもいゝさ、どうせ同じミネラロヂイ(金石學の意。ミホロヂイ(神)だ…)と言ふのだつた…)その通り俺も今』と、シユリゴウイチ大佐は立ち上つて前垂を椅子の脊に掛けて、『やつぱりそのネブチユンの懐に行くから。君等は自由にし給へ。』

將校等は立ち上がつて脊延びをした。(彼の薄い唇には皮肉な苦々しい微笑が浮んだ)と

ロマシヨーフは例の三人稱で考へた。しかしたゞ考へたに過ぎない。なぜなら彼はこの瞬間自分の顔が憐れつばい、蒼ざめた、醜い、かしくやつたやうな表情をしてゐたと感じたから。

ロマシヨーフは家へ歸りながら、またしても自分があたかもどこか見知らぬ暗黒な敵地へでも打捨られたやうな失望と孤獨と憂愁とを感じた。西の空はまだ鳩色の重り合つた重しい密雲のうちに紅い琥珀色の夕映が燃えてゐた。ロマシヨーフにはまたも、遙か地平線のかなたに、家や野のあなたに華美と幸福とに充された生活をしてゐる美しい空想的な町があるやうに思はれた。

通りは急に薄暗くなつた。舗道を猶太人の小兒等が喚きながら駆けてゐた。どこか寒さ防げの土堤や門口や耳門や庭のまはりで、女の笑聲が聞えた。それが早春にのみ聞えるやうな、ある熱した動物的な歡喜の戦慄のやうに、始終興奮してゐるやうに響いた。ロマシヨーフの心には静かな、沈み勝ちな哀愁と同時に妙にばんやりした追憶や、かつて實現されたことのない幸福や、それにもまして美しかつた過去の春に對する愛惜の情が湧いて

きた。して、心の中には未來の戀のぼうつとした甘い豫感がうごめいてゐた……

彼は家へ歸つて來ると薄暗い臺所にガイナーンがブーシキンの半身像に向つて立つてゐるのを見た。大詩人はすつかり油で塗り廻されてゐた。その前に燃えてゐる蠟燭の光が彼の鼻や、厚い唇や、筋ばつた頸にてかくした斑點を投げてゐる。だが、ガイナーン自身は寢臺の代りに用ゐてゐる三枚の板の上に、トルコ風に坐つて身體を前後に搖振りながら、何か長つたらしい單調な文句を歌のやうに吐いてゐた。

「ガイナーン！」と、ロマシヨーフは彼を呼んだ。

從卒はぶるつと震えながら寢臺から立ち上つて直立した。その顔には恐怖と狼狽とが浮んでゐる。

「それはアルラ(同々教)か？」とロマシヨーフは親しげに訊いた。

チエレミス人の髭のない小兒々々した口が長い微笑に大きく開いた。そのため彼の美事な真白な齒並が蠟燭の光に輝いた。

「は、アルラ様です、少尉殿！」